

此のものの語の起つた土地は、清きと、美しきと、二筋の大川、市の兩端を流れ、眞中央に城の
天守尙ほ高く聳え、森黒く、濠蒼く、國境の山岳は重疊として、湖を包み、海に沿ひ、橋と、坂
と、辻の柳、蕨の浪の町を抱いた、北陸の都である。

一年、激しい旱魃のあつた眞夏の事。

……と言ふと忽ち、天に可恐しき入道雲湧き、地に水論の修羅の巷の流れたやうに聞えるけれ
ど、決して、そんな、物騒な沙汰ではない。

怒る折から、地方巡業の新劇團、女優を主とした帝都の有名なる大一座が、此の土地に七日間
の興行して、全市の湧くが如き人氣を博した。

極暑の、早と言ふのに、たとひ如何なる人氣にせよ、湧くの、煮えるのなどは、口にするも暑
くるしい。が、——諺に、火事の折から土藏の焼けるのを防ぐのに、大盥に満々と水を湛へ、蠟
燭に灯を點じたのを其の中に立てて目塗をすると、壁を透して煙が裡へ張つても、火氣を呼ばな

いで安全だと言ふ。……火を以て火を制するのださうである。

こゝに女優たちの、近代的情熱の燃ゆるが如き演劇は、恰も此の轍だ、と稱へて可い。雲は焚
け、草は萎み、水は涸れ、人は喘ぐ時、一座の劇は宛然褥熱に對する氷の如く、十萬の市民に、
一劑、清涼の氣を齎らして剩餘あつた。

膚の白さも雪なれば、瞳も露の涼しい中にも、舉つて座中の明星と稱へられた村井紫玉が、
「まあ……前刻の、あの、小さな兒は？」

公園の茶店に、一人靜に憩ひながら、緋鹽瀬の煙管筒の結目を解掛けつゝ、偶と思つた。……
鬚も女優卷でなく、故とつい通りの束髪で、薄化粧の淡酒した意氣造。形容に合せて、煙草入
も、好みて持つた氣組の婀娜。

で、見た處は藝妓の内證歩行と云ふ風だから、まして女優の、忍びの出、と言つても可い風采。
また實際、紫玉は此の日は忍びであつた。演劇は昨日樂に成つて、座の中には、直ぐに次興行
の隣國へ、早く先乗をしたのが多い。が、地方としては、此まで經歷つた其處彼處より、觀光に
價値する名所が夥い、と聞いて、中二日ばかりの休暇を、紫玉は此の土地に居残つた。そして、
旅宿に二人附添つた、玉野、玉江と云ふ女弟子も連れないで、一人で密と、……日盛も恚うした
身には苦にならず、町中を見つゝ、漫に來た。

惟ふに、太平の世の國の守が、隠れて民間に微行するのは、政を聞く時より、どんなに可得意であらう。落人の其ならで、そよと鳴る風鈴も、人は晝寢の夢にさへ、我名を呼んで、讚美し、歎賞する、微妙なる音響、と聞えて、其の都度、ハツと隠れ忍んで、微笑み／＼通ると思へ。深張の涼傘の影ながら、尙ほ面影は透き、色香は仄めく……心地すれば、誰憚るともなく自然から俯目に俯向く。謙讓の棲はづれば、倨傲の襟より品を備へて、尋常な姿容は調つて、燒地に焦りつく影も、水で描いたやうに涼しくも清爽であつた。僅少に疊の縁ばかりの、日影を選んで迎るのも、人は目を睜つて、鯨に乗つて人魚が通ると見たであらう。……素足の白いのが、すら／＼と黒縞子の上をなれば、溝の流も清水の音信。で、眞先に志したのは、城の櫓と境を接した、三つ二つ、全國に指を屈すると云ふ、景勝の公園であつた。

二

公園の入口に、樹林を背戸に、蓮池を庭に、柳、藤、櫻、山吹など、飛々に名に呼ばれた茶店がある。紫玉が、いま腰を掛けたのは柳の茶屋と言ふのであつた。が、紅い袴で、色白な娘が運んだ、

煎茶と煙草盆を袖に控へて、然まで嗜むともない、其の、伊達に持った煙草入を手にした時、——「……あれは女の兒だつたか知ら、其とも男の兒だつたらうかね。」

——と思ひ出したのは其である。——

で、華奢造りの黄金煙管で、餘り馴れない、些と覺束ない手つきして、青磁色の手つきの瀬戸火鉢を探りながら、

「……帽子を……被つて居たとすれば、男の兒だらうが、青い鉢巻だつけ。……麥藁に巻いた切だつたらうか、其ともリボンか知ら。色は判然覺えて居るけど、……お待ちよ、——と恚うだら。……」

取つて着けたやうな喫み方だから、見ると、もの／＼しいまでに、打傾いて一口吸つて、

「……年紀は、然うさね、七歳か六歳ぐらゐな、色の白い上品な、……男の兒にしては些と綺麗過ぎるから女の兒——だとりボンだね。——青いリボン。……幼稚くたつて緋と限りもしないわね。では、矢張り女の兒か知ら。それにしては麥藁帽子……尤もおさげに結つてれば……だけど、其處までは氣が付かない。……」

大通りは一筋だが、道に迷ふのも一興で、其處ともなく、裏小路へ紛れ込んで、低い土塀から瓜、茄子の畠の覗かれる、荒れ寂れた邸町を一人で通つて、まるつ切人に行合はず。白熱した日

其の御手洗の高い縁に乗つて居る柄杓を、取りたい、と又稚兒が然う言つた。
紫玉は思はず微笑んで、

三

あゝ、其がため足場を取つては、取替へては、手を伸ばす、が爪立つても、青い巾を巻いた、
其の振分髪、まろが丈は……筒井筒其の半にも届くまい。

「一寸……何をして居るの。」
「水が欲しいの。」
と、あどけなく言つた。
あゝ、其がため足場を取つては、取替へては、手を伸ばす、が爪立つても、青い巾を巻いた、
其の振分髪、まろが丈は……筒井筒其の半にも届くまい。

盛に、よくも羽が焦げないと思ふ、白い蝶々の、不意にスツと来て、驟々と擦違ふのを、吃驚した顔をして見送つて、そして莞爾……したり……然うした時は象牙骨の扇で一寸招いて見たり。
……土塀の崩屋根を仰いで血のやうな百日紅の咲満ちた枝を、涼傘の尖で擦ぐる、と堪らない。
とぶるくゆさくゆさくとするのに、「御免なさい。」と言つて見たり。石垣の草蒸に、棄ててある瓜の皮が、化けて脚が生えて、むくくくと動出しさうなのに、「あれ。」と飛退いたり。取留めのないすさびも、此の女の人氣なれば、話せば逸話に傳へられよう。
低い山かと思つた、樹立の繁つた高い公園の下へ出ると、坂の上り口に社があつた。
宮も大きく、境内も廣かつた。が、砂濱に鳥居を立てたやうで、拜殿の裏には鬱々たる其の公園の森を負ひながら、廣前は一面、真空なる太陽に、礫の影一つなく、唯白紙を敷詰めた光景なのが、日射に、やゝ黄んで、渺として、何處から散つたか、百日紅の二三點。
……覗くと、静まり返つた正面の階の傍に、紅の手綱、朱の鞍置いた、つくりものの白の神馬が寂寞として一頭立つ。横に公園へ上る坂は、見透しに成つて居たから、涼傘のまゝスツと鳥居から抜けると、紫玉の姿は色のまゝ、鳥居の柱に映つて通る。……其處に屋根圍した、大なる石の御手洗があつて、青き龍頭から湛へた水は、且つすらくと玉を亂して、颯と簾に噴溢れる。其手水鉢の周圍に、唯一人……其の稚兒が居たのであつた。

「あら、恠うすれば仔細はないよ。」

と、半身を斜めにし、溢れかゝる水の一筋を、玉の雫に、颯と散らして、赤く燃ゆるやうな唇に請けた。ちやうど渴いても居たし、水の潔い事を見たのは言ふまでもない。

「ねえ、お前。」

稚児が仰いで、熟と紫玉を視て、

手を淨める水だもの。」

直接に吻を接するのは不作法だ、と咎めたやうに聞えたのである。

劇壇の女王は、氣色した。

「いやにお茶がつてるよ、生意氣な。」と、軽く其の頭を掌で叩き放しに、衝と廣前を切れて、坂に出て、見返りもしないで、扱てやがて此の茶屋に憩つたのであつた。――

今思ふと、手を觸れた稚児の頭も、女か、男か、不思議に其の感覚が残らぬ。氣は涼しかったが、暑さに、幾干か茫としたものかも知れない。

「娘さん、町から、此の坂を上る處に、お宮がありますわね。」

「はい。」

「何と言ふ、お社です。」

「浦安神社でございますわ。」と、片手を疊に、娘は行儀正しく答へた。

「何神様が祭つてあります。」

「お父さん、お父さん。」と娘が、つい傍に、蓮池に向いて、(じんべ)と言ふ膝ぎりの帷子で、眼鏡の下に内職らしい網をすいて居る半白の父を呼ぶと、急いで眼鏡を外して、コッソと水牛の柄を疊んで、臺に乗せて、其から向直つて、丁寧な辭儀をして、

え、浦安様は、浦安かれとの、其の御守護おやさうにござりまして。水をばお司りなされませ、龍神と申すこととござります。これの、太夫様にお茶を替へて上げぬかい。」

紫玉は我知らず衣紋が縮つた。……稱へかたは相應はぬにもせよ、拙な山水畫の裡の隠者めいた老人までが、確か自分を知つて居る。

心着けば、正面神棚の下には、我が姿、昨夜も扮した、劇中女主人公の王妃なる、玉の鳳凰の如きが掲げてあつた。

「そして、……」

聲も朗かに、且つ慎ましく、

「龍神だと、女神ですか、男神ですか。」

「さ、さ。」と老人は膝を刻んで、恰も此の間を待構へたやうに、

「其の儀は、とかくに申しまするが、如何か、孰れとも相分りませぬ。此の公園のつツと奥に、眞暗な巖窟の中に、一ヶ處清水の湧く井戸がござります。古色の夥しい青銅の龍が蟠つて、井桁に蓋をして居りまして、金網を張り、みだりに近づいては成りませぬが、靈澤金水と申して、此がために此の市の名が起りましたと申します。此が奥の院と申す事で、え、貴方様が御意の浦安神社は、其の前殿と申す事でござります。御參詣を遊ばしましたか。」

「あ、否」と言つたが、すぐ又稚兒の事が胸に浮んだ。それなり一時言葉が途絶える。

森々たる日中の樹林、濃く黒く森に包まれて城の天守は前に聳ゆる。茶店の横にも、見上げるばかりの槐、椈の暗い影が樅楓を薄く交へて、藍緑の流に群青の瀬のある如き、たら／＼上りの徑がある。瀧かと思ふ蟬時雨。光る雨、輝く木の葉、此の炎天の下蔭は、恰も稻妻に籠る穴に似て、もの凄くまで寂寞した。

木下闇、其の横徑の中途に、空屋かと思ふ、廂の朽ちた、誰も居ない店がある……

四

鎖してはないものの、奥に人が居て住むかさへ疑はしい。其とも日が暮れると、白い首でも出て些とは客が寄りうも知れぬ。店一杯に難壇のやうな臺を置いて、最ど薄暗いのに、三方を黒布

で張廻した、壇の附元に、流星の鬮、乾びた蛾に似たものを、點々並べたのは的である。地方の盛場には時々見掛ける、吹矢の機關とは一目視て紫玉にも分つた。

實は——吹矢も、化ものと名のついたので、幽霊の廂の幕から倒にぶら下り、見越入道は詭へた穴からヌツと出る。雪女は拵への黒屏に薄り立ち、産女鳥は石地藏と並んで悄乎々々。一ツ目小僧の豆腐買は、流灌頂の野川の縁を、大笠を俯向けて、跣足でちよ／＼と巧みに歩行くと、仕掛ものに成つて居る。……如何はしいが、生霊と札の立つた就中小さな的に吹當ると、床板がぐわらりと轉覆つて、大松茸を抱いた緋の禪のおかめが、とんぼ返りをして莞爾と飛出す。途端に、四方へ引張つた綱が揺れて、鐘と太鼓がしたらでんで一齊にくわんぐわらん、どんどと鳴つて、其で市が榮えた、店なのであるが、一ツ目小僧のつたひ歩行く波張が切々に、藪壘は打倒れ、飾の石地藏は仰向けに反つて、視た處、ものあはれなまで寂れて居た。

——其の軒の土間に、背後むきに蹲んだ僧形のものがある。坊主であらう。墨染の麻の法衣の破れ／＼な形で、鬱金も最う鼠に汚れた布に——すぐ、分つたが、——三味線を一挺、盲目の琵琶背負に背負つて居る、漂泊ふ門附の類であらう。

何をか働く。人目を避けて、蹲つて、虱を捻るか、瘡を搔くか、辨當を使ふとも、掃溜を探した干魚の骨を舐るに過ぎまい。乞食のやうに薄汚い。

紫玉は敗竄した藝人と、荒涼たる見世ものに對して、深い歎息を漏らした。且つあはれみ、且つ可忌しがつたのである。

灰吹に薄い唾した。

此の世盛りの、思ひ上れる、美しき女優は、樹の綠蟬の聲も滴るが如き影に、框も自然から浮いて高い處に、色も濡々と水際立つ、紫陽花の花の姿を撓わに置きつゝ、翡翠、紅玉、眞珠など、指環を三つ四つ嵌めた白い指をツト舉げて、鬢の後毛を搔いた次手に、白金の高彫の、翼に金剛石を鏤め、目には血髓玉、嘴と爪に綠寶玉の象嵌した、白く輝く鸚鵡の釵——何某の伯爵が心を籠めた贈ものとして、人は知つて、(伯爵)と稱ふる其の釵を抜いて、脚を返して、喫掛けた火皿の脂を浚つた。……伊達の煙管は、煙を吸ふより、手すさみの科が多い慣習である。

三味線背負つた乞食坊主が、引搔くやうにもぞくぞくと肩を揺ると、一眼ひたと首ひた、眇の青ぶくれの面を向けて、恚う、引傾つて、熟と紫玉の其の狀を視ると、肩を抽いた杖の尖が、一度胸へ引込んで、前屈みに、よたりと立つた。

杖を徑に突立て、迎々しく下閣を蠢いて下りて、城の方へ去るかと思へば、のろく後退をしながら、茶店に向つて、吻と、立直つて一息吐く。

紫玉の眉の顰む時、五間ばかり軒を離れた、其處で早や、此方へぐつたりと叩頭をする。

知らない振して、目をそらして、紫玉が釵に俯向いた。が、濃い睫毛の重く成るまで、坊主の影は近いたのである。

「太夫様。」

ハツと顔を上げると、坊主は既に敷居を越えて、目前の土間に、兩膝を折つて居た。

「……………」

「お願でござります。……お慈悲ぢや、お慈悲、お慈悲。」

假初に置いた涼傘が、襪褌法衣の袖に觸れさうなので、密と手元へ引いて、

「何ですか。」と、坊主は視ないで、茶屋の父娘に目を遣つた。

立つて聲を掛けて追はうともせず、父も娘も靜に視て居る。

五

少時すると、此の早に水は涸れたが、碧綠の葉の深く繁れる中なる、緋葉の瀧と云ふのに對して、紫玉は蓮池の汀を歩行いて居た。こゝに別に瀧の四阿と稱ふるのがあつて、八ッ橋を掛け、飛石を置いて、枝折戸を鎖さぬのである。

で、瀧のある位置は、柳の茶屋からだ、もとの道へ小戻りする事に成る。紫玉はあの、吹矢

の徑から公園へ入らないで、引返したので、……涼傘を投遣りに睨しながら、袖を柔かに、手首をや、硬くして、彼處で抜いた白金の鸚鵡の釵、其の翼を一寸抓んで、晃乎とぶら下げて居るのであるが。

仔細は希有な、……

坊主が土下座して「お慈悲、お慈悲。」で、お願と言ふのが金でも米でもない。施與には違ひなけれど、變な事には「お禁厭をして遣はされい。蟲齒が疚いて堪へ難いでな。」と、成程左の頬がぶくりとうだばれたのを、堪難い狀に掌で抱へて、首を引傾けた同じ方の一眼が白くどろんどろんとして潰れて居る。其の目からも、ぶよぶよとした唇からも、汚い液が垂れさうな鹽梅。「お慈悲ぢや。」と更に拜んで、「手足に五寸釘を打たれうとても、恁までの苦惱はございますまいぞ、お情ぢや、禁厭うて遣はされ。」で、禁厭とは別儀でない。——其の紫玉が手にした白金の釵を、齒のうろへ挿入て欲しいのだと言ふ。

「太夫様お手づから。……龍と蛞蝓ほど違ひましても、生あるうちは私ぢやとて、藝人の端くれ。太夫様の御光明に照らされますだけでも、此の疼痛は忘れませう。」と、はッはッと息を吐く。

……
既に、何人であるかを知られて、土に手をついて太夫様と言はれたのでは、其の所謂禁厭の斷

り悪さは、金錢の無心をされたのと同じ事——但し手から手へ渡すも恐れる……落して釵を貸さうとすると、「あ、いや、太夫様、お手づから。……貴女様の膚の移香、脈の響をお釵から傳へ受けたいのでござります。貴方様の御血脈、其が禁厭に成りますので、お手に釵の鳥をばお持ち遊ばされて、はい、はい、はい。」あん、と口を開いた中へ、紫玉は止む事を得ず、手に持添へつ、釵の脚を挿入れた。

喘ぐわ、舐るわ！ 鼻息がむツと掛る。堪らず袖を卷いて唇を蔽ひながら、勢ひ、釵とともに、や、白やかな手の伸びるのが、雪白なる鴛鳥の七寶の瓔珞を掛けた風情なのを、無性髻で、チュツバと啜込むやうに、坊主は犬蹲に成つて、頤でうけて、どろりと嘗め込む。

唯、紫玉の手には、ぶぶくと響いて、腐れた瓜を突刺す氣味合。

指環は緑紅の結晶したる玉の如き虹である。眩しかつたらう。坊主は開いた目も閉ぢて、憎とした顔色で、しつきりもなしに、だらりと涎を垂らす。「あ、手がだるい、まだ？」「いま一息。」

不思議な光景は、美しき女が、針の尖で怪しき魔を操る、舞臺に於ける、神祕なる場面にも見えた。茶店の娘と其の父は、感に堪へた觀客の如く、呼吸を殺して固唾を飲んだ。

……「あ、お有難や、お有難い。トンと苦惱を忘れしました。お有難い。」と三味線包、がつくり

と抜衣紋。で、兩掌を仰向け、低く紫玉の雪の爪尖を頂く眞似して、「恠やうに穢いものなれば、くどくお禮など申して、お身近は却つてお目觸り、御恩は忘れぬぞや。」と胸を捻ぢるやうに杖で立つて、

「お有難や、有難や。あ、苦を忘れて腑が抜けた。もし、太夫様。」と敷居を跨いで、蹠跟杖に振向いて、「あの、其のお釵に……」——「え。」と紫玉が鸚鵡を視る時、「齒くさが着いては居りませぬか。恐縮や。……えひ。」とニヤリとして、

「ちやつとお拭きなされませい。」此がために、紫玉は手を掛けた懷紙を、餘儀なく一寸逡巡つた。同時に、あらぬ方に蒼と面を背けた。

六

紫玉は待兼ねたやうに懷紙を重ねて、伯爵、を清めながら、森の徑へ行きまじか、坊主は、と訊いた。父も娘も、へい、と言つて、大方然うだらうと言ふ。——最う影もなかつたのである。父娘は唯、紫玉の舉動にのみ氣を奪られて居たらう。……此の邊を歩行く門附見たいなもの、と又訊けば、父親がつひぞ見掛けた事はない。娘が跣足で居ました、と言つたので、旅から紛込んだものか、其も分らぬ。

と、言ふうちにも、紫玉は一寸々眉を擧めた。抜いて持った釵、鬢摺れに髪に返さうとする、と、呀、する毎に、手の撓ふにさへ、得も言はれない、異な、變な、惡臭い、堪らない、臭氣がしたのであるから。

城は公園を出る方で、其處にも影がないとすると、吹矢の道を上つたに相違ない。で、後へ續くには堪へられぬ。

其處で瀧の道を訊いて——此處へ来た。——
泉殿に擬へた、飛々の亭の孰れかに、邯鄲の石の手水鉢、名品、と教へられたが、水の音より蟬の聲。で、勝手に通抜けの出来る茶屋は、晝寝の半ばらしい。何の座敷も寂寞して人氣勢もなかつた。

御齒黒蜻蛉が、鐵漿つけた女房の、微な夢の影らしく、ひらくと一つ、葉ばかりの燕子花を傳つて飛ぶのが、此のあたり御殿女中の逍遙した昔の幻を、寂しく描いて、都を出た日、遠く来た旅を思はせる。

すべて舊藩侯の庭園だ、と言ふにつけても、贈主なる貴公子の面影さへ浮ぶ、伯爵の鸚鵡を何とせう。

靈廟の土の瘡を落し、祕符の威徳の鬼を追ふやう、立處に坊主の蟲齒を癒したは然ることなが

ら、路々も悪臭さの消えないばかりか、口中の臭氣は、次第に持つて手を傳つて、袖にも移りさうに思はれる。

紫玉は、樹の下に涼傘を疊んで、瀧を斜めに視つ、池の縁に低く居た。

瀧は、早に爾く骨なりと雖も、巖には苔蒸し、壺は森を被いで蒼い。然も巖がくれの裏に、どうと落ちたぎる水の音の凄じく響くのは、大槌を伏せて二重に城の用水を引いた、敵に對する要害で、地下を城の内濠に灌ぐと聞く、戦國の餘殘ださうである。

紫玉は釵を洗つた。……艶なる女優の心を得た池の面は、萌黄の薄絹の如く波を伸べつ、拭つて、清めるばかりに見えたのに、取つて黒髪に挿さうとすると、些と離したくらはるでは、耳の邊へも寄せられぬ。鼻を衝いて、ツンと臭い。

「あ」と聲を立てたほどである。

雫を切ると、雫まで芬と臭ふ。たとへば貴重なる香水の薫の一滴の散るやうに、洗へば洗ふほど流せば流すほど香が廣がる。……二三度、四五度、繰返すうちに、指にも、手にも、果は指環の綠碧紅黄の珠玉の數にも、言ひやうのない悪臭が蒸れ掛るやうに思はれたので。……

「え、」

紫玉はスツと立つて、手のはすみで一振振つた。

「ぬしにお成りよ。」

白金の羽の散る状に、ちら／＼と映ると、釵は瀧壺に眞蒼な水に沈んで行く。……あはれ、呪はれたる仙禽よ。卿は熱帯の鬱林に放たれずして、山地の碧潭に謫されたのである。……ト此の奇異なる珍容を迎ふるか、不可思議の獲ものに競ふか、靜なる池の面に、眠れる魚の如く縦横に横はつた、樹の枝々の影は、尾鰭を跳ねて、幾千ともなく、一時に皆揺動いた。

此に悚然とした状に、一度すぼめた袖を、はら／＼と翼の如く搏いたのは、紫玉が、可厭しき移香を拂ふとともに、高貴なる鸚鵡を思ひ切つた、安からぬ胸の波動で、尙ほ且つ翻々とふるひながら、衝と飛退くやうに、瀧の下行く棧道の橋に退いた。

石の反橋である。巖と石の、いづれにも累れる牡丹の花の如きを、左右に築き上げた、銘を石橋と言ふ、反橋の石の眞中に立つて、吻と一息した紫玉は、此の時、すらりと、脊も心も高かつた。

七

明眸の左右に樹立が分れて、一條の大道、炎天の下に展けつ、日盛の町の大路が望まれて、煉瓦造の避雷針、古い白壁、寺の塔など睫を擽る中に、行交ふ人は點々と蝙蝠の如く、電車は光

りながら山椒魚の這ふのに似て居る。
忘れもしない、眼界の其の突當りが、昨夜まで、我あればこそ、電燭の宛然水晶宮の如く輝いた劇場であつた。

あゝ、一翳の雲もないのに、緑紫紅の旗の影が、ぱつと空を蔽ふまで、花やかに目に翻つた、唯見ると颯と近づいて、眉に近い樹々の枝に色鳥の種々の影に映つた。
蓋し劇場に向つて、高く翳した手の指環の、玉の矜の幻影である。

紫玉は、瞳を返して、華奢な指を、俯向いて視つゝ、莞爾した。

そして、すら／＼と石橋を前方へ渡つた。それから、森を通る、姿は翠に青ずむまで、靜に落着いて見えたけれど、二ツ三ツ重つた不意の出來事に、心の騒いだのは争はれない。……涼傘を置忘れたもの。……

森を高く抜けると、三國見霽しの一面の廣場に成る。赫と射る日に、手廂して恁う視むれば、松、櫻、梅いろ／＼樹の状、枝の振の、各自名ある神仙の形を映すのみ。幸ひに可忌い坊主の影は、公園の一本一草をも妨げず。又……人の往來ふさへ殆どない。

一處、大池があつて、朱塗の船の、漣に、浮いた汀に、盛装した妙齡の派手な女が、番の鴛鴦の宿るやうに目に留つた。

眞白な顔が、揃つて此方に向いたと思ふと。

「あら、お嬢様」

「お師匠さん」

一人が最う、空氣草履の、媚かしい褻捌きで驅けて來る、目鼻は玉江。……最う一人は玉野であつた。

紫玉は故郷へ歸つた氣がした。

「不思議な處で、と言ひたいわね。見ぶつかい。」

「えゝ、觀光團」

「何を悪戯をして居るの、お前さんたち。」

と連立つて寄る、汀に居た玉野の手には、船首へ掛けつゝ、棹があつた。

舩は藍、萌黃の翼で、頭にも尾にも紅を塗つた、鸕首の船の屋形造。玩具のやうだが四五人は乗れるであらう。

「お嬢様。おめしなさいませんか。」

聞けば、向う岸の、むら萩に庵の見える、船主の料理屋には最う交渉濟で、二人は慰みに、此から漕出さうとする處だつた。……お前さんに漕げるかい、と覺束なさに念を押すと、淺くて棹

が届くのだから仔細ない。但、一ヶ所底の知れない深水の穴がある。龍の口と稱へて、此處から下の瀧の伏樋に通するよし言傳へる、……危くはないけれど、其處だけは除けたが可からう、と、……こんな事には氣輕な玉江が、つい驅出して仕誼を言ひに行つたのに、料理屋の女中が、わざわざ出て来て注意をした。

「あれ、彼處ですわ。」と玉野が指す、大池を良の方へ寄る處に、板を浮かせて、小さな御幣が立つて居た。眞中の築洲に鶴ヶ島と言ふのが見えて、祠に龍神を祠ると聞く。……鷓首の船は、其の島へ志すのであるから、瀧の口は近寄らないで濟むのであつたが。

「乗らうかね。」

と紫玉は最う棲を巻くやうに、爪尖を揃へながら、

「でも何だか。」

「あら、何故ですえ。」

「御幣まで立つて警戒をした處があつちやあ、遠くを離れて漕ぐにしても、船頭が船頭だから氣味が悪いもの。」

「否、あの御幣は、そんなおどかしぢやありませんの。不斷は何にもないんださうですけれど、二三日前、誰だか雨乞だと言つて立てたんださうですの、此の早ですから。」

八

岸をトンと盪すと、屋形船は軽く出た。おや、房州で生れたかと思ふほど、玉野は思つたより巧に棹さす。大池は靜である。舷の朱欄干に、指を組んで、頬杖ついた。紫玉の胡粉のやうな眩の下に、萌黄に藍を交へた鳥の翼の揺るゝのが、其處にばかり美しい波の立つ風情に見えつゝ、船はするゝと滑つて、鶴ヶ島をさして滑かに浮いて行く。

然までの距離はないが、月夜には柳が煙るぐらるな間で、島へは棹の數百ばかりはあらう。玉野は上手を遣る。

さす手が五十ばかり進むと、油を敷いたとろりとした靜な水も、棹に搔かれて何處ともなしに波紋が起つた、其の所爲であらう。あの底知らずの龍の口とか、日射も其處ばかりはもの朦朧として淀むあたりに、——微との風もない折から、根なしに浮いた板ながら眞直に立つて居た白い御幣が、スースーと少しづつ、位置を轉へて、夢のやうに一寸二寸づつ、動きはじめた。

凝と、……視るに連れて、次第に、緩く、柔かに、落着いて弧を描きつゝ、其の圓い線の合する處で、又スースーと、一寸二寸づつ、動出すのが、何となく池を廣く大きく押擴げて、船は遠く、御幣は揺に、不思議に、段々汀を隔るのが心細いやうで、氣も浮かりと、紫玉は、便少ない心持

がした。

「大丈夫かい、彼處は渦を巻いて居るやうだがね。」

欄干に頬杖したまゝ、紫玉は御幣を凝視しながら言った。

「詰りませんね、少し渦でも巻かなければ、餘り静で、橋の上を這つてゐるやうですもの、」

とお轉婆の玉江が洒落でもないらしく、

「玉野さん、船を彼方へ遣つて見ないか?……」

紫玉が壓へて、

「不可いよ。」

「否、何ともありませんわ。それだし、もしか、船に故障があつたら、おーいと呼ぶか、手

を敲けば、すぐに誰か出て来るからつて、女中が然う言つて居たんですから。」とまた玉江が言ふ。

成程、島を越した向う岸の萩の根に、一人乗るほどの小船が見える。中洲の島で、納涼ながら

酒宴をする時、母屋から料理を運ぶ通船である。

玉野さへ興に乗つたらしく、

「お嬢様、船を少し廻しますわ。」

「だつて、こんな池で助船でも呼んで覽たが可い、飛んだお笑ひ草で末代までの恥辱ぢやあない

か。あれお止しよ。」

と言ふのに、——逆について船がぐいと廻りかけると、ざぶりと波が立つた。其の響きかも知

れぬ。小さな御幣の、廻りながら、遠くへ離れて、小さな浮木ほどに成つて居たのが、ツウと浮

いて、板ぐるみ、グイと傾いて、水の面にぴたりとついたと思ふと、岡龍の頭、繪ける鬼火の如

き一條の脈が、龍の口からむくりと湧いて、水を一文字に、射て疾く、船に近づくと齊しく、波

はざつと鳴つた。

女優の船頭は棹を落した。

あれく、其の波頭が忽ち船底を噛むかと思へば、傾く船に三人が聲を殺した。途端に二三尺

あとへ引いて、薄波を一煽り、其の形に煽るや否や、人の立つ如く、空へ大なる魚が飛んだ。

瞬間、島の青柳に銀の影が、パツと映して、魚は紫立つたる鱗を、牙えた金色に輝かしつ、颯

と刃ねたのが、驟然と宙を躍つて、船の中へ堂と落ちた。其時、水がドブンと鳴つた。

舳と艦へ、二人はアツと飛退いた。紫玉は欄干に縋つて身を轉はす。

落ちつ、洞の間で、一刹那、勿ねると、其のはすみに、船も動いた。——見事な魚である。

「お嬢様!」

「鯉、鯉、あら、鯉だ。」

と玉江が夢中で手を敲いた。
此の大なる鯉が、尾鰭を曳いた、波の引返すのが棄てた棹を攫つた。棹はひとりでに底知れずの方へツラ／＼と流れて行く。

九

「……太夫様……太夫様。」

偶と紫玉は、宵闇の森の下道で眞暗な大樹巨木の梢を仰いだ。……思ひ掛けず空から呼掛けたやうに聞えたのである。

「一寸燈を、……」

玉野がぶら下げた料理屋の提灯を留めさせて、さし交す枝を透かしつゝ、——何事と問ふ玉江に、

「誰だか呼んだやうに思ふんだがねえ。」

と言ふ……お師匠さんが、樹の上を視て居るから、

「まあ、そんな處から。」

「然うだねえ。」

紫玉は、はじめて納得したらしく、瞳をそらす時、鬚に手を遣つて、釵に指を觸れた。——指を觸れた釵は鸚鵡である。

「此が呼んだのか知ら。」

と微酔の目を花やかに莞爾すると、

「あら、お嬢様。」

「可厭ですよ。」

と仰山に二人が怯えた。女弟子の驚いたのなぞは構はないが、讀者を怯しては不可い。瀧壺へ投沈めた同じ白金の釵が、其の日のうちに再び紫玉の黒髪に戻つた仔細を言はう。

池で、船の中へ鯉が飛込むと、弟子たちが手を拍つ、立騒ぐ聲が響いて、最初は女中が小船で来た。……島へ渡した細綱を手繰つて、立ちながら操るのだが、馴れたもので、あとを二押三押、屋形船へ来ると、由を聞き、魚を視て、「まあ」と目を睜つた切、慌しく引返した。が、間もあらせず、今度は印半纏を被た若いものに船を操らせて、亭主らしい年配な法體したのが漕ぎつけて、「これはく太夫様。」亭主も逸早く其を知つて居て、恭しく挨拶をした。浴衣の上だけけれど、紋の着いた薄羽織を引かけて居たが、扱て、「改めて御祝儀を申述べます。目の下二尺三貫目は掛りませう。」とて、……及び腰に覗いて魂消て居る若衆に目配せで領せて、「恁やうな大魚、然も出世

魚と申す鯉魚の、お船へ飛込みましたと言ふは、類希な不思議な祥瑞。おめでたう存じまする、皆、太夫様の御人徳。續きましては、手前預りまする池なり、所持の屋形船。烏澁がましようござりますが、従つて手前どもも、太夫様の福分、徳分、未曾有の御人氣の、はや幾分かおこぼれを頂戴いたしたも同じ儀で、恚やうな心嬉しい事はござりませぬ。尙ほ恚くの通りの早魃、市内は素より近郷隣國、唯炎の中に悶えまする時、希有の大魚の躍りましたは、甘露、法雨やがて、禽獸草木に到るまでも、雨に蘇生りまする前表かとも存じまする。三寶の利益、四方の大慶。太夫様にお祝儀を申上げ、われらとても心祝ひに、此の鯉魚を肴に、祝うて一獻、心ばかりの粗酒を差上げたう存じまする。先づ風情はなくとも、あの島影にお船を繋ぎ、涼しく水ものをさしあげて、やがてお席を母屋の方へ移しませう。」で、辭退も會釋もさせず、紋着の法然頭は、最う屋形船の方へ腰を据ゑた。

若衆に取寄せさせた、調度を控へて、島の柳に纏つた頃は、然うでもない、汀の人立を遮るためと、用意の紫の幕を垂れた。「神慮の鯉魚、等閑にはいたしませんまい。略儀ながら不束な田舎料理の庖丁をお目に掛けまする。」と、ひたりと直つて眞魚箸を構へた。

「釵は鯉の腹を光つて出た。——龍宮へ往來した釵の玉の鸚鵡である。」

「太夫様——太夫様。」

ものを言はうも知れない。——

とばかりで、二聲聞いたやうに思つただけで、何の氣勢もしない。

風も囁かず、公園の暗夜は寂しかった。

「太夫様。」

「太夫様。」

うっかり釵を、又おさへて、

「可厭だ、今度はお前さんたちかい。」

十

——水のすぐれ覺ゆるは、

西天竺の白鷺池、

じんじやうきよゆうにすみわたる、

昆明池の水の色、

行末久しく清むとかや。

「お待ち。」

紫玉は耳を澄した。道の露芝、曲水の汀にして、さらりと音する流の底に、聞きも知らぬ三味線の、沈んだ、陰気な調子に合せて、微に唄ふ聲がする。

「坊さんではないか知ら……」
紫玉は胸が轟いた。

あの漂泊の藝人は、鯉魚の神祕を視た紫玉の身には、最早や、うみ汁の如く、唾、涎の臭い乞食坊主のみではなかつたのである。

「……あの、三味線は、」

夜陰のこんな場所でも、もしや、と思ふ時、搔消えるやうに音が留んで、ひたくと小石を潜つて響く水は、忍ぶ琵琶のやうに聞える。

紫玉は立留まつた。

再び、名もきかぬ三味線の音が陰々として響くと、

——日本一にて候ぞと申しける。鎌倉殿ことごとくしや、何處にて舞ひて日本一とは申しけるぞ。梶原申しけるは、一歳百日の早の候ひけるに、賀茂川、桂川、水瀬切れて流れず、筒井の水も絶えて、國土の惱みにて候ひけるに、——
聞くものは耳を澄まして袖を合せたのである。

有驗の高僧貴僧百人、神泉苑の池にて、仁王經を講じ奉らば、八大龍王も慈現納受たれ給ふべし、と申しければ、百人の高僧貴僧を請じ、仁王經を講ぜられしかども、其驗もなかりけり。又或人申しけるは、容顏美麗なる白拍子を、百人めして、——

「御坊様。」
今は疑ふべき心も失せて、御坊様、と呼びつゝ、紫玉が暗中を透して、聲する方に、縋るやうに寄ると思ふと、

「燈を消せ。」

と、蕭びたが力ある聲して言つた。

「提灯を……」

「は、」と、返事と息を、はッはッとはずませながら、一度消損ねて、慌しげに吹消した。玉野の手は震へて居た。

——百人の白拍子をして舞はせられしに、九十九人舞ひたりしに、其驗もなかりけり。靜一人舞ひたりとても、龍神示現あるべきか。内侍所に召されて、祿おもきものにて候にと申したりければ、とても人数なれば、唯舞はせよと仰せ下されければ、靜が舞ひたりけるに、しんむしやうの曲と言ふ白拍子を、——

燈を消すと、あたりが却つて朦朧と、薄く鼠色に仄めく向うに、石の反橋の欄干に、僧形の墨の法衣、灰色に成つて、蹲るか、と視れば欄干に胡坐搔いて唄ふ。

橋は心覚えのある石橋の巖組である。氣が着けば、あの、かくれ瀧の音は遠くだうくと鳴つて、風の如くに響くが、掠れるほどの絲の音も亂れず、唇を合すばかりの唄も遮られず、嵐の下の蟲の聲。が、形は著しいものではない、胸をくしゃくと折つて、坊主頭を、かく、と俯向けて唄ふので、頸を抽いた轉進に掛る手つきは、鬼が角を弾くと言はば嚴めしい、寧ろ黒猫が居て顔を洗ふと言ふのに適する。

——なから舞ひたりしに、御輿の嶽、愛宕山の方より黒雲俄に出来て、浴中にかゝると

見えければ、——

と唄ふ。……紫玉は腰を折つて地に低く居て、弟子は、其の背後に蹲んだ。

——八大龍王鳴渡りて、稻妻ひらめきしに、諸人目を驚かし、三日の洪水を流し、國土安穩なりければ、扱こそ靜の舞に示現ありけるとて、日本一と宣言を給りけると、承り候。——

時に唄を留めて黙つた。

「太夫様。」

餘り尋常な、ものいひだつたが、

「は、」と、呼吸をひいて答へた紫玉の、身動きに、帯がキと擦れて鳴つたほど、深く身に響いて聞いたのである。

「癩坊主が、ねだり言を肯うて、千金の釵を棄てられた。其の心操に感じて、些細ながら、禮心に密と内證の事を申す。貴女、雨乞をなさるが可い。——天の時、地の利、人の和、まさしく時節ぢや。——この大池の中洲の島に、かりの法壇を設けて、雨を祈ると觸れてな。……袴、練衣、烏帽子、狩衣、白拍子の姿が可からう。衆人めぐり見る中へ、其の姿をあゝの島の上へ高く顯し、大空に向つて拜をされい。祭文にも歌にも及ばぬ。天龍、雲を遣り、雷を放ち、雨を漲らすは、明午を過ぎて申の上刻に分毫も相違ない。國境の山、赤く、黄に、峰嶽を重ねて爛れた奥に、白蓮の花、玉の掌ほどに白く聳えたのは、四時に雪を頂いて幾萬年の白山ぢや。貴女、時を計つて、其の鸚鵡の釵を抜いて、山の其方に向つて翳すを合圖に、雲は龍の如く湧いて出よう。——尙ほ其の上に、可いか、名を擧げられい。……」

——賢人の釣を垂れしは、

嚴陵瀨の河の水。

月影ながらもる夏は、

翌日の午後の公園は、炎天の下に雲よりは早く黒く成つて人が湧いた。煉瓦を羽蟻で包んだやうな凄じい群集である。

かりに、鎌倉殿として置かう。此の……縣に成上の豪族、色好みの男爵で、面構も風采も巨頭公に良似たのが、劇興行のはじめから他に手を貸さないで紫玉を最戻した、既に昨夜も或處で一所に成る約束があつた。其の間の時間を、紫玉は微行したのである。が、思ひも掛けない出来事のために、大分の隙入をしたものの、船に飛んだ鯉は、其のよしを言づけて初穂と言ふのを、氷詰めにして、紫玉から鎌倉殿へ使を走らせたほどなのであつた。——

車の通ずる處までは、最う自動車が出来待つて居て、やがて、相會すると、或時間までは附添つて差支へない女弟子の口から、眞先に豫言者の不思議が漏れた。

一議に及ばぬ。

其の夜のうちに、池の島へ足代を組んで、朝は早や法壇が調つた。無論、略式である。

縣社の神官に、故實の詳しいのがあつて、神燈を調へ、供饌を捧げた。

島には鎌倉殿の定紋ついた帷幕を引繞らして、威儀を正した夥多の神官が詰めた。紫玉は、さきほどからこゝに控へたのである。

あの、底知れずの水に浮いた御幣は、やがて壇に登るべき立女形に對して目觸りだ、と逸早く取退けさせ、樹立さしいで蔭ある水に、例の鷓首の船を泛べて、半は紫の幕を絞つた裡には、鎌倉殿をはじめ、客分として、縣の顯官、勳位の人々が、杯を置いて籠つた。——雨乞に參するのに、杯をめぐらすと言ふ故實は聞かぬが、しかし事實である。

俗人の奏樂一順して、ヒユウと簫の音の虚空に響く時、柳の葉にちら／＼と緋の袴がかゝつた。群集は波を揉んで動搖を打つた。

あれに眞白な足が、と疑ふ、緋の袴は一段、階に割られて、二條の紅の霞を曳きつゝ、上紫に下萌黄なる、蝶鳥の刺繡の狩衣は、緑に透き、葉に靡いて、柳の中を、する／＼と、容顏美麗なる白拍子。紫玉は、色ある月の風情して、一千の花の燈の影、百を數ふる雪の供饌に向うて法壇の正面にすらりと立つ。

花火の中から、天女が斜に流れて出て、群集は此の時くらる驚異の念は起すまい。

烏帽子もともに此の装束は、織ものの模範、美術の表品、源平時代の參考として、嘗て博覽會にも飾られた、鎌倉殿が秘藏の、いづれ什物であつた。

扱て、遺憾ながら、此の晴の舞臺に於て、紫玉のために記すべき振事は更にない。渠は學校出の女優である。

が、姿は天より天降つた妙に艶なる乙女の如く、國を圍める、其の赤く黄に爛れたる峰嶽を貫いて、高く柳の間に懸つた。

紫玉は恭しく三たび虚空を拜した。

時に、宮妓の装した白丁の下男が一人、露店の飴屋が張りさうな、澁の大傘を疊んで肩にかついだのが、法壇の根に顯れた。——此は怪しからず、天津乙女の威嚴と、場面の神聖を害つて、何うやら華魁の道中じみたし、雨乞には些と行過ぎたもののやうだつた。が、何、降るものと極れば、雨具の用意をするのは賢い。……加ふるに、紫玉が被いだ装束は、貴重なる寶物であるから、驚破と言はばさし掛けて濡らすまいための、鎌倉殿の内意であつた。

——然ればこそ、此のくらの、注意の役に立つたのはあるまい。——

あはれ、身のおき處がなく成つて、紫玉の裾が法壇に崩れた時、「状を見る。」「や、身を投げろ。」「飛込め。」「わつと群集の騷いだ時、……堪らぬ、と飛上つて、紫玉を壓へて、生命を取留めたのも此の下男で、同時に狩衣を剥ぎ、緋の袴の紐を引解いたのも——鎌倉殿のためには敏捷な、忠義な奴で——此の下男である。

雨はもとより、風どころか、餘の人出に、大池には蜻蛉も飛ばなかつた。

十二

時を見、程を計つて、紫玉は始め、實は法壇に立つて、數萬の群集を足許に低き波の如く見下しつ、昨日通つた坂にさへ蟻の傳ふに似て押覆す人數を望みつ、徐に雪の頤に結んだ紫の纓を解いて、結目を胸に、烏帽子を背に掛けた。

其から伯爵の釵を抜いて、意氣込んで一振り振ると、……黒髪の颯と捌けたのが烏帽子の金に裏透いて、宛然金屏風に名譽の繪師の、松風を墨で流したやうで、雲も龍も其處から湧くか、と視められた。——此だけは工夫した女優の所作で、手には白金が七首の如く輝いて、凄艶比類なき風情であつた。

さて其の鸚鵡を空に翳した。

紫玉の睜つた瞳には、確に天際の僻邊に、美女の掌に似た、白山は、白く清く映つたのである。毛筋ほどの雲も見えぬ。

雨乞の雨は、いつれ後刻の事にして、其のま、壇を降つたらば無事だつたらう。處が、遠雷の音でも聞かすか、暗轉に成らなければ、舞臺に馴れた女優だけに幕が切れない。紫玉は、しかし、

目前鯉魚の神異を見た、怪しき僧の暗示と讖言を信じたのであるから、今にも一片の雲は法衣の袖のやうに白山の眉に飄るであらうと信じて、須臾を待つ間を、法壇を二廻り三廻り緋の袴して輪に歩いた。が、此は鎮守の神巫に似て、然もなんば、と言ふ足どり、少なからず威嚴を損じた。

群集の思はんほども憚られて、腋の下に衝と冷き汗を覺えたのこそ、天人の五衰のはじめとも言はう。

氣をかへて屹と成つて、もの忘れした後見に烈しくきつけかけを渡す状に、紫玉は虚空に向つて伯爵の鸚鵡を投げた。が、あの玩具の竹蜻蛉のやうに、晃々と高く舞つた。

「大神樂！」

と喚いたのが第一番の半疊で。

一人口火を切つたから堪らない。練馬大根と言ふ、おかめと喚く。雲の内侍と呼ぶ、雨しよばを踊れ、と怒鳴る。水の輪の擴がり、嵐の狂ふ如く、聞ても堪へない讒謗罵詈は雷の如く哄と沸く。

鎌倉殿は、船中に於て嚇怒した。愛寵せる女優のために群集の無禮を憤つたのかと思ふと、一然うではない。這般、好色の豪族は、疾く雨乞の驗なしと見て取ると、日の昨の、短夜もはや半ばなりし紗の蚊帳の裡を想ひ出した。……

雨乞のためとて、精進齋させられたのであるから。

「漕げ。」

紫幕の船は、矢を射るやうに島へ走る。

一度、驅下りようとした紫玉の緋裳は、此の船の激しく襲つたために、一度引留められたものである。

と喚く鎌倉殿の、何やら太い聲に、最初、白丁に豆烏帽子で傘を擔いだ宮奴は、島のなる幕の下を這つて、ヌイと面を出した。

すぐに此奴が法壇へ飛上つた、其の疾さ。

紫玉が最早、と思ひ切つて池に飛ばうとする處を、壓へて、そして剝いだ。

女の身としてあられうか。

あの、雪を束ねた白いものの、壇の上にひれ伏した、あはれな状は、月を祭る供物に似て、非ず、早魃の鬼一口の犠牲である。

ヒイと聲を揚げて弟子が二人、幕の内、手放しにわつと泣いた。

赤ら顔の大入道の、首拔きの浴衣の尻を、七のづまで引めくつたのが、苦り切つたる顔して、

つか／＼と、階を踏んで上つた、金方か何ぞであらう、芝居もので、肩を無手と取ると、

「何だ、状は。小町や静ぢやあるめえし、増長をしやがるからだ。」

手の裏かへす無情さは、足も手もぐたりとした、烈日に裂けかゝる氷のやうな練絹の、紫玉の、ふくよかな胸を、酒焼の胸に引摺み、毛脛に挟んで、

「立たねえかい。」

十三

「口惜しい！」

紫玉は舷に縋つて身を震はす。——眞夜中の月の大池に、影の沈める樹の中に、しぼめる睡蓮の如く漾ひつゝ、

「口惜しいねえ。」

車馬の通行を留めた場所とて、人目の恥に歩行みも成らず、——金方の計らひで、——萬松亭と言ふ汀なる料理店に、とに角引籠る事にした。紫玉は唯引被いで打伏した。が、金方は油斷せず。弟子たちにも旨を含めた。で、次場所の興行恣くは面白かるまいと、やけ酒を煽つて居た

が、酔倒れて、其は寝た。

料理店の、あの亭主は、心優しいもので、起居にいたはりつゝ、慰めつゝ、で、此も注意はしたらしいが、深更の然も夏の夜の戸鎖浅ければ、伊達巻の跣足で忍んで出る隙は多かつた。

生命の惜からぬ身には、操るまでの造作も要らぬ。小さな通船は、胸の惱みに、身もたえするまゝに揺動いて、萎れつゝ、亂れつゝ、根を絶えた小船の花の面影は、晝の空とは世をかへて、暗々として雫する月の露吸ふ力もない。

「えゝ、口惜しい。」

亂れがみを捲りつゝ、手で、砕けよ、とハタと舷を打つと……時の間に瘦せた指は細く成つて、右の手の四つの指環は明星に擬へた金剛石のをはじめ、紅玉も、綠寶玉も、スルリと抜けて、きらりと、薄紅に、淺緑に皆水に落ちた。

何うでもなれ、左を試みに振ると、青玉も黄玉も、眞珠もともに、月の美しい影を輪にして沈む、……龍の口は、水の輪に舞ふ處である。

こゝに残るは、名なれば其を誇として、指にも髪にも飾らなかつた、紫の玉唯一つ。——紫玉は、中高な顔に、深く月影に透かして差覗いて、千尋の淵の水底に、いま落ちた玉の縁に似た、門と柱と、欄干と、あれ、森の梢の白鷺の影さへ宿る、櫓と、窓と、樓と、美しい住家を視た。

「ぬしにも成つて、此、此の田舎のものども。」
「継る波に力あり、しかと引いて水を掴んで、池に倒に身を投じた。爪先の沈むのが、釵の鬢の白く羽うつが如く、月光に微に光つた。」

「御坊様、貴方は？」

「あ、山國の門附藝人、誇れば、魔法つかひと言ひたいが、いかな、然までの事もない。昨日から御目に掛けた、あれは手品ぢや。」

坊主は、欄干に擬ふ苔蒸した井桁に、破法衣の腰を掛けて、活けるが如く爛々として眼の輝く青銅の龍の蟠れる、角の枝に、腕を安らかに笑みつゝ言つた。

「私に、何のお怨みで？……」

と息せくと、眇の、ふやけた目珠ぐるみ、片頬を掌でさし蔽うて、

「いや、邊境のものは氣が狭い。貴方が餘り目覺しい人氣ゆるるに、恥入るか、もの嫉みをして、前藝を一寸遣つた。……さて時に承はるが太夫、貴女は其だけの御身分、それだけの藝の力で、人が雨乞をせよ、と言はば、すぐに優伎の舞臺に出て、小町も静も勤めるのかな。」
紫玉は巖に俯向いた。

「其で通るか、いや、さて、都は氣が廣い。——われらの手品は何うぢやらう。」

「え、」

と仰いで顔を視た時、紫玉はゾツと身に沁みた、腐れた坊主に不思議な戀を知つたのである。

「貴方なら、貴方なら——何故、さすらうておいで遊ばす。」

坊主は両手で顔を壓へた。

「面目ない、われら、此處に、高い貴い處に戀人がおはしてな、雲霧を隔てても、其の御足許は動かぬ。呀！」

と、慌しく身を退ると、呆れ顔してハツと手を擴げて立つた。

髪黒く、色雪の如く、厳しく正しく艶に氣高き貴女の、繕はぬ姿したのが、すらりと入つた。月を頸に掛けつと見えたは、眞白な涼傘であつた。

膝と胸を立てた紫玉を、ちらりと御覽すると、白やかなる手尖を軽く、彼が肩に置いて、

「私を打つたね。——雨と水の世話をしに出て居た時、……」

装は違つたが、幻の目にも、面影は、浦安の宮、石の手水鉢の稚兒に、寸分のかはりはない。

「姫様、貴女は。」

と坊主が言つた。

「白山へ歸る。」

あゝ、其の劍ヶ峰の雪の池には、龍女の姫神おはします。

「お馬。」

と坊主が呼ぶと、スツと疊んで、貴女が地に落した涼傘は、身震をしてむくと起きた。手まさぐり給へる緋の總は、忽ち紅の手綱に捌けて、朱の鞍置いた白の神馬。

ずつと騎すのを、轡頭を曳いて、トトトト——と坊主が出たが、

「轡頭をするぞ。それ、錦を着て行け。」

かなぐり脱いだ法衣を投げると、素裸の坊主が、馬に、ひたと添ひ、紺碧なる巖の聳つ岨を、翡翠の階子に乗るやうに、貴女は馬上にひらりと飛ぶと、天か、地か、渺茫たる曠野の中をタタタと蹄の音響。

蹄を流れて雲が漲る。……

身を投じた紫玉の助かつて居たのは、靈澤金水の、巖窟の奥である。うしろは五十萬坪と稱ふる練兵場。

紫玉が、たゞ沈んだ水底と思つたのは、天地を静めて、車軸を流す豪雨であつた。——

雨を得た市民が、自身に破法衣した女優の藝の徳に對する新たなる渴仰の光景が見せたい。

賣色鴨南蠻

はじめ、目に着いたのは——些と申兼ねるが、——とに角、緋縮緬であつた。其の燃立つやうなのに、朱で處々ぼかしの入つた長襦袢で。女は裾を端折つて居たのではない。裾を高々と掲げて、膝で挟んだあたりから、紅がしつとり垂れて、白い足くびを絡つたが、何うやら濡しよびれた不気味さに、然うして引上げたものらしい。素足に染まつて、其の紅いのが映りさうなのに、藤色の緒の重い厚ぼつたい駒下駄、泥まみれなのを、弱々と内輪に揃へて、股を一つ振つた姿で、降りしきる雨の待合所の片隅に、腰を掛けて居たのである。

日永の頃ゆるゑ、まだ暮かゝるまでもないが、やがて五時も過ぎた。場所は院線電車の萬世橋の停車場の、あの高い待合所であつた。

柳はほんのりと萌え、花はふつくりと蒼むだ、昨日今日、緑、紅、霞の紫、春の將に閑ならむとする氣を籠めて、色の濃く、力の強いほど、五月雨か何ぞのやうな雨の灰汁に包まれては、景色も人も、神田川の舟さへ、皆黒い中に、紅梅とも、緋桃とも言ふまい、横しぶきに、血の滴

る如き紅木瓜の、濡れつゝ、ぱつと咲いた風情は、見向ふものの、面のほてるばかり目覺しい。……此の目覺しいのを見て、話の主人公と成つたのは、大學病院の内科に勤むる、學問と、手腕を世に知らるゝ、最近留學して歸朝した秦宗吉氏である。

邊幅を修めない、質素な人の、住居が芝の高輪にあるので、毎日病院へ通ふのに、此の院線を使つて、お茶の水で下車して、あれから大學の所在地まで徒歩するのが習であつたが、五日も七日も斯う降り續くと、何處の道も宛然泥海のやうであるから、勤人が大路の往還の、茶なり黒なり背廣で靴は、まつたく大袈裟だけれど、狸が土舟と言ふ體がある。

秦氏も御多分に漏れず——尤も色が白くて鼻筋の通つた處は寧ろ兎の部に屬しては居るが——歩行惱むで、今日は本郷どぼりの電車を萬世橋で下りて、例の、銅像を横に、大な煉瓦を潛つて、高い石段を昇つた。……此だと、一寸歩行ただけで甲武線は東京の大中央を突抜けて、一息に品川へ……

が、其は段取だけの事サ、時間が時間だし、雨は降る……此處も出入が嚙ぞ籠むだらう、と思つたよりは夥しい混雑で、唯停車場などと、宿場がつて濟しては居られぬ。川留か、火事のやうに湧立ち揉合ふ群集の黒山。中野行を待つ右側も、品川の左側も、二重三重に人垣を造つて、線路の上まで押覆さる。

すぐに電車が来た處で、何うせ一度では乗れはしまし。宗吉は然う斷念めて、洋傘の雫を切つて、軽く黒の外套の脇に挟みながら、薄皮の手袋をスツと手首へ扱いて、割合に透いて見える、何故か、硝子圍の温室のやうな氣のする、雨氣と人の香の、むつと籠つた待合の裡へ、コツ／＼と——矢張泥に成つた——佻い靴の尖を刻むで入つた時、ふと其の目覺しい處を見たのである。

たしか、中央の臺に、まだ大な箱火鉢が出て居た……其處で、ハタと打撞つた其の縮緬の炎から、急に瞳を傍へ外らして、横狀にプラットフォームへ出ようとすると、戸口の柱に、ポンと出た、も一つ赤いもの。

二

威しては不可い。何、黒山の中の赤帽で、其處に腕組をしつ、うしろ向きに凭掛つて居たが、宗吉が顔を出したのを、茶色のちよんぼり髻を生した小白い横顔で、じろりと撓めると、

「上りは停電……下りは故障です。」

と、人の顔さへ見れば、返事は斯う言ふものと極めたやうに殆ど機械的に言つた。そして頸窪を其の凭掛つた柱で小突いて、超然とした。

「へッ！ 上りは停電。」

「下りは故障だ。」

響の應ずるが如く、四五人口々に饒舌つた。

「あ、あ、あ、」

「堪らねえなあ。」

「よく出来てら。」

「困つたわねえ。」と、つい釣込まれたかして、連もない女學生が猪首を縮めて呟いた。

が、いづれも、今はじめて知つたのでは無ささうで、赤帽が爾く機械的に言ふのでも分る。

怒る群集の動搖む下に、冷然たる線路は、日脚に薄暗く沈んで、いまに鯨が釣れるから待て、と大都市の泥海に、入江の如く彎曲しつ、伸々と靜まり返つて、其の癖底光のする齒の土手を見せて、冷笑ふ。

赤帽の言葉を善意に解するにつけても、苟も中山高帽を冠つて、外套も服も身に添つた、洋行がへりの大學教授が、端近へ押出して、其際じたばた爲べきではあるまい。

宗吉は——煙草は喫まないが——其の火鉢の傍へ引籠らうとして、靴を返しながら、爪尖を見れば、ぐしよ濡の土間に、ちら／＼と又紅の棲が流れる。

緋鯉が躍つたやうである。

思はず視線の向ふのと、肩を合せて、爾時、腰掛を立上つた、もう一人の女がある。丁度緋縮緬のと並んで居た、其のつれかとも思はれる、大島の羽織を着た、丸髻の、脊の高い、面長な、目鼻立のきつぱりした顔を見ると、宗吉は、あつと思つた。

再び、おや、と思つた。

と言ふのは、頃日忙しさに、不沙汰はして居るが、知己も知己、然も其の婚禮の席に列つた、従弟の細君にそつくりで。世馴れた人間だと、すぐに、「お。」と聲を掛けるほど、よく似て居る。が其の似て居るのを驚いたのでもなければ、思ひ掛けず出會つたのを驚いたのでもない。まさしく其の人と思ふのが、近々と顔を會はせながら、すつと外らして窓から雨の空を視た、取つても附けない、赤の他人らしい處置振に、一驚を吃したのである。

いや、全く他人に違ひない。

けれども、脊恰好から、形容、生際の少し亂れた處、色白な容色よしで、淺葱の手柄が、如何にも似合ふ細君だが、此の女も又不思議に淺葱の手柄で。鬢の色つばい處から……それ、少し仰向いて居る顔つき。他人が、一寸眉を擧める工合を、其の細君は小鼻から口元に皺を寄せる癖がある。……其までが、其のまゝで、電車を待草臥れて、雨に侘げな様子、小鼻に寄せた

皺に明白であつた。

勿論、別人とは納得しながら、うつかり口に出さうな挨拶を、唇で嚙留めて、心着くと、いつの間にか、足もや、近づいて、帽子に手を掛けて居た極の悪さに、背を向けて立直ると、雲低く、下谷、神田の屋根一面、雨も霞も漲つて濁つた裡に、神田明神の森が見える。

唯、緋縮緬の女が、同じ方を凝と視て居た。

鼻の隆い其の顔が、ひた／＼と横に寄つて、胸に白粉の着くやうに思つた。

宗吉は、愕然とするまで、再び、似た人の面影を其の女に發見したのである。

緋縮緬の女は、櫛巻に結つて、黒縮緬の紋着の羽織を撫肩にぞろりと着て、瘦せた片手を、力のない襟に挿して、然うやつて、引上げた袂を壓へるやうに、膝に置いた手に萌黄色のオペラバツグを大事さうに持つて居る。最う三十を幾つも越した年紀ごろから思ふと、小兒の土産にする玩弄品らしい、粗末な手提を——大事さうに持つて居る。はきものも、襦袢も、素足も、櫛巻も、紋着も、何となくちぐはぐな處へ、色白さうなのが濃い化粧、口の大きく見えるまで濡々と紅をさして、細い頸の、眞白な咽喉を長く、明神の森の遠見に、伸上るやうな、ぐつと仰向いて、大

きな目を凝と睜つた顔は、首だけ活人形を繼いだやうで、綺麗なよりは、もの凄。但、美しく優しく、然もきり、としたのは類なき其の眉である。

眉は、宗吉の思ふ、忘れぬ女と寸分違はぬ。が、此の似たのは、もう一人の丸髻の方が、従弟の細君に似たほど、適格したものでは決してない。或は其が餘りよく似たのに引込まれて、心に刻んだ面影が緋縮緬の方に宿つたのであらうも知れぬ。

よし、眉の姿唯一枚でも、秦宗吉の胸は、夢に三日月を呑んだやうに、晃乎と尊く輝いて、時めいて躍つたのである。

——お千と言つた、其の女は、實に宗吉が十七の年紀の生命の親である。——
然も場所は、面前彼處に望む、神田明神の春の夜の境内であつた。

「あゝ……もう一呼吸で、剃刀で、……」
と、今視めても身の毛が悚立つ。……森のめぐりの雨雲は、陰惨な鼠色の隈を取つた可憐な面のやうで、家々の棟は、瓦の牙を噛み、齒を重ねた、其の上に二處、三處、赤煉瓦の軒と、亞鉛屋根の引剥が、高い空に、赫と赤い齒莖を剥いた、人を啖ふ鬼の口に髣髴する。……其の森、其の樹立は、……春雨の煙るとばかり見る目には、三ツ五ツ縦に並べた薄紫の眉刷毛であらう。死なうとした身の、其の時を思へば、其も逆に生えた蓬々の髣髴である。

其の空へ、すら／＼と雁のやうに浮く、緋縮緬の女の眉よ！ 瞳も据つて、瞬きもしないで、恍惚と同じ處を凝視して居るのを、宗吉は又ちらりと見た。

あゝ、其の女？
と波を打つて轟く胸に、此の停車場は、大なる船の甲板の廻るやうに、舳を明神の森に向けた。手に取るばかり尙近い。
「なぞへに低く成つた、彼處が明神坂だな。」

其の右側の露路の突當りの家で、……
——死なうとした日の朝——宗吉は、年紀上の渠の友達に、顔を剃つて貰つた。……其の夜、

明神の境内で、アハヤ咽喉に擬したのは其の剃刀であるが。
(一寸順序を附よう。)

宗吉は學資もなしに、無鐵砲に國を出て、行處のなさに、其の頃、或一團の、取留めのない不體裁な其の日ぐらしの人たちの世話に成つて、辛うじて雨露を凌いで居た。

其人たちと言ふのは、主に懶惰、放蕩のため、世に見棄てられた醫學生の落第なかまで、年輩も相應、女房持なども交つた。中には政治家の半端もあるし、實業家の下積、山師も居たし、眞面目に巡査に成らうかと言ふのもあつた。

其處で、宗吉が當時寢泊りをして居たのは、同じ明神坂の片側長屋の一軒で、こゝには食ふや食はずの醫學生あがりの、松田と云ふのが夫婦で居た。其の突當りの、柳の樹に、軒燈の掛つた見晴のいゝ誰かの妾宅の貸間に居た、露の垂れさうな綺麗なのが……こゝに緋縮緬の女が似たと思ふ、其のお千さんである。

四

お千は、世を忍び、人目を憚る女であつた。宗吉が世話になる、渠等なかまの、殆ど首領とも言ふべき、熊澤と言ふ、追て大實業家と成ると聞いた、繪に描いた化地藏のやうな大漢が、そんなじよ其の邊のを落籍したとは表向、得心させて、連出して、内證で困つて居たのであるから。言ふまでもなく商賣人だけれど、藝妓だか、遊女だか——其は今に於て分らない——何しろ、宗吉には三ツ四ツ、もつとかと思ふ年紀上の綺麗な姉さん、婀娜なお千さんだつたのである。前夜まで——唯今のやうな、じとく降の雨だつたのが、花の開くやうに霽つた、彼岸前の日曜の朝、宗吉は朝飯前……と言ふが、やがて、十時……此處は、ひもじい経験のない讀者にも御推讀を願つて置く。が、いつに成つても其の朝の御飯はなかつた。妾宅では、前の晩、宵に一度、てんどんのお詠へ、夜中一時頃に蕎麥の出前が、芥と枕頭を匂

つて露路を入つたことを知つて居るので、行けば何かあるだらう……天氣が可いと尙ほ食べたい。空腹を抱いて、げつそりと落込むやうに、溝の減つた裏長屋の格子戸を開けた處へ、突當りの妾宅の柳の下から、ぞろ／＼と長閑さうに三人出た。肩幅の廣いのが、薄汚れた黄八丈の書生羽織を、ぞろりと着たのは、此の長屋の主人で。一度戸口へ引込むだ宗吉を横目で見ると、小指を出して、

「何うした。」
と小聲で言つた。

「まだ、お寢つてです。」
起きるのに張合がなくて、細君の、まだ裸體で柏餅に包まつて居るのを、然う言ふと、主人は一寸舌を出して黙つて行く。

次のは、剃りたての頭の青々とした綺麗な出家。細面の色の白いのが、鼠の法衣下の上へ、黒縮緬の五紋、——お千さんのだ、振の紅い——羽織を着て居た。昨夜、此の露路に入つた時は、紫の輪袈裟を雲の如く尊く絡つて、水晶の數珠を提げたのに。——

唯、うしろから、拳固で、前の圓い頭をコツンと敲く眞似して、宗吉を流眊で、ニヤリとして續いたのは、頭毛の眞中に皿に似た禿のある、色の黒い、目の窪んだ、口の大な男で、近頃まで

政治家だつたが、翻つて商業に志した、ために紋着を脱いで、綿銘仙の羽織を袴短に、めりやすの股引を瘦脚に穿いて居る。……小皿の平四郎。

いづれも、花骨牌で徹夜の今、明神坂の常盤湯へ行つたのである。

行違ひに、茫乎と、宗吉が妾宅へ入ると、食ふ物どころか、いきなり跡始末の掃除をさせられた。「濟まないことね、學生さんに働かしちやあ。」

とお千さんは、伊達巻一つの艶な蹴出しで、お召の重衣の裾をぞろりと引いて、黒天鵝絨の座蒲團を持つて、火鉢の前を遁げながら然う言つた。

「何、目下は私たちの小僧です。」

と、甘谷と言ふ横肥り、でぶくと脊の低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛の眞田をちよきんと結んだ、此も醫學の落第生。追つて大實業家たらんとする準備中のが、笑ひながら言つたのである。

二人が、此の妾宅の貸ぬしのお妾——が、最ういゝ加減な中婆さん——と兼帯に使ふ、次の室へ立つた間に、宗吉が、ひよろ／＼して、時々淺ましく下腹をぐつと泣かせながら、兎に角、きれいに掃出すと、

「御苦勞々々。」

と、調子づいて、

「さあ、貴女。」

と、甘谷が座蒲團を引攪つて、もとの處へ。……身體に似ない腰の軽い男。……尤も甘谷も、つい十日ばかり前までは、宗吉と同じ長屋に貸蒲團の一ツ夜着で、芋蟲ごろ／＼して居た處——事業の運動に外出勝の熊澤旦那が、お千さんの見張兼番人かた／＼妾宅の方へ引取つて置くのであるから、日蔭ものでもお千は御主人。此のくらゐな事は當然で。

對の蒲團を、とん／＼と小形の長火鉢の内側へ直して、

「さ、さ、貴女。」

と自分は退いて、

「いざ先づ……此へ。」と口も氣もともに軽い、が、起居が石臼を引摺るやうに、どし／＼する。

——あゝ、無理はない、脚氣がある。夜あかしはしても、朝湯には行けないのである。

「可厭ですことねえ。」

と、婀娜な目で、襖際から覗くやうに、友染の裾を曳いた櫛卷の立姿。

櫻には些と早い、木瓜か、何やら、枝ながら障子に映る花の影に、ほんのりと日南の薫が添つて、お千がもとの座に着いた。

向うには、旦那の熊澤が、上下大島の金鎖、あの大々したので、ドカリと胡坐を組むのであらう。

「お留守ですか。」

宗吉が何となく甘谷に言つた。此處にも見えず、湯に行つた中にも居なかつた。其の熊澤を訊いたのである。

縁側の片隅で、

「えへん！」と屋鳴りのするやうな咳拂を響かせた、便所の裡で。

「熊澤は此處に居るぞう。」

「まあ。」

「随分ですこと、ほ、ほ。」

と家主のお妾が、次の室を臺所へ通がかりに笑つて行くと、お千さんが俯向いて、莞爾して、

「餘り色氣がなさ過ぎるわ。」

「其處が御婦人の毒でげす。」

と甘谷は前掛をボン／＼と敲いて、

「お千さんは大將の彼處へ落つこちたんだ。」

「あら、随分……酷いぢやありませんか、甘谷さん、餘りだよ。」

何にも知らない宗吉にも、此の間違は直ぐ分つた、汚いに相違ない。

「いやあ、此は、失敗、失敬、失禮。」

と甘谷は立續けに叩頭をして、

「其處で、おわびに、一つ貴女の顔を剃らして頂きやせう。いえ、自慢ぢやありませんがね、昨夜ッから申す通り、野郎圖體は不器用でも、勝奴ぐらるにや確に使へます。剃刀を持たしちや確です。——秦君、一寸奥へ行つて、剃刀を借りて來給へ。」

宗吉は、お千さんの、湯にだけは密と行つても、床屋へは行けもせず、呼ぶのも慎むべき境遇を領きながら、お妾に剃刀を借りて戻る。……

「おつと！……次手に金盥……氣を利かして、氣を利かして。」

此の間に、いま何か話があつたと見える。

「さあ、君、此處へ顔を出したり、一つ手際を御覽に入れないうちや、奥さん御信用下さらない。」
「い、え、然うぢやありませんけれどもね、私まだ、そんなでもないんですから。」

「何、御遠慮にやあ及びません。間違つた處でたかが小僧の顔でさ。……丁度、ほら、むく毛が生えて、館子の撮食をしたやうだ。」

宗吉は、可憐やゴクリと唾を呑んだ。

「仰向いて、ぐつと。そら、何うです、つるくのつるくと、鮮かなもんでげせう。」

「何だか危ツかしいわね。」

と少し膝を浮かしながら、手元を覗いて憂慮しさうに、動かす顔が、鐵瓶の湯氣の陽炎に薄絹を掛けつゝ、宗吉の目に、ちらく、ちらく。

「大丈夫、それ此の通り、一寸一寸の、一寸一寸と、」

「あれ、止して頂戴、止してよ。」

と浮かした膝を揺らくくと、袖が薰つて伸上る。

「何故ですてば。」

「危いわ、く。おとなしい、其の優しい眉毛を、落したら何うしませう。」

「其の事ですかい。」

と、一寸留めた剃刀を又當てた。

「構やしません。」

「あれ、目の縁はまだしもよ、上は止して、後生だから。」

「貴女の襟脚を剃らうてんだ。何、こんなものぐらゐる。」

「あゝ、あゝく、あゝあーッ」

と便所の裡で屋根へ投げた、筒抜けな大欠伸。

「笑つちやあ……不可い〜。」

「はゝゝはゝゝ、笑つたつて泣いたつて、何、こんな小僧ツ子の眉毛なんか。」

「厭、厭、厭。」

と支膝のまゝ、する〜と寄る衣摺が、遠くから羽衣の音の近くやうに宗吉の胸に響いた……

疊の波に人魚の半身。

「どんな母さんでせう、このお方。」

雪を欺く腕を空に、甘谷の剃刀の手を支へ、突いて離して、胸へ、抱くやうにして熟と視た。

「羨しい事、まあ、何て、いゝ眉毛だらう。親御は嘸ぞ、お可愛いだらうねえ。」

乳も白々と、優しさと可懐しさが透通るやうに視えながら、衣の綾も衣紋の色も、黒髪も、宗吉の目の眞暗に成つた時、肩に袖をば掛けられて、面を襟に伏せながら、忍び兼ねた胸を絞つて、

思はず、ほろ〜と熱い涙。

お妾が次の室から、
「切れますか剃刀は……あはせに遣らう〜と思ひましちやあ……ついね……」

自殺をするのに、宗吉は、床屋に持つて行きませう、と言つて、此の剃刀を取つて出た。
其は同じ日の夜に入つてからである。

仔細は……

六

……さて、やがて朝湯から三人が戻つて來ると、長いこと便所に居た熊澤も一座で、又花札を弄ぶ事に成つて、朝飯は鮨にして、湯豆腐で一酒杯、と言ふ。

此の使の次手に、明神の石坂、開化樓裏の、あの切立の段を下りた宮本町の横小路に、相馬煎餅——鹽煎餅の、焼方の、醬油の斑に、何となく轡の形の浮出して見える名物がある。——茶受にしよう、是非お千さんにも食べさせたいと、甘谷の發議。で、宗吉が此を買ひに遣られたのが事の原因であつた。

何分にも、十六七の食盛りが、毎日々々、三度の食事にがつ〜して居た處へ、朝飯前とたと

へにも言ふのが、突落されるやうに峻しい石段を下りたドン底の空腹さ。……天麩羅とも、蕎麥とも、焼芋とも、芬と鹽煎餅の香しさがコンガリと鼻を突いて、袋を持った手がガチ〜と震ふ。近飢ゑに、冷い汗が垂々と身うちに流れる堪へ難さ。

其の時分の物價で、……忘れもしない七錢が煎餅の可なり嵩のある中から……小判の如く、數二枚。

宗吉は、一坂戻つて、段々に一寸區劃のある、すぐに手を立てたやうに石坂がまた急に成る、平面な處で、銀杏の葉はまだ淺し、縦、榎の梢は遠し、楯に取るべき蔭もなしに、岨の溝端に眞俯向けに成つて、生れてはじめて、許されない禁斷の果を、相馬の名に負ふ、轡をガリ、と頬張る思ひで、馬の口にかぶりついた。が、甘さと切なさど恥かしさに、堅く成つた胸は、自から溝の上へのめつて、折れて、煎餅は口よりも却つて胃の中でポリ〜と破れた。

ト突出た廂に額を打たれ、忍返の釘に眼を刺され、赫と血とともに總身が熱く、忽爾、罪ある蛇に成つて、攀上る石段は、お七が火の見を驅上つた思ひがして、頭に映す太陽は、血の色して段に流れた。

宗吉は、慙くて又明神の御手洗に、更に、氷に閉らる、思ひして、悚然と寒氣を感じたのである。
「くす〜、くす〜。」

花骨牌の車座の、輪に身を捲かるゝ、危さを感じながら、宗吉が我知らず面を赤めて、煎餅の袋を渡したのは、甘谷の手で。

「おつと来た、めしあがれ。」

と一枚めくつて合せながら、袋をお千さんの手に渡すと、此は少々疲れた風情で、なかまへは入らぬらしい。火鉢を隔てたのが請取つて、膝で覗くやうにして開けて、

「御馳走様ですね……早速お毒見。」

と言つた。

此に又胸が痛んだ。だけなら、まだ然ほどまでの仔細はなかつた。

「くすくすくすくす。」

宗吉が此の座敷へ入りしなに、最う其の忍び笑ひの聲が耳に附いたのであるが、此の時、お千さんの一枚撮んだ煎餅を、見ないやうに、一寸傍へかはした宗吉の顔に、横から打撞つたのは小皿の平四郎。……頬骨の張つた菱形の面に、窪んだ目を細く、小鼻をしかめて、

「くすくす。」

と又遣つた。手のわるさに落ちたと見えて札は持たず、鍍金の銀煙管を構へながら、めりやすの股引を前はだけに、片膝を立てて居たのが、其の膝頭に頬骨をたゞき着けるやうにして、

「くすくすくす。」

續けて忍び笑をしたのである。

立續けて、

「くつくつくつ。」

七

「此方は、びきを泣かせて遣れか。」

と黄八丈が骨牌を捲ると、黒縮緬の坊さんが、紅い裏を翻然と翻して、

「餓鬼め。」

と投げた。

「うふ、うふ、うふ。」と平四郎の忍び笑が、齒莖を洩れて聲に出る。

「うふ、うふ、うふ、うふ、うふ、うふ、うふ。」

「何ぢやい。」と片手に猪口を取りながら、黒天鵝絨の蒲團の上に、萩、菖蒲、櫻、牡丹の合戦を、どろんとした目で見据ゑて居た、大島揃、大胡坐の熊澤が、ぎよろりと平四郎を見向いて言ふと、笑ひの蟲は蕃椒を食つたやうに、赤く成るまで赫と競勢つて、

時、宗吉は最早や蒼白に成つた。

此處から認められたに相違ない。

と思ふ平四郎は、涎と一所に、濡らした膝を、手巾で横撫でしつゝ、

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ……大歎息とともに尻を曳いたなごりの笑が、更に、ぐわら／＼ぐわら／＼と雷の鳴返す如く少年の耳を打つ……」

「お煎をめしあがれな。」

目の下の唾が切立てだつたら、宗吉は、お千さんの其の聲とともに、倒に落ちて其の場で五體を微塵にしたらう。

産の親を可懐しむまで、眉の一片を庇つてくれた、其の人ばかりに恥かしい。……

「一寸、宅まで。」

と息を呑んで言つた——宅とは露路の其の長屋で。

宗吉は、しかし、其の長屋の前さへ、遁隠れするやうに素通りして、明神の境内の彼方此方、人目の隙の隅々に立つて、飢さへ忘れて、半日を泣いて泣きくらした。

星も曇つた暗き夜に、

「おかみさん——床屋へ剃刀を持つて参りませう。次手がございますから……」

宗吉は故と格子戸をそれて、蚯蚓の這ふやうに臺所から、密と妾宅へおとづれて、家主の手から剃刀を取つた。

間を隔てた座敷に、艶やかな影が氣勢に映つて、香水の薫は、つとはしり下にも薫つた。が、寂寞して居た。

露路の長屋の赤い燈に、珍しく、大入道やら、五分刈やら、中にも小皿で禿なる影法師が動いて、ひそ／＼と聲の漏れるのが、目を忍び、音を憚る出入りには、宗吉のために、寧ろ僥倖だつたのである。

八

「何をするんですよ、何をするんですよ、お前さん、串戯ではありません。」

社殿の裏なる、空茶店の葦簀の中で、一方の柱に使つた片隅なる大木の銀杏の幹に凭掛つて、アハヤ剃刀を咽喉に當てた時、すつと音して、瀧縞の袖で抱いたお千さんの姿は、……宗吉の目

に、高い樹の梢から颯と下りた、美しい女の顔した不思議な鳥のやうに映つた——剃刀をもぎ取られて後は、茫然として、殆ど夢心地である。

「まあ！可かつた。」

と、身を捻ぢて、肩を抱きつゝ、社の方を片手拜みに、

「蟲が知らしたんだわね。いま、お前さんが臺所で、剃刀を持って行くつて聲が聞えたでせう、ドキリとしたのよ。……秦さん〜と言つたけれど、最う居ないでせう。何だかね、こんな間違がありさうな氣がして成らない、私。私、でね、すぐに後から驅出したのさ。でも、何處つて當はないんだもの、鳥居前の彼處の床屋で聞いて見たの。まあね、……まるでお見えなさらないと、言ふぢやあないの。しまつた、と思つたわ。半分夢中で、それでも私が此處へ來たのは神佛のお助けです。秦さん、私が助けるんだと思つちやあ不可い。可うござんすか、可いかえ、貴方。……親御さんが影身に添つて居なさんですよ。可うござんすか、分りましたか。」

と小兒のやうに、柔い胸に、帯も扱帯もひつたりと抱締めて、
「御覽なさい、お月様が、あれ、佛様が。」

忘れはしない、半輪の五日の月が黒雲を下りるやうに、莊嚴なる銀杏の枝に、梢さがりに掛つたのが、可懐い亡き母の乳房の輪線の面影した。

「まあ、此からと言ふ、……女にしても蕾のいま、何うして死なうなんてしたんですよ。——私に……私……え、それが私に恥かしくつて、——」
其の乳の震が胸に響く。

「何の鹽煎餅の二枚ぐらゐる、貴方が拘賊でも構やしない——私ハね、あの。……まあ、とに角、内へ行きませう。可い鹽梅に誰も居ないから。」

促して、急いで脱放しの駒下駄を搜る時、白脛に絆が散つた。お千も慌しかつたと見えて、宗吉の穿物までは心着かず、可恐しい處を遁げるばかりに、息せいて手を引いたのである。

魔を除け、死神を拂ふ禁厭であらう、明神の御手洗の水を掬つて、雫ばかり宗吉の頭髮を濡らしたが、

「……息災、延命、息災延命、學問、學校、心願成就」

と、手よりも濡れた瞳を閉ぢて、頸白く、御堂をば伏拜み、

「一口めしあがれ、……氣を静めて——私も。」

と柄杓を重げに口にした。

「動悸を御覽なさいよ、私のさ。」

其の胸の轟きは、今より先に知つたのである。

「秦さん、私は貴方を連れて、最う彼處へは戻らない。……身にも命にもかへてね、お手傳をしますかね、……實はね、今明神様におわびをして、貴方のお頭を濡らしたのは——實は、あの、一度内へ歸つてね。……此の剃刀で、貴方を、そりたての今道心にして、一緒に寝ようと思つた

のよ。——あのね、實はね、今夜あたり紀州のあの坊さんに、私が抱かれて、其處へ、熊澤だの甘谷だのが踏込むで、不義いたづらの罪に落さうと言ふ相談に……何うでも、と言つて乗せられたんです。

……あの坊さんは、高野山とかの、金高なお寶ものを賣りに出て来て居るんでせう。何處とかの大金持だの、何省の大臣だのに賣つて遣ると言つて、だまして、熊澤が皆質に入れて使つて了つて、催促される、苦しまぎれに、不斷、何だか私にね、坊さんが厭味らしい目つきをするのを知つて居て、まあ大それた美人局だわね。

私が弱いもんだから、身體も度胸もづばぬけて強さうな、あの人をたよりにして、こんな身裁に成つたけれど、……そんな相談をされてからはね……其の上に、此の眉毛を見てからは……」と、お千は密と宗吉の肩を撫でた。

「つくづく、あんな人が可厭に成つた。——そら、どか／＼と踏込むでせう。貴方を抱いて、ちやんと起きて、居直つて、あいそづかしをきつぱり言つて、夜中に直ぐに飛出して、溜飲を下げて遣らうと思つたけれど……どんな發機で、自棄腹の、彼の人たちの亂暴に、貴方に怪我でもさせた日にや、取返しがつかないから、といま胸に手を置いて、分別をしたんですよ。

さ、此のまゝ、何處かへ行きませう。私に任して安心なさいよ。……貴方も屹とあの人たちにこ

度つき合つては不可ません。」

裏帷の石段を降りる時、宗吉は狼の峠を越して、花やかな都を見る氣がした。

「此處……然う……」

お千さんが莞爾して、鹽煎餅を買ふのに、晝夜帯を抽いたのが、安ものらしい、が、萌黄の金入。

「食べながら歩行ませう。」

「弱蟲だね。」

大通へ抜ける暗がり、甘く、且つ香しく、皓齒でこなしたのを、口移し……

九

宗吉が夜學から、徒士町のとある裏の、空瓶屋と襦袢屋の間の、貧しい下宿屋へ歸ると、引傾いた濡縁づきの六疊から、男が一人摺違ひに出て行くと、お千さんはバツと障子を開けた。が、最う床が取つてある……

枕元の火鉢に、はかり炭を繼いで、目の破れた金網を斜に載せて、お千さんが懷紙であふぎな

「姉さんが、魂をあげます。」——辿りながら折つたのである。……懐紙の、白い折鶴が掌にあつた。

「旦那。」
とお千が立停まつて、
「宗ちゃん——宗ちゃん。」
振向きもしないで、うなだれたのが、氣を感じて、眉を優しく振向いた。

細腰はふつと消えて、すぼめた肩が、くらがりの柳に浮く。
……其のお千には、最う疾に、羽織もなく、下着もなく、膚たゞ白く縞の小袖の萎えたるのみ。
宗吉は、跣足で、めそ／＼泣きながら後を追つた。
目も心も眞暗で、町も處も覺えない。颯と一條の冷い風が、電燈の細い光に櫻を誘つた時である。

風俗係は草履を片手に、最う入口の襖を開けて居た。
お千が穿ものをさがすうちに、風俗係は、内から、戸の錠をあけたが、軒を出ると、ひたりと腰繩を打つた。

「……此の人は……」
「いや、小僧に用はない。すぐおいで。」
「宗ちゃん、……朝の御飯はね、煮豆が買つて蓋ものに、……紅生薑と……紙の蔽がしてありますよ。」
「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」
と袖から蛇の首のやうに捕繩をのぞかせた。
膝をなえたやうに支きながら、お千は宗吉を背後に圍つて、

「あれ。」
「……此の人は……」
「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」
と袖から蛇の首のやうに捕繩をのぞかせた。
膝をなえたやうに支きながら、お千は宗吉を背後に圍つて、
縁側へ。
「あれ。」
「……此の人は……」
「おい、氣の毒だが一寸用事だ。」
と袖から蛇の首のやうに捕繩をのぞかせた。
膝をなえたやうに支きながら、お千は宗吉を背後に圍つて、
縁側へ。

「此の飛ぶ處へ、すぐおいで。」
ほつと吹く息、薄紅に、折鶴は却つて蒼白く、花片にふつと乗つて、ひらくと空を舞つて行く。……此が落ちた大な門で、はたして宗吉は拾はれたのであつた。

電車が上り下りとも殆ど同時に來た。

宗吉は身動きもしなかつた。

唯見ると、丸鬚の女が、其の緋縮緬の傍へ衝と寄つて、いつか、肩ぬげつゝ裏の這つた効性のない羽織を、上から引合せて遣りながら、

「さあ、來ました。」

「自動車ですか。」

と目を睜つたまゝ、緋縮緬の女はきよろんとして居た。

十

年少い驛員が、

「貴方がたは？」

と言つた。

乗り餘つた黒山の群集も、三四輛立續けに來た電車が、泥まで綺麗に浚つたのに、まだ待合所を出なかつた女二人、(別に一人)と宗吉をいぶかつたのである。

宗吉は言つた。

「此の御婦人が御病氣なんです。」

と、矢張り、けろりと仰向いて居る緋縮緬の女を、外套の肘で庇つて言つた。

驛員の去つたあとで、

「唯今、自動車を差上げますよ。」

と宗吉は、優しく顔を覗きつゝ、丸鬚の女に瞳を返して、

「巢鴨はお見合せを願へませんか。……屹と御介抱申します。私は恚う云ふものです。」

なふだに醫學博士——秦宗吉とあるのを見た時、……もう一人居た、散切で被布の女が、P形に直立して、Zの如く敬禮した。此は附添の雑仕婦であつたが、——博士が、其の従弟の細君に似たのをよすがに、此より前、丸鬚の女に言を掛けて、其の人品のゆゑに人をして疑はしめず、連は品川の某樓の女郎で、氣の狂つたため巢鴨の病院に送るのだが、自動車で行きたい、それではなければ厭だと言ふ。其のつもりにして、すかして電車で來ると、此處で自動車でないからと言

つて、何でも下りて、すねたのだと言ふ。……丸鬚は某樓の其の娘分。女郎の本名をお千と聞くまで、——此の雑仕婦は物頂面して睨んで居た。

不時の回診に驚いて、或日、其の助手たち、其の白衣の看護婦たちの、ばら／＼と急いで、然も、靜肅に驅寄るのを、徐ろに、左右に辭して、醫學博士秦宗吉氏が、

「いえ、個人で見舞ふのです……皆さん、何うぞ。」

やがて博士は、特等室に唯一人、膝も胸も、しどけない、けろんとした狂女に、何と……手に剃刀を持たせながら、臥床に跪いて、其の胸に額を埋めて、薙と縫つて、潜然として泣きながら、微笑みながら、身も世も忘れて愚に返つたやうに、だらしなく、涙を髻に傳はらせて居た。

瓜の涙

一
年紀は少いのに、餘程好きだと見えて、然もおいしさうに煙草を喫みつゝ、……しかし烈しい暑さに弱つて、身も疲れた様子で、炎天の並木の下に憩むで居る學生がある。

まだ二十歳そこらであらう、久留米緋の、紺の濃く綺麗な處は初々しい。けれども、着がへのなさか、幾度も水を潜つたらしく、肘、背筋、折りかゝみのあたりは、然らぬだに、あまり健康さうにはないのが、薄瘦せて見えるまで、其の處々色が褪せて禿げて居る。――茶の唐縮緬の帯、それよりも煙草に相應はないのは、東京のなにかし工業學校の金色の徽章のついた制帽で、卷草ならまだしも、喫むで居るのが刻煙草である。

場所は、言つた通り、城下から海岸の港へ通る二里餘りの並木の途中、ちやうど真中處に、昔から傳説を持つた大な一面の石がある――義經記に、……

加賀國富樫と言ふ所も近くなり、富樫の介と申すは當國の大名なり、鎌倉殿より仰は蒙らねども、内々用心して判官殿を待奉るとぞ聞えける。武藏坊申しけるは、君はこれより宮の

越へ渡らせおはしませ――

とある……金石の港で、即ち、舊の名宮の越である。

眞僞のほどは知らないが、おなじ城下を東へ寄つた隣國へ越る山の尾根の談義所村と云ふのに、富樫があとを追つて、つくり山伏の一行に杯を勧めた時、武藏坊が鳴るは瀧の水、日は照れども絶えずと、謡つたと傳ふる（鳴は瀧）小さな瀧の名所があるのに對して、此を義經の人待石と稱するのである。行歩健かに先立つて來たのが、あるき悩むた久我どのの姫君――北の方を、乳母の十郎權の頭が扶け參らせ、後れて來るのを、判官がこの石に憩つて待合はせたと云ふのである。目覺しい石である。夏草の茂つた中に、高さはたゞ草を抽いて二三尺ばかりだけれども、廣さ凡そ疊を數へて十五疊はあらう、深い割目が地の下に徹つて、もう一つ八疊ばかりなのと二枚ある。以前は此が一面の目を驚かすものだったが、何の年かの大地震に、坤軸を覆して、左右へ裂けたのださうである。

また此の石を、城下のもは一口に呼んで巨石とも言ふ。

石の左右に、此の松並木の中にも、形の丈の最も勝れた松が二株あつて、海に寄つたのは亭々として雲を凌ぎ、町へ寄つたは拮据して、枝を低く、彼處に湧出づる清水に翳す。……

其處に、青き苔の滑かなる、石圍の掘抜を噴出づる水は、音に聞えて、氷の如く冷やかに潔い。

人の知つた名水で、並木の清水と言ふのであるが、此は路傍に自から湧いて流るゝのでなく、人が圍つた持主があつて、清水茶屋と言ふ茶店が一軒、田畝の土手上に廂を構へた、本家は別の、出茶屋だけれども、一寸見舞の座敷もある。あの低い松の枝の地紙形に翳蔽へる葉の裏に、葦簀を掛けて、掘抜に繞らした中を、美しい清水は、松影に揺れ動いて、日盛にも白銀の月影をこぼして溢るゝのを、廣い水槽でうけて、其の中に、眞桑瓜、西瓜、桃、李の實を冷して賣る。……名代である。

二

また畠一帶、眞桑瓜が名産で、此の水あるがためか、巨石の瓜は銀色だと言ふ……瓜畠がずっと續いて、やがて蓮池に成る……それからは皆青田で。

畑のは知らない。實際、水槽に浸したのは、眞蒼な西瓜も、黄なる瓜も、颯と銀色の蓑を浴びる。あくどい李の紅いさへ、淡くくるくると淺葱に舞ふ。水に迸る勢に、水槽を裝上つて、そこから百條の簾を亂して、溝を走つて、路傍の草を、さらりと鳴して行く。

音が通ひ、雫を帯びて、人待石——巨石の割目に茂つた、露草の花、蓼の紅も、こゝに腰掛けたと云ふ判官の其の山伏の姿よりは、爽かに鏗うたる、色よき絨毛を思はせて、黄金の太刀も草

摺も鳴るよ、とばかり、松の梢は颯々と、清水の音に通つて涼しい。

けれども、涼しいのは松の下、分けて清水の、玉を鳴して流るゝ處ばかりであらう。

三間幅——並木の道は、眞白にキラキラと太陽に光つて、ごろた石は炎を噴く……兩側の松は梢から、枝から、おのが影をおのが幹にのみ這はせつゝ、眞黒な蛇の形を畝らす。

雲白く、秀でたる白根が嶽の頂に、四時の雪はありながら、田は乾き、畠は割れつゝ、瓜の畠の葉も赤い。來た處も、行く道も、露草は胡麻のやうに乾び、蓼の紅は蚯蚓が爛れたかと疑はれる。

人の往來はバツタリない。

大空には、恰も此の海の沖を通つて、有磯海から親不知の濱を、五智の如來へ詣つると云ふ、泳ぐのに半身を波の上に顯して、列を造つて行くとか聞く、海豚の群が、毒氣を吐掛けたやうな入道雲の低いのが、むくくと推並んで、動くともなしに、見て居ると、地が揺れるやうに、ぬつと動く。

見すばらしい、が、色の白い學生は、高い方の松の根に一人居た。

見ても、薄桃色に、又青く透明る、冷い、甘い露の垂りさうな瓜に對して、もの欲氣に思はれるのを恥ぢたのであらう。茶店にやゝ遠い人待石に——

で、其の石には腰も掛けず、草に蹲つて、そして妙な事をする。……煙草を喫むのに、燐寸を摺つた。が、燃さしの軸を、消えるのを待つて、もとの箱に入れて、杖に藏つた。乏しい様子が、燐寸ばかりも、等閑になし得ない道理は解めるが、焚残りの軸を何にしよう……

蓋し、此の年配ごろの人数には漏れない、判官最良が、其の古跡を、取散らすまい、犯すまいとしたのであつた——

「此の松の事だらうか……」

——金石の湊、宮の腰の濱へ上つて、北海の鮫と烏賊と蛤が、開帳まるりに、此處へ出て來たと云ふ、滑稽な昔話がある——

人待石に憩んだ時、道中の慰みに、おの／＼一藝を仕らうと申合す。と、鮫が眞前にちよろちよろと松の木の天邊へ這つて、脚をぶらりと、

「藤の花とは何うだの、下り藤、上り藤。」と縮んだり伸びたり。

烏賊が枝へ上つて、鰭を張つた。

「印半纏見てくんねえ。……鳶職のもの、鳶職のもの。」

其處で、蛤が貝を開いて、

「善光寺様、お開帳。」と恠う言ふのである。

鈍豆煙管を嚙むやうに啣へながら、枝を透かして枝ぐと、雲の搦んだ暗い梢は、ちら／＼と、今も紫の藤が咲くか、と見える。

三

「——彼處に鮫が居ます——」

と此の高松の梢に掛つた藤の花を指して、連の職人が、いまの其の話をした時は……

丁ど藤つゝ、じの盛な頃を、父と一所に、大勢で、金石の海へ……船で鰯網を曳かせに行く途中であつた……

樂しかつた……既う其處の茶店で、大人たちは一度吸筒を開いた。早や七年も前に成る……梅雨晴の青い空を、流るゝ雲に乗るやうに、松並木の梢を縫つて、すう／＼と尾長鳥が飛んで居る。

長閑に、静な景色であつた。

と炎天に夢を見る様に、恍惚と松の梢に藤の紫を思つたのが、俄に驚く！其次なる烏賊の藝當。鳶職と言ふのを思ふにつけ、學生の其の迫つた眉は忽ち暗かつた。

松野謹三、渠は去年の秋、故郷の家が焼けたにより、東京の學校を中途にして歸つたまゝ、學

資の出途に窮するため、拳を握り、足を爪立てて居るのである。

否、唯學資ばかりではない。……其の日々の米薪さへ覺束ない生活の惡處に臨んで、——實は此日も、朝飯を濟ましたばかりなのであつた。

全焼のあとで、父は煩つて世を去つた。——残つたのは七十に近い祖母と、十ウばかりの弟ばかり。

父は塗師職であつた。

黄金無垢の金具、高時繪の、貴重な佛壇の修復をするのに、家に預つてあつたのが火に成つた。其の償ひの一端にさへ、あらゆる身上を煙にして、尙ほ足りないくらゐで、焼あとには灰らしい灰も残らなかつた。

貧乏寺の一間を借りて、墓の影法師のやうに日を送る。——

十日ばかり前である。

渠が寝られぬ短夜に……疲れて、寝忘れて遅く起きると、祖母の影が見えぬ……

枕頭の障子の陰に、朝の膳ごしらへが、ちやんと出来て居たのを見て、水を浴びたやうに肝まで寒くした。——大川も堀も近い。……つひぞ愚痴などを言つた事のない祖母だけれど、頃日の餘りの事に、自分さへなかつたら、木登りをして學問の思ひは届かうと、其を繰返して居たのであるから。

幸に箆箱の下に紙切が見着かつた——それに、假名でほつくと(あんじまいぞ。)と書いてあつた。

祖母は、其の日もおなじほどの炎天を、草鞋穿で、松任と言ふ、三里隔つた町まで、父が存生の時に工賃の賃がある骨董屋へ、勘定を取りに行つたのであつた。

七十の老が、往復六里。……骨董屋は疾に夜遁げをしたとやらで、何の效もなく、日暮方に歸つたが、町端まで戻ると、餘りの暑さと疲労とで、目が眩んで、呼吸が切れさうに成つた時、生玉子を一個買つて飲むと、蘇生つた心地がした。……

「根氣の藥ぢや。」と、そんな活計の中から、朝ごとに玉子を割つて、黄味も二つわけにして兄弟萎れた草に露である。

——今朝も、其の慈愛の露を吸つた勢で、謹三が此處へ来たのは、金石の港に何某とて、器具商があつて、其にも工賃の賃がある……懸を乞ひに出たのであつた——

若いものの癖として、出た處勝負の元氣に任せて、影も見ないで、日盛を、松並木の焦げるが如き中途に來た。

暑さに憩ふだけだつたら、清水にも瓜にも氣兼ねのある、茶店の近所でなくつても、求むれば、別なる松の下蔭もあつたらう。

渠はひもじい腹も、甘く成るまで、胸に秘めた思があつた。

判官の人待石。

それは、其の思を籠むる、宮殿の大なる玉の床と言つても可からう。

四

金石街道の松並木、丁ど此の人待石から、城下の空を振向くと、陽春三四月の頃は、天の一方をぼつと染めて、銀河の横たふ如き、一條の雲ならぬ紅の霞が懸る。……

遠山の櫻に髣髴たる色であるから、花の盛には相違ないが、野山にも、公園にも、數の植わつた邸町にも、土地一統が、櫻の名所として知つた場所に、其の方角に當つては、一所として空に映るまで花の多い處はない。……霞の瀧、かくれ沼、浮城、もの語を聞くのと違つて、現在、誰の目にも視めらるゝ。

見えつゝ、幻影かと思へば、雲のたゞすまひ、日の加減で、其の色の濃い事は、一齊に緋桃が咲いたほどであるから、或は桃だらうとも言ふのである。

紫の雲の、本願寺の屋の棟にかゝるのは引接の果報ある善男善女でないとは拜まれない。が紅の霞は其の時節に此處を通る鱒賣鱒賣も誰知らないものはない。

深祕な山には、谷を隔てて、見えつゝ、近づくべからざる巨木名花があると聞く。……いづれ、佐保姫の妙なる袖の影であらう。

花の蜃氣樓だ、海市である……雲井櫻と、其の霞を稱へて、人待石に、氈を敷き、割籠を開いて、町から、特に見物が出るくらゐ。

けれども人々は、唯雲を掴むで影を視めるばかりなのを……謹三は一人其の花咲く天——雲井櫻を知つて居た。

夢ではない。……得忘るまじく可懐しい。たゞ思ふにさへ、胸の時めく里である。

此の年の春の末であつた。——

雀を見ても、燕を見ても、手を束ねて、寺に籠つては居られない。其の日の糧の不安さに、はじめは唯町や辻をうろついて廻つたが、落穂のないのは知れて居るのに、蹙音にも、けたましく驚かさるゝのは、草の鶉よりも尙ほ果敢ない。

詮方なさに信心をはじめた。世に人にたすけのない時、源氏も平家も、取継るのは神佛である。世間は、春風に大きく暖く吹かるゝ中を、一人陰に成つて霜げながら、貧しい場末の町端から、

山裾の浅い谿に、小流の畝々と、次第高に、何ヶ寺も皆日蓮宗の寺が續いて、天満宮、清正公、辨財天、鬼子母神、七面大明神、妙見宮、寺々に祭つた神佛を、日課の如く巡禮した。

「……御飯が食べられますやうに、……」

父が存生の頃は、毎年、正月の元日には雪の中を草鞋穿で其處に詣づるのに供をした。参詣が果てると雑煮を祝つて、すぐにお正月が来るのであつたが、此はいつまでも大晦日で、餅どころか、袂に、煎餅も、榎の實もない。

一寺に北辰妙見宮のまします堂は、森々とした樹立の中を、深く石段を上る高い處にある。

「ぼろきてほうこう。ぼろきてほうこう。」

晝も梟が鳴交はした。

此の寺の墓所に、京の友禪とか、江戸の俳優某とか、墓があるよし、人傳に聞いたので、其を捜すともなしに、卵塔の中へ入つた。

墓は皆暗かつた、土地は高いのに、じめ／＼と、落葉も拂はず、苔は萍のやうであつた。

ふと、生垣を覗いた明い綺麗な色がある。外の春日が、麗かに垣の破目へ映つて、娘が覗くやうに、千代紙で招くのは、菜の花に交る紫雲英である。……

少年の臉は颯と血を潮した。

袖さへ軽い羽かと思ふ、蝶に憑かれたやうに成つて、垣の破目をするりと抜けると、出た處の狭い路は、飛々の草鞋のあと、まばらの馬の沓の形を、其のま、印して、亂れた龜甲形に白く乾いた。其にも、人の往來の疎なのが知れて、限なき日當りが寂寞して、薄甘く暖い。

怪しき臭氣、得ならぬものを蔽うた、藁も蓆も、早や路傍に露骨ながら、其處には藁の濃いのが咲いて、淡いのが草まじりに、はら／＼と數に亂れる。

馬の沓形の畠や、中窪なのが一面、青麥に菜を添へ、紫雲英を畔に敷いて居る。……眞向うは、この邊一帶に赤土山の兀げた中に、ひとり薄萌黄に包まれた、土佐繪に似た峰である。

唯、此の一廓の、徽章とも言つべく、峰の簷にも似て、恰も紅玉を鏤めて陽炎の箔を置いた状態に眞紅に咲静まつたのは、一株の桃であつた。

綺麗さも凄かつた。すら／＼と呼吸をする、其の陽炎にものを言つて、笑つて居るやうである。眞赤な蛇が居ようも知れぬ。

が、渠の身に取つては、食に盡きて倒るゝより、自然に死ぬなら、蛇に巻かれたのが本望であつたかも知れぬ。

袂に近い菜の花に、白い蝶が来て誘ふ。
あゝ、いや、白い蛇であらう。

其の桃に向つて、行き状に、ふと見ると、墓地の上に、妙見宮の棟の見ゆる山へ続く森の裏は、山際から崖上を彩つて——はじめて知つた——一面の櫻である。……人は知るまい……一面の櫻である。

行くに従つて、路は、奥擴がりにぐるりと山の根を傳ふ。其の袂にも櫻が充ちた。

しばらく、青麥の畠に成つて、紫雲英で輪取る。畔づたひに廻りながら、やがて端へ出て、横向に桃を見ると、其の樹のあたりから路が坂に低く成る、兩方は、飛々差覗く、小屋、藁屋を、屋根から埋むばかり底廣がりに奥を蔽つて、見盡されない櫻であつた。

餘りの思ひがけなさに、渠は寂然たる春晝を唯一人、花に吸はれて消えさうに立つた。

其の日は、何事もなかつた——もとの墓地を抜けて歸つた——ものに憑かれたやうに成つて、夜はおなじ景色を夢に視た。夢には、櫻は、しかし桃の梢に、妙見宮の棟下りに晁々と明星が輝いたのである。

翌日も、翌日も……行つて其の三度の時、寺の垣を、例の人里へ出ると齊しく、桃の枝を黒髪に、花菜を棲にして立つた、世にも美しい娘を見た。

十六七の、瓜實顔の色の白いのが、おさげとか言ふ、うしろへさげ髪にした濃い艶のある房りした、其の黒髪の鬢が、故と成らずふつくりして、優しい眉の、目の涼しい、引しめた唇の、や

や寂しいのが品がよく、鼻筋が忘れたやうに隆い。

縞目は、よく分らぬ、矢絣ではあるまい、濃い藤色の腰に、赤い帯を胸高にした、とばかりで袖を覚えぬ、筒袖だつたか、振袖だつたか、ものに隠れたのであらう。

眞晝の緋桃も、其の娘の姿に露の濡色を見せて、髪にも、髻にも影さす中に、其の瓜實顔を少く傾けて、陽炎を透かして、峰の松を仰いで居た。

謹三は、ハツと後退りに退つた。——杉垣の破目へ引込むのに、かさく々と帯の鳴るのが淺間しかつたのである。

氣咎めに、二日ばかり、手繰り寄せらるゝ思ひをしながら、敢て行くのを憚つたが——また不思議に北國にも日和が續いた——三日めの同じ頃、魂がふつと墓を抜けて出ると、向うの桃に影もない。……

勿體なくも、路々拜んだ佛神の御名を忘れようとした處へ——花の梢が、低く靨々……藁屋はづれに黒髪が見え、すらりと肩が浮いて、俯向いて出た其の娘が、桃に立ちざまに、目を涼しく、と小戻をしようとして、幹がくれに密と覗いて、此方をば熟と視る時、俯目に成つた。

思はず、爾時渠は蹲んだ、そして煙草を喫んだ形は、——此處に人待石の松蔭と同じである——が、姿も見ないで、横を向きながら、二服とは喫みも得ないで、慌しげに又立つと、精々落着

いて其方に歩んだ。畠を、や、めぐり足に、近づいた時であつた。
娘が、柔順に尋常に會釋して、

「誰方? ……」

と優しい聲を聞いて、はつとした途端に、眞上なる山懐から、頭へ浴びせて、大きな聲で、
「何か、用か。」と喚いた。

「失禮!」

と言ふ、頸首を、空から天狗に引摺まるゝ心地がして、

「通道ではなかつたんですか、失禮しました、失禮でした。」

—それから…寺までも行き得ない。

五

人は何とも言はば言へ……

で渠に取つては、花の其の一里が、所謂、雲井櫻の仙境であつた。たとへば大空なる紅の霞に乗つて、剩へ其の美しいぬしを視たのであるから。

町を行くにも、氣の怯けるまで、郷里にうらぶれた渠が身に、—誰も知るまい、—唯一人、

秘密の境を探り得たのは、潛に大なる誇りであつた。

が、ものの本の中に、同じやうな場面を読み、繪の面に、然うした色彩に對しても、自から面の赤う成る年紀である。

祖母の傍でも、小さな弟と一所でも、胸に思ふのも憚られる。……寝て一人の時さへ、夜着の袖を被らなければ、心に描くのが後暗い。……

—其を、此の機會に、並木の松蔭に取出でて、深祕なるあが佛を、人待石に、密に据ゑようとしたのである。

成りたけ、人勢に遠ざかつて、茶店に離れたのに不思議はあるまい。

其の癖、傍で視ると、渠が目彩り、心に映した—あの藤たけた娘の姿を、其のまゝ取出して、巨石の床に据ゑた處は、松並木へ店を開いて、藤娘の繪を賣るか、普賢菩薩の勸進をするやうな光景であつた。

渠は、空に恍惚と瞳を据ゑた。が、餘りに憧るゝ煩惱は、却つて行澄ましたものの如く、容も心も涼しさうで、紺紺さへ松葉の散つた墨染の法衣に見える。

時に、吸つたのが悪いやうに、煙を手で拂つて、呷の煙草入を懐中へ藏ふと、靜に身を起して立つたのは—更めて松の幹にも凭懸つて、縋つて、あせつて、煩えて、—此處から見ゆると

言ふ、花の雲井をいまはたゞ、蒼くも白くも、熟と城下の天の一方に眺めようとしたのであつた。然りとも、人は、と更めて、清水の茶屋を、松の葉越に差窺ふと、赤ちやけた、ばさらな銀香返をぐたりと横に、框から縁臺へ落掛るやうに浴衣の肩を見せて、障子の陰に女が轉がる。納戸へ通口らしい、浅間な柱に、肌襦袢ばかりを着た、胡麻鹽頭の亭主が、賣溜の錢箱の蓋を壓へ状に、仰向けに凭れて、あんぐりと口を開けた。

瓜畑を見透しの縁——其處が座敷——に足を投出して、腹這ひに成つた男が一人、黄色な團扇で、耳も頭もかくしながら、土地の赤新聞と言ふのを、鼻の下に敷いて居たのが、と見る間に、二ツ三ツ團扇ばかり動いたと思へば、くるりと仰向けに成つた胸が、臍まで寛ける。

清水はひとり、松の翠に、水晶の鎧を揺るる。

蟬時雨が、唯一つに成つて聞えて、清水の上に、ジーンと響く。

渠は心ゆくばかり城下を視めた。

遠近の樹立も、森も、日盛に煙の如く、重る屋根に山も低い。町はづれを、蒼空へ突出た、青い薬研の底かと思ふのに、きら／＼と眩い水銀を湛へたのは湖の尖端である。

あのあたり、あの空……

と思ふのに——雲はなくて、蓮田、水田、畠を掛けて、むく／＼と列を造る、あの雲の峰は、

海から湧いて地平線上を押し廻す。

冷い酢の香が芬と立つと、瓜、李の躍る底から、心太が三ツ四ツ、むく／＼と泳ぎ出す。

清水は、人の知らぬ、こんな時、一層高く潔く、且つ湧き、且つ迸るのであらう。

蒼蠅がブーンと來た。

其處へ……

六

如何に、あの體では、蝶よりも蠅が集らう……さし捨のおいらん草など塵塚へ運ぶ途中に似た、いろ／＼な湯具蹴出し。年増まじりにあくどく化粧つた少い女が六七人、汗まみれに成つて、ついで其處へ、並木を來かゝる。……

年増分が先へ立つたが、いづれも日蔭を便るので、振れた洗濯もののやうに、其の濡れるほどの汗に、裾も振もよれ／＼に成りながら、妙に一列に列を造つた體は、率あるものがあつて、一からげに、繩尻でも取つて居さうで、浅間しいまであはれに見える。

故あるかな、背後に迫つて男が二人。一人の少い方は、洋傘を片手に、片手は、はた／＼と扇子を使ひ／＼來るが、扇子面に廣告の描いてないのが可訝いくらる、何のためか知らず、絞の扱

帯の背に漢竹の節を詰めた、杖だか、鞭だか、朱の總のついた奴をすくりと刺して居る。
年倍なる兀頭は、紐のついた大な蝦蟇口を突込んだ、布袋腹に、禪のあからさまな前はだけで、土地で賣る雪を切った氷を、手拭にくるんで南瓜かぶりに、顔を締め、矢張り洋傘、此の大爺が殿で……

「あらッ、水がある……」

と一人の女が金切聲を揚げると、

「水がある！」

と言ふなりに、こめかみの處へ頭痛膏を貼つた顔を掉つて、年増が眞先に飛込むと、忽ち、崩れたやうに列が亂れて、ばらばらと女連が茶店へ驅寄る。

一寸立どまつて、大爺と口を利いた少いのが、續いて入り状に、

「ぢやあ、何だぜ、お前さん方——こゝで一休みするかはりに、湊ぢやあ、何處にも寄らねえで、すぐに、汽船だよ、船だよ。」

銀鎖を引張つて、パチンと言はせて、

「出帆に、最う、そんなに間もねえからな。」

「お、暑い、暑い。」

「あ、暑い。」

最う飛ついて、茶碗やら柄杓やら。諸膚を脱いだのもあれば、腋の下まで腕まくりするのがある。

年増の如きは、

「さあ、水行水。」

と言ふが早いか、瓜の皮を剥くやうに、するりと縁臺へ脱いで赤裸々。

黄色な膚も、茶じみたのも、清水の色に皆白い。

學生は面を背けた。が、年増に限らぬ……言合せたやうに皆頭痛膏を、こめかみへ。その時、

ぼかんと起きた、茶店の女のどろんとした顔にも、齊しく即效紙がはつてある。

「食るが可い。よく冷えてら。堪らねえや。だが、あれだよ、皆、渡してある小遣で各々持だよ

——西瓜が好かつたらこみで行きねえ、中は赤いぜ、うけ合だ。……えへッへッ。」

きやあら〜と若い奴、蝸の化けた聲を出す。

「眞桑、李を嚙るなら、あとで鹽湯を飲みなよ。——うんにや飲みなよ。大金のかつた身體

だ。」

と大爺は大王の如く、眞正面の框に上胡坐に成つて、ぎろ〜と膚を朶す。

唯其の中を、すらりと抜けて、襖も包ましいが、ちら／＼と小刻に、土手へ出て、巨石の其方の隅に、松の根に立つた娘がある。……手にも掬はず、茶碗にも後れて、浸して吸つたかと思ふばかり、白地の手拭の端を、蒼むやうに一才脚へて消れた。巢立の鶴の翼を傷めて、雲井の空から落ちざまに、宛如、晝顔の花に綻つたやうなのは、——島田鬘に結つて、二つばかり年は長けたが、其だけに尙ほ女らしい影を籠め、色香を湛へ、情を含むだ、……浴衣は、しかし帯さへ其の時のを其のまゝで、見紛ふ方なき、雲井櫻の娘である。

七

——お前たち。渡した小遣。赤い西瓜。皆の身體。大金——と渦の如く繰返して、其の娘のおなじやうに、おなじ空に、其の時瞳をじつと据ゑたのを視ると、渠は、思はず身を震はした。

面を背けて、港の方を、暗く成つた目に一目仰いだ時である。

「火事だ、」謹三は殆ど無意識に叫んだ。

「火事だ、火事です。」

唯見る、偉大なる煙筒の如き煙の柱が、群湧いた、入道雲の頂へ、海ある空へ眞黒にすくと立つと、太陽を横に並木の正面、根を赫と赤く焼いた。

「火事——」と道の中へ衝と出た、人の飛ぶ足より疾く、黒煙は幅を擴げ、屏風を立てて、千仞の斷崖を切立てたやうに聳つた。

「火事だぞ。」

「あら、大變。」

「大いよ！」

火事だ火事だと、男も女も口々に——

「やあ、馬鹿々々。何だ、そんな體で、引込まねえか、こら、引込まんか。」

と雲の峰の下に、膚脱、裸體の膨れた胸、大な乳、肥つた臀を、若い奴が、鞭を振つて追廻す

——瓜立つ、走る、緋の、白の、股、向脛を、刎上げ、雑伏せ、挫ぐばかりに狩立てる。

「きやッ。」

「わッ。」

と呼ぶ聲、叫ぶ聲、女どもの形は、黒い入道雲を泳ぐやうに立騒ぐ眞上を、煙の柱は、じりじり

りと蔽ひ重る。……

畜生——修羅——何等の光景。

忽ち天に蔓つて、あの湖の薬研の銀も眞黒に成つたかと思ふと、村人も、往來も、何時また、

——いかに成るべき人たちぞ……

く聞か、どツと溜つた。

謹三の袖に、あゝ、娘が、引添ふ。……

あはれ、渠の胸には、清水が其のまゝ、血に成つて湧いて、涙を絞つて流落ちた。

ばら／＼ばら！

火の粉かを見ると、こはいかに、大粒な雨が、一粒づつ、粗く、疎に、巨石の面にかゝつて、ぱつと鼓草の花の散るやうに濡れたと思ふと、松の梢を虚空から、ひら／＼と降つて、胸を掠めて、ひらりと金色に翻つて落ちたのは鮒である。

「火事ぢやあねえ、龍巻だ。」

「やあ、龍巻だ。」

「あれ。」

と口の裡、呼吸を引くやうに、胸の浪立つた娘の手が、謹三の袂に縫つて、

「可恐い……」

「……………」

「何うしませうねえ。」

と引いて縫る、柔い細い手を、謹三は思はず、しかと取つた。

楳杵に目鼻のつく話

私の知己に、兄さんは或美術學校の教授で、弟君は陸軍の中尉なのがある。中尉がまことに不可思議な事實だと言つて、いつもよく此の話をする。

幾度も聞いて居るので、順序も大概極つて居るから、お取次が出来る。處で乾三……乾の乾三、それにも及ぶまいけれども音讀ではいくらかも同じいのあるから申して置く。中尉が此の話をするのに、中へ出る娘を、いつでも屹と百合に譬へる。けれども純白なのではない、鹿子のあるので、娘は色が白く、きめ細かに、ふつくりして甘く薫つたと言ふのである。歌人か詩人だと、何とか斬新品さためもあらう。妙齡の娘を百合の花では餘りつい通りだが、軍人の見立だからまあ其處らかも知れない。

此の折に中尉が恚う言ふ。――

「で、其の百合の花は、丁度唯今申上げますお話の起る頃に、或邸の庭に――別に花壇と言ふ設もなしに――草の中にすつきりと莖長く一輪大きく咲いて居たのを見ました。が何うしても其の

娘にそつくりな気がして成らないのです。石燈籠がありました。根を、まだ穂の出ない絲薄がすうすう包んだ中に、恚う少し俯向いて咲いたのは、大な結綿を結つた姿そのまゝです。其の上に紅い帯をしめさしたら寸分違はないと言つて可いくらるです。

立派な邸で、庭も背戸も小兒が一廻りするには草臥れるほど廣うございました。昔、三千石取の武士の住まつた邸ださうで、僕がうまれました町内の氏神の社の奥に、森と生垣に包まれて別一廓に成つて居たのですが、此のお話の頃は、第×師團の某少將の住居だつたんです。僕が軍籍に就きました頃、閣下は最う豫備に成つて居られて、今頃は何うされたか分かりません。

何しろ多年経ちますから。

閣下にも男の兒があつて、其が遊び友だちだつたものですから、時々奥庭まで入りました。

然うです……其の百合の花は、奥庭に咲いて居たのです。向つて廻縁の高いのがあつて、それに五六壇の廣い階がついて居ました。朱塗です。

小兒は荒いから、邸では警戒して、不斷は奥庭へは入れないのに、其の時は何う云ふ拍子か、ごむ鞠のやうに發奮み込んだものなんです。

僕の内など、職人の町家には、地方でも餘り庭はありません。瓦鉢の松葉牡丹、缺摺鉢に植ゑた鬼百合の、あの眞紅なのさへ土から生えたのを直接に見るのは珍しいんですから、石燈籠に薄

をあしらつた中に、脊のすらりとした白いのが咲いた形は草双紙か、錦繪の景色を其のまゝに見るやうで、不思議と思つたくらゐりました。

其の時、階に腰を掛けて、白髪の總髪のお爺さんが一人居ました。

餘程の高齡です。海綿にしきのしを當てたやうな、少々角ばつた黄色い顔がぶく／＼して居る。夏でも白足袋を穿いて——此の時は秋でしたが——縹色に薄光のある綿の噴いたおさすりを着て、いつも羽織なしで、一寸二寸づゝ這ふやうに摺足をします。結付草履で、門内から神社の境内、邸の居まはりを生垣とすれ／＼に、撞木杖を兩手に支いて一歩づゝよた／＼と歩行いて居るのを遊影間はよく見掛けました。

何うかすると、其の體で、前町までも出て來るのですが、小兒たちから見ると、年齢と言ふより、餘り時代が違ふ人の故か形が其のためか、近くに居ても、ずつと離れた處に立つた老人らしくて、其の歩行くのが、道の方が動いて、ずつと寄つて來るやうで、地の底か、墓の穴からでも、ぼつと顯れたと言ふ様子です。が、少將の御隠居と言ふために威があつて位の備はつただけに、雲から下りて來るやうに思はれて、何となく尊く思はれるにつけても、小兒たちには可恐かつたのです。

——此の老人は本間家の御隠居、少將閣下の父上なんですが、晝間、寂しい時、社の中や、黄

昏の町で、ふと其の薄着い着ものを着た、眞白な總髪を視ると、音に聞く……天狗が假の形を顯したかと思ふばかりだつたのです。

いつも苦切つた澁い顔して、何を視るともなしに、薄目で睨んで居て、殆ど口を利いたのを耳にしたものはありますまい。

餘程御機嫌のいゝ時でせう。何うかすると、頤を引いて、しやくるやうにして、居合せた小兒を呼ぶと、可恐れけれど、通力で引寄せられるやうで、戦々兢兢々、傍へ近づかないわけには行きません。——行くと、すき切れのしたお絹衣の、ハテナあはれは白い毛ぢやあないかと、思ふ綿のすく袂から、椎の實を五つばかり、つらに爪の生えたやうな手で、だるさうに、恚うぼたりと指を開いて、小さな掌へ落してくれませう。

邸の背戸にある椎の大木で、あいつを揺つたらと、小兒たちは富士の山ほどに思ふ、其の實を拾つてくれるのでせうが、此ばかりは何となく薄氣味が悪くつて食べられなかつたものなんです。……時に、吃驚したやうに、其の百合の花を見て立ちました。色が黒いから僕は蟬、一所に居るお邸の坊ちゃん、づんぐりして居る處がお蝶だ。——建具屋の鐵公は、すばしつこい處が蟬、蛸だらう。序に内の兄は、ひよろで生白いから露蟲かなどと思つて見て居ると、正面の其の階に、ふはりと腰を掛けて、据ゑつけたやうな御隠居が、例の薄目でじろりと視ると、鼠色の唇をぶ

るぶると動かいて頸窪で白髪を摺つて、顔を横に向けて頤でしやくつた。

「彼方へ行け……」

と、言ふのです。

一所に立つたのが、孫の坊ちゃんだから気が強い。其の友だちが駈出さないから、僕も居ると、朱の撞木杖で、とんくと、飛石を敲きました。

「は、ア——」

と友だちが突如蹲むと、妙な形に揉手をしながら、

「ねえ、ねえ——」

と後退りをして、其のまゝ連立つて背戸の方へ飛出す拍子に坊ちゃんはぺろりと、舌を出して、

「鬼一法眼め、ちえッ——」

と言つた。

咄嗟には、何の事だか分らなかつたのですが、其の折から邸の背戸の大竹藪越に、——遙に笛を交ぜた囃子の音が聞えたので、あゝと合點が行つたんです。

鳴り静めて、すつと遠い處のやうですが、大藪のうらが、すぐに樂屋に成つて居る、小芝居があつて、當時、女俳優の一座が掛つて居たのです。

小遣ねだりの立見か何かで、僕も其の菊畑とか言ふのから、續いて、忠信の狐、鼓を持つた美しい静の立姿などを見て知つて居ました。

以上が、いつも此の事について語る中尉の前置である。

此からお話——

二

却説、中尉乾三君の話は、順序として、何時も古ぼけた黒板塀の裏木戸に掛けた木札からはじまるのであるが、これを怪談だとすると、さしづめ幽霊の鬼火の形だと言つても可い、妙に捻つた、ぎざ／＼のある古木をけつツた面へ、

(今日は此の家に居り侍り、)

御方様たち、おなぐさみ。

と、變にべた／＼と太い線と、細い棒の字で認めたのを打釘に掛けてある。……場所は、神社の廣前を、廻廊について折曲ると、一方が少將本間家の垣で、突當りに宮の本殿と柵を隔てた山椿、銀杏の繁つた土塀の前に地主神の祠がある。其處から細く狭い……何處の國でもおなじやうな名をつけて呼ぶ……暗闇坂を下りると、汚い、暗い、人家の裏から、町中を貫流する大川へ出

るのであるが、人通はめつたにない。……心得ないものが見れば、坂とは言はず穴のやうな畦である。

此の畦の一方が、おなじ少将家の矢張り外圍ひの生垣で、片側に其の書札の懸つて居るのは、前町の中の、とある小路をぐるりと一廻りした處に入口の門のある、荒れた大な古邸の庭から、こゝへ抜裏の木戸であつた。

生垣には木槿が咲いて、此の花が秋晴の日中にも、露に亂れて美しい。

地主神の祠と、木戸と三方向合つた本間家の垣の、一畝りして坂の曲らうとする角に、餘所では誰も見掛けない、珍しい樹の大きなのが一株ある。榎梓——で、此の根の張つたために、垣も其處は膨らんではちきれればかり、土も根柢も薄暗い處にこんもりと茂つて、下から仰ぐ幹の半に、白、絞、水紅色の其の木槿が盛な今頃は、林檎に似て、や、楕圓形の、薄蒼い、小さな瓜ほどもある實が、枝に、葉に連り實つて、此の陰氣なじとくとしたあたりは、近づくと最う澁甘く、そして酸味のある香が、芬と滴るばかりである。

唯、其の樹の下に、蒼びかりのする、お絹衣で、天狗の化身……否、本間の隠居が、白髪を白く、赤い撞木杖に兩手をのせて、腰を据ゑて、薄目で撓めて、頤で覗くやうに、其の裏木戸の掛札を凝と視て立つて居た。

「叱られやしないかなあ。」

と乾三が囁くと、

「何ともねえよ。」

と鐵公が承合つた。

乾三は、いたづら夥間の建具屋の鐵公と二人で、小兒には、年に一度の書入時の、榎梓の實を拾ひに来て、すばやい鐵は、最う二顆。ぶらんと鍵裂のある袂に一顆と手に一顆、疵のないのを拾つたが、乾三は落ちて破れたり崩れたりした中をこつこつと選むうちに、隠居が朦朧として顯れたので、祠の方へ遠慮して、其の白髪は何處へか見えなく成るのを待つたのであつた。

が、静と立つて動かない。

坂の下から、ぼくぼく……黒土の坂に、はずまない靴音がすると、上つて来たのは巡查さん、——式の如く人通が稀で樹の下の薄暗さ、盜賊が晝寢でもしさうな場所ゆゑ見廻りに来たのであらう。

佩劍を遺放しに、兩腕を拱いて、薄眠さうに、ぼくりと上つて来た鼻の前へ、赤い撞木杖が道を切つて、ぬいと出たので、ぎよつとした體に仰向いた。鼻下に髭のある顔に、海綿の皴も向けないで、隠居の杖は、件の懸札を眞直に指した、が、ぶるくと動く。……

巡査は立停まつた。

狭い坂の上を、直角に切つてぶる／＼して居る杖である。

搔潛るか、引拂ふかしなければ、忽ち髯をゴツンで、通れはしないから。

「何で……ありますか。」

巡査は一才擧手の禮を施した。界限受持の警官で、小兒たちも見知越であるから、少將閣下の父君であるため、地方の事で敬意を表したものであらう。

「はあ、何でありますか、……はあ、此の札。」

と劍を垂直に、懸札を見て立つと、隠居の杖も垂直に下りた。で、ぶる／＼と其の薄黒い唇を動かす。小兒の目にも、杖で指して、懸札の意味を隠居が詰つたと見て取られる。

「はあ、はあ……今日——今日か、今日は此の家に居り侍り……ふん。」

と撈るやうに髯を捻つて。

「……御方様たちおなぐさみと、……ふん、はあ、はて、……いや、本職も唯今はじめて氣着いたです。が、何なる廣告、何等の意味でありますかな。——居り侍り——な。む、書は男子

ですが、女子の言句のやうでもあるです。變です、不可解ですわい、はあ……いや、御注意を謝します。」

と又一禮に及ぶ處を、杖が再びぶるりと指す。

「は、一應檢べるです。……直ちに取檢べんけりや成りません。——開きますかな、しかし、此處は開くかな。」

と一步退つて、ついと板扉を見廻した、が、すでに木戸に手を掛けると、ぎし／＼と軋んで開いた。

爾時の形が可笑かつた。半身を庭が呑んで、洋服の腰と劍が靴を爪立てて外へ出て居た。巡査は、ぐつと入身の中を窺つたものであらう。やがて一跨ぎして入つたのである。

隠居は心持頷いた。

乾三は、ちよろりと地主神の祠の裏から顔を出して覗いたが、もう一息奥に、銀杏の落葉をかさこそと鐵公は潛んで居る。興行中の芝居かぶれに、いけすな面を、辨慶だか、忠信だか、色を塗つて隈取つて居たもの。

「それ、出た。」

耳の疾い事。

「御大人、は、。」

と巡査は、隠居に面して、淺く笑つて、

「速に相分りました。仔細ありません。これは——御承知でもありませんが、前町の角に旅店を営み居ります、彼の宮本ですな、宮本の主人がですな。豫々活花、茶の湯等をたしなみますが、自宅は手狭でありますので、當家に於て、此の庭に面しました一室を借受けて、時々其の出張をするのださうであります。——釜を懸けて、ちやんと控へて居つてです。——はあ、で、同好のものは遠慮なく、來つて慰み、ともに樂むやうにと風流の友を招く、此は口上ださうであります。」

そんな事か、それなら巡査さんより僕の方がよく知つてゐる、と乾三は小耳を立てながら、然う思つた。

宮本と言つて、脊の低い、額が兩際へ禿込んだ、演劇でする落魄れた浪人のやうな小父さんだ。旅館と言つても、ほんの素人旅籠で、女中一人置いてあるわけではない。町内の若いものの、それも大勢ではないが、四五人も集る、發句の點をしたり、今言つた活花だの茶の湯だの、手ほどきをする——兄なども時々出掛ける。

其の小父さんがこゝへ來て、茶の湯とかを遣つて居るのだ。

「は。」

巡査は吃驚したやうに、懸札の文字を見た。

隠居が又しても唐突に杖を突出したのである。

「は、あ、——居り侍り、——いや、女子の言句らしい點に就いては、ですな……別に立入つて訊正もしなかつたですが——娘が來て居りますわい、宮本の、はあ。娘と一所にと主人が言うて居つたですからして、矢張り茶の湯を行るのでせうな。ために、口上のうちに女性を含んで居るかにも考へられます。はあ、で、御大人には、何等か御不審の點——は、あ、御了解に相成りましたか。……御大人も、如何です、御徒然の折から些とお慰み。」

と木戸をしめ状に言ひかけて、

「しかし奇抜ですな、誰も一寸これは氣が付きますまい、御方様たち、おなぐさみ、——」

と札と隠居を等分に視ながら、

「御免。」と會釋で、前を抜けて、反身で境内へ、劍の鞘が光つて行く。……

鐵公と二人は、言合せたやうに、祠の陰からひよいと出た。

事ありさうに、物議を起して、巡査が故々庭へ入つて檢べたほどの懸札である。小兒に取つては降つて湧いたもの珍しさの好奇心、口では言はぬが同じ思ひで、待しばしも何もない。

「や、此だ、此だ、此だ。」

と鐵公は札の前で、二度ばかり躍上つた。攀上りさうな勢で、

「乾ちゃん、讀めるかい。」

「讀めらい。」

今日は此の家と讀んだ時、ふと氣に成つたは、札の横のふし穴で、縦裂も横破れも透間は扉に矢鱈にあるが、其の一番小さいのに、水晶のやうな目が一つ。

「あゝ、音羽ちゃんだ。」

と即座に思つた——いま風説の宮本の娘である。

「今日は——此の家——に居り居りだ。……其の次は變な字だぜ。」

と鐵公は跳ねながら、背後に天狗の居るのも忘れた。……縦嚙り楯棒に、みしと齒を立てて、下齒で引搔いて、ふツと青い皮を噴散らしたと思ふと、

「わツ。」と言つて、怪飛んだ。

御隠居の杖が、其の出尻をぴしりと一つ見舞つたのである。

「痛え！ 痛いや。」

きかない氣の鐵公は遁足を捻り狀に隠居に齒向いた。隈取つた異様な獅嚙面を硝子覗機關の崩

れたやうに、くしやく揉んで、

「へッ、樹から奪つたんぢやあござんせんや、拾つたんで、へッ、拾つたんでござんすよ、痛

えなあ。」

又ゴツン。

「痛えツ！ 酷いや、酷いなあ。」

強情な奴で、なか／＼遁げぬ。泣きながら地だんだを踏むのを視て、隠居の唇は一際暗く成つ

て、檀木杖を振被つた。

振上げながら、且つ振向いて乾三の方をじろりと視た。と遁げるにも、杖の下を潛らなければ

成らない。——乾三は泣出した。

ぎきいと木戸が開くと、紅い蹴出しがちよこりと出た。

「御免なさいませよ。」

と優しい聲。

結綿島田の大きなのをゆらくと、白い片手で翳すやうに杖を留めた。が、片袖で包むばかり

庇つたのは乾三の方であるから、隠居の杖は下りしなに、鐵公の頭を掠つた。

「きやツ。」と叫ぶと、くる／＼と舞つて遁げた。

踵を打つて裙長く、素足に庭下駄を穿いた、音羽ちゃんの妙に媚いた風俗を下目で見ながら震へて居た乾三が、袖の中から密と顔と島田を視た。
此の時である。四邊は森然と楳梓の香に満ちつゝ、赤い帯した姿を、百合の花其のまゝと思つたのは。

「さ、行らつしやい。」

背中を撫でて、押すやうに出してくれた。

駈出す處を、背後から、

「お兄様に、よろしく……ね。」

唯、楳梓の下を垣根について、一方に奥殿の玉垣を見る時、——お宮の神主が高い廻廊の北の端の處に、欄干づれに伸上つて、暗がり坂を差覗いて居るのに気がついた。
嬉しや……氏神のおもり役は、小兒の泣聲を憂慮つて、——

四

——お兄様によろしく……ね——
「乾吉と言ふんです。」

と中尉は、いつも此處で一寸更めて言ふのであるが、——

其の兄に、ことづけを聞いたのははじめてであるし、又どれほどな知己だか分らなかつた。

唯、兄と音羽ちゃんについて乾三の知つて居るのは、——同じ年の梅雨時分であつた。陰鬱な、

しかし雨の晴間を、黄昏に、夫婦づれらしい寢た旅のものが二人辿つて來たのが、乾三の家の、仕事場の格子に立つて、宮本、と申す旅店は、と言つて、揃つて菅笠の手を下げた聞いた事があ

る。
職人たちは、最う仕事を済まして歸つたあとで、折から居合せた兄が丁寧な教へた事は言ふまでもない。

其の晩、燈の下で、晩食のあとを、孔明が何うの關羽が何うのと、父と三國誌か何か話をして居ると、雨つゞきのあとの薄寒い夜で、最う蓆を下した、戸の外へ、此の横町の山寄り辻の方から、コト／＼と、低い聲音が軒づたひに近づいて、乾三の店の前へ來たと思ふと、はたと止んでそれなり消えたやうに寂寞する。

唯、顔を上げた兄が、何と思つたかフイと諸脛で立つて、トン／＼と二階へ上つた。

妙に薄さみしい氣がして、間の隅が見廻されたくらゐである。

——あとで、乾三が二階へ上ると、兄は机に頬杖をついて居たが、

と兄が言つた。
 「いゝえ、それは、あの、私がかかるりませけれど、父から申しました通り、おいでをお待ち申しますわ。」
 「よう。」
 と又職人が揃つて戻る。……
 音羽は火のやうに顔を染めて、カタ／＼と駈出したが、其の晩、兄は其の月待に招かれて行つて、乾三の寝る時分、まだ歸らなかつた。
 明方、勢よく、乾三を揺起して、
 「おい、月の出の話をして遣るよ。起きろよ、起きろよ。」
 と揺つて、抱いたり、小突いたり、耳を撮んだり。
 「寝坊め。」とあは／＼笑つた。
 起きるもんか、そんな時分。
 あくる日——宮本の表二階から眞正面だと言ふ、春日山と臥龍山の峰の分る、處へ、きらりと鉄形の如く輝いてのぼると傳ふる。——其の二十六夜の月待の景色を聞かうとすると、忘れたやうに、ぼんやりして居た。

「乾三、今来て戸外へ立つたのを當てて見せようか。」
 「うむ。」
 「宮本の音羽さんだよ。——用事は、祖母さんに、お米を借りに来たんだ、屹とだぜ……若い男が居ちやあ極が悪くつて入れないんだ、可哀相にな。」
 と云つてほろりとした。
 其の通りであつた。
 最う一つは、つい近い頃、お互に貧乏ぐらしでも、宮本は風流人だから、二十六夜の月待をする。
 「まだ些と陽氣が早いんでございますが、薄のあります處を、御存じではないでせうか、一寸御伺ひに。」
 と店へ音羽ちゃんが使に來た。
 美しいので、職人たちは、
 「よう。」
 と戻る。……
 「立野の原だとあります。……些と遠いから、僕が取つて來て上げませう。」

——其だけであつた。

五

「乾ちゃん。」

此處は榎榎の樹のある處とは反對の側の、すぐに前町の片側の、續いた軒の背戸々々が見える。氏神の宮の縁の片隅に、小さな胡坐かいた鐵公が、聲を密めて、ものありげに。

「乾ちゃん、お前、何だなあ、此間あれだなあ、本間さんの坊ちゃんの庭へ遊びに行つて、大藪の中で何だか見たつて言つて居たぜ。——眞個か。」

「藪玉よ……大な蜘蛛の巣か。」

とうつかりして、氣もなく言つた。

「馬鹿言つてら。」

と鐵公は低い鼻を仰向けて、日向を吸つて嘯いて、

「藪玉や蜘蛛の巣が何に成ります。そんなものを聞きますか。へッ、そら、眞紅な何だか綺麗なものがあつたとか、居たとか言つたぢやあねえかよ。」

「あ、それはね、藪の中ぢやあないよ。」

「では何處だい。」

「うむ、藪の中は藪の中だけれども、ズッと奥へ入つた畦のね、深い溝のちよろ／＼水が流れてる處に居たんだ。——綺麗なものだつた。眞紅でね、上にきら／＼と金色が懸つて光つて居るんだ。一寸見ただけだよ。僕たちはね、妖怪退治の眞似をしに入つたんだから、やあ、ござんなれツて、然う言つて、坊ちゃんが假聲を使つて、持つてた半弓の矢をはなした。當つてね、すぐに隠れたけれど、追掛けて來ると恐怖いからつて遁出したんだよ。あ、。」

「君!……」

と鐵公は猪首をすくめて、一層低聲で、

「何だと思ふ。」

「なにを。」

「その、紅い煌々して綺麗なものだよ。」

「本間さんの家の、ぬしですよ。」

今は散つたが、蜻蛉つりにも面影立つ、境内の百日紅の色より、生垣を隔てた傍の背戸に咲残る。夾竹桃の花にして尙濃かつたのを思ひながら乾三に然う言つた。

「五百年経つた赤蛙だつて言ふけれど、違ふ……僕内のは化緋鯉だつて坊ちゃんが言つて居た。」

「へ、嘘だ。」

「ぢやあ、坊ちゃんにでも誰にでも聞いて見るさ。……ぬしは居るんだよ。何處の内にも、蟹だの、龜だの、鼠だの、蜘蛛だの。」

「そりや、そりや居るさ、ぬしは居ますさ。僕内のなんざ蛇だけれどもよ。……お前の見たのは然うぢやあねえや。」

「だつて、坊ちゃん……」

「そのな……坊ちゃんだつて知らねえんだ、知らねえで、ぬしだと思つてるんだけれど、違ふ。……おい、言つて聞かせようか、誰にも言ふなよ。」

と鳶肩をして、又低聲で、

「それはな。帯か、袖か、腰巻か、何でも女の着ものなんだ。」

と横撫のある袖を引張り、膝小僧を小刻に敲いて饒舌る。

乾三は目の前に、潑と虹が掛つたやうに目を睜つた。

——思へば、大藪をまれて、其の一幅が草がくれに水に映つて、虹の彩にも似たのであつた。

六

「へつ、其處で、其の女を誰だと思ひます。」

鐵公は、掌で抱へた頤を突出して言つた。

「俳優ですぜ、若い女俳優ですぜ、——お前、あの、水溜の小屋の義經の芝居で、美しい靜御前を見たらう、見たかい。」

それは視た。

「あの女が殺されたんです。」

何を言ふやら、餘の事に乾三は唯黙つて聞くと、

「芝居の方ぢやあ、何處かへな、遁げ出して行方が知れないつて事に成つてるんです。そら、入が餘りなかつたらう。そんな時はよく遁げるのがあるつてよ。——最う一人、何とかつて俳優と二人遁げたんだけつて、其の方は何うでも構はないけれど、あの靜御前をしたのが居なくつちやあ、お前、尙の事入がないぜ。だから病氣で休んでるつて誤魔化して居たけれど、それでも、たうと休んで了つた。だもんだから一座はな、とやつてものに成つて何うすることも出来ないで居るんだとよ。それでもあれだ、靜御前は遁げたんだけと思つてるんだ。——僕ン許は芝居のすぐ前だ

らう、樂屋にも知つたものがあつて、よく知つてるんだ。それが、お前、眞個は、處で、お前殺されたんです。誰が殺したと思ひます。へつ、分りますまい。」

「本間の隠居よ。」

とスカリと言つて、きよろ／＼と四邊を見廻す。立派な門が向うに見える。

「天狗だつて言ふが然うぢやあねえ、天狗はお前、人を攫んで去つたつて、股から引裂いて樹の上にぶら下げたつて、悪いことをしたものに罰を當てるんだけれど、爺いのは然うぢやあねえ。綺麗な娘ばかり狙つてな、人身御供に取るんだい、彼奴あ、狒々だぜ。」

と額に皺を刻みながら、

「それで以て、お前、あの、美しい俳優をよ、裸體にして食つたんだ。其の衣ものを大藪の溝へ突込んで隠したんだぜ、そうら、何うだ。——それからな、食餘した死體をよ、其奴をそうら、……」

と顔を見る。饒舌るのを聞く發機に、榎梓、と思つた通り、

「榎梓の樹の根方を掘つて、突込んで埋めたんです。……だから。一人でも、誰か、人が、あそここの傍へ行くのを可厭がつてそれでもつてからに、廣告の札を心配したり、杖で打つたり酷い事をしやがるんだ。……畜生、痛いぜ、狒々め。」

と獅嚙面をベソにして、

「僕あ泣いた事なんかねえんだけれども、痛かつたぜ、畜生！ 矢張り、食やがる前に、靜御前の姉さんを、あの杖で打つて半殺しにしやがつたに違えねえんだ。」

馬鹿な事をと、思ひながら乾三は身震した。

「それで、なくつてよ、……誰が黙つて食はれるものか。屹と打つたぜ、裸にして其の何だい、白壁にちよろ／＼火つて女俳優をよ。」

一も二も何も無い。撞木杖で撲はされた遺恨に、不斷から亂暴ものの癖に、——蛇が家のぬしだと公言するほど執念の深い對手であるから、事もあらうに御隠居を殺人犯にして出放題に相違ないとは、小兒心にも合點がいつた。

が待てよ、——嘘を言ふにも程がある、と餘りに其のあくどいのに悚毛を立てたが、いまの（白壁にちよろ／＼火）でよく分つた。——鐵公ばかりの作意ではない。豫て聞嚙つたいろ／＼の談話を絢交ぜにしたのである。

——此の社務所に、見習の神官で、渾名を（女郎）と言つた、しよなく／＼した若い男が居た。面と向つては、まさか女郎とも言へないから、上臈さんと言ふと、は——いと嬌態をする。……此の

頃は最う京阪地で、新派の俳優に成つた、と聞く。……

其の神官女郎が、實際話すきで、よく此の廊下へ前町の小兒たちを集めては身振假聲まじりてさまざまのものを語をしたものである。題は、俊徳丸、三莊太夫。そんなものより武しや修行の武勇談が大得意で、一條の中には大抵美しい娘が山賊にとらはれるか、人身御供に上る場面が出る——其の娘が、或は迫害、或は凌辱を被らうとして、あはやと言ふのが白壁にちよろ／＼火で、火が燃えると言ふ意味ではない、衣が解けて、手足亂點、肌に緋縮緬が亂れて翳む形容である。トタンに會心の英雄が顯れる。——

鐵公のは、其の横脚へとは言はずとも知れよう。

「ぢやあ、それぢやあ、其處で誰か強い人が行つて助けるんぢやあないか。」

鐵公はまくり手に、威す眞似して、

「馬鹿、そりや昔の話だい、眞個の事が然う巧くゆくものか、馬鹿言つてら。」

「では、何故、警察で黙つて居ますか。」

「あれ！ 分つてらい、知らねえからさ。でも、こんな事はうっかり饒舌ねえよ。少將閣下の御隠居の事だからな。」

「然うすりや、殺された人は可哀相だなあ。」

「だからよ、それだから、内證でお前に聞かして遣るんだ。——お前ん許でも然うだし、お前だつて、あの、宮本の小父さんを知つてるぢやあないか、あの、小父さんは、お前何だと思ふ。……え、警察へ勤めてるんぢやあないけれど、探偵だぜ、探偵の下働きだぜ。——だからな、密と然う言つてよ、何うにかしてよ、静御前の敵討をして遣らうぢやあねえか。」

「可厭だい。」と乾三は立處に頭を掉つた。

「いつつけぐちをする奴は、殺したものより尙ほ悪いや。そ、それだし、そんな事を言つたつて證據も何もないぢやあないか。」

「證據呼ばはり、へん、よしてくれ。」

と噓然として、鐵公は怪しい假聲で、打棄るやうに言つた。

「あの、爺が二度も三度も芝居に入つて居た事は僕だつて知つてるぜ。——袂の椎を嚙つてな、……樂屋の裏は、風呂場も一所に、お前、帷一つで、すぐに本間の大藪ぢやあねえか、寂い日暮方よ。……故郷でも戀しかつたらう、長旅の女俳優だから、鼓を持つたまゝで、ふらりと出る處を、向うの藪に、あの爺があゝの形で、薄ぼんやりと、神様だか、魔だか知らねえ立つて居て、ぬうと撞木杖を出して招いたとよ。……爾時な、爺がな、片方の手に、同じ鼓だとか、袱紗に包んだものとか持つて居たつて、見たものがあるんだ、僕内の職人の中によ。」

見たものがあつて、然う言ふけれど、あの、椎の實爺め、僕は榎椀の實だらうと思ふぜ。其奴が狒々の通力で、静御前の目に、玉子ほどの寶珠の珠、眞珠かなんかに見えたかも知れねえ。情と成つて誘はれて行つた處を、それ、大竹藪へ引込んでな、白壁のちよろ／＼火だぜ。」

秋の暮だの、故郷だの、長旅の女だの、鼓を持つたの、鶏卵ほどの寶珠だの、眞珠だの、ぶらぶらと誘はれたのと、いづれもお女郎神官の話の中に織交ぜてあつたのを、糸口もつけずに引出したものらしい。建具屋の職人の中に見たものがあると言ふ。それにしても、中僧小僧ぐらゐるな處は、いづれも町内の若いなかまで、お女郎の話のき、手の中に交つて居たから。

しかし、何にしても惨たらしくて聞いて居られぬ。よけて遁げるやうに階へ出て立つと、秋空を颯と一陣の雁が渡つた——あ、あの中に、行方の知れない静が交つて飛びはしないか。砧打つと響いたのは、榎椀の實の音かも知れない。

七

日はわすれたが、裏木戸には例の懸札が出て居たから、世間並に然うした催を、月六齋——此は後に心着いた事ではあるが——それだと次の週の中頃であらう。……日の暮方、其の時は乾三唯一人であつた。

如何に寂い場所でも、穴に似た暗がり坂の、底は知らず、降口の處までは行馴れた境内の地續きだし、土地の守護の神はおはす。家を出る時、ちゃんと帯の結目を敲いて貰つてある。……鐵公の言つた、此の榎椀の根に、亡體を埋めたなどは、何處で聞いても不氣味な事は同じだけれども、頂から嘘だと思ふから可恐しくはない。

いまが熟れ頃の食べ頃の……あ、唾が走る……榎椀の實を取らないで我慢が出来るか。——晝からも二三度窺つたが蝸牛だつて最う些つと早く歩行く……何時も同じやうな垣根に、白髪が杖に縋つて這つて居た。……過般にこりて傍へも寄り着かれないので、廻廊から覗いては引込み、引込み、恚うして時間を移したのである。

恰も居ない。生垣の霧も爽に霽れて、木槿の花さへ、吻としたやうに露を吸ひ、露を散らす、露は散りつゝ風もなかつた。

榎椀の樹は、いま其の幹までも芽と薫る。強い薫に包まれたやうに、葉の下に立つと、さながら乾三は、木精が興ふるものの如く、梢からトーンと手鞠のやうな實が一顆。落ちかゝるはずみに空に弧を描いてトーンと響いて、其が地主神の祠の屋根へ落ちた。が、ころん／＼と二つばかり棟を這つて、ぼたりと其處へ、最う一息で地へ轉がりさうな、瓦の出端で一度留まつた。

銀杏の落葉の散敷いた上に、黄なる盆に乗つて、水々とした色を浮上らせた形は、地に落碎け

たものの類でない。

其處は小兒で、眞下へ行つて、手を擴げて仰向いて待つた。

又、不思議に、ことんと動いて、スツと落ちたが、受ける手が小さくて、取外すと、又つて外れて地へ落ちた。

熟した大な果實は、此の時に二處、小指で壓したやうな疵がついた。……其を嬉しさに、兩手で拾つて持つたが、莞爾しながら板塀の節穴に目を遣つて、又莞爾した。

音羽の目が一つ、其處を覗いて居た處である。唯、楹棹のいまの小さな窪が、目を刻んだやうである。

が、何も思はず、齒を當てると、同じ形に、其處が又目に見えて、行儀よく二つ並んだ。

あんぐりと又遣つた。が、今度は、我が舌を噛むまで吃驚した……其處が口と同じに見えたのである。

地主神の銀杏のはづれを、古土塀の大楯の上から、葉越に半輪の薄月が、スツと映すと、蒼白の中高な顔が一面、乾三の掌へ乗つた。

あの時、神主の姿が見えぬと、きやつと叫んだまゝ、投飛ばして遁げたであらう。廻廊の端へ、玉垣の上へ乗出すばかり、烏帽子を高く立てて此方を差覗いて居たのが、此の時

笏を伸ばして、焦う、その乾三をさし招く。……過般と同じ神官で、此は當社の宮司である、が、夕拜のまゝの服装だと見えて、紋紗の装束をつけたのに、月が染みて、木槿垣の花の影が、淡紅も、白も、ともに絞に成つてほんのりと映る。……

頬は瘦せて、澁色した、面に痘痕はあるが、其の打上つた姿なのが、靜に笏を以つて、装束の袖とともに卷込むが如くじつと招く。乾三は引寄せらるゝ如くちよろゝと寄つて行く。

行く……其のうちに、雲を踏んで沈む體に、装束の腰は、次第さがりに低く成つて、欄干に袖をふはりと折掛ける。

處へ、雨おちの溝を越えて、石だたみへ上ると、旗竿の前から顔を出した。

「此へ……」

と、しやがれた聲して言ふ時、宮司は笏を納めて、手を出して、

「其の子、手にあるものを。……楹棹か。——」

ものをも言はず、唾をのみながら差出すのを、じつと取り、ころんと持直して、兩手に据ゑて、斜に向直つて歌膝を立てた時は、楹棹の顔が一層はつきりと蒼白く、ぼつと、やゝ仰向けに浮いた。

「翌日來ませ、童子、御褒美を取らせませする。」

聞棄てに、石だたみをすたくくと小走りした。が、角の欄干の手の下に、一寸小がくれて、少時して、何か、不思議さに、密と覗くと、一隈薄暗く成つた廊下のはづれに、向うむきの宮司の手なる榎棒は、尙ほ面影立つて、黒髪も長く、影のやうな白い胸も、腹も、柔軟りと膝の上に、女を抱いたやうに見えた。

あゝ、乾三の齒のあとの、其の口を、眞うつむけに成つて、宮司は、ぴたくぴたくと吸つた。

八

氏神の宮の神官、——分けて、冠、束帯した姿は、不斷から普通の人間ではない。緋の法衣、紫の袈裟の坊さんより、もつと尊いもののやうに小兒には思はれる。其の神主が、

「御褒美を取らせませす。」——

第一それ、口のきゝ方からして凡でない。

時間に約束はなかつたけれど、何となく、自然の規則があるやうで、昨日と略同じ時分に社へ行くと、祭日、三日と言ふのではないから、石の御手洗の噴上の水の音も絶えて、境内は寂寞として、時々木の葉が散るばかり、拜殿には人の影もない。

こゝで、聊か覺束なかつたが、何うかと思ひながら、横へ折れると、繪で見る山の端に鹿が、頭行んだ形に、廊下の端に神主が立つて居た。

待兼ねたやうに、又笏で招いて、近々と寄せて、幾干か知らん、金をくれたが、乾三は斷じて取らなかつた。

強ひても横に掉る頭を撫でて、

「よい兒ぞ。……別の御褒美を取らせませす。……また、榎棒をな。」

乾三は合點々々しながら、

「落こちて居るのも可いの？」

「苦しうない、苦しうない。ぢやが、泥土に汚れ居らばな、御手洗で洗うてくれませい。」

うまい事を聞いた。此からは此方も然うせう。

が、また折よく、五ツ六ツ落重なつて居たので、其の中から清潔らしいのを拾つて、矢張り、節穴に音羽の目がありさうな氣がして、莞爾笑ひながら、女の子のする鞆を抱くやうにして衝と急いで欄干へ持つて行くと、捧げる榎棒を、凭う、袖ぐるみ笏をあげて翳すやうにして撓めて見たが、

「昨日のやうに、童子、目と口をつけてよこしませ。」

と、のり調子で言つた。

三處、齒のあとをつけたのを、見ると我ながら顔に似て居る。

例の如く搔込んで、抱取つて、

「去ねや、童子、明日も來ませ、よい兒ぢや。」

と、とんと斜に歌膝に成つた。

ちよろりと隠れて、竊と視ると、いや、又びたくと舐める、吸ふ……

今度は不氣味なより、可笑いのであつた。

「兄さん——」

おなじ事が四五度あつてから、榎杵を一顆持つて歸つて、兄に見せて、其の話をした。……同斷に齒形をつけたのを、袂からゴツンと落とすと、疊の上へ、一つはすんで、仰向けに丁度顔が出た。が、齒でつけたあとが錆びて、一雙の目は黒く、唇は澁色して、燈火に赤らんで見えたのである。

兄は机に凭れて、傾いて、黙つて凝と視て居た。

「乾三、串戯に、此奴を持つて行つて、榎の法印に聞いて見ないか。」

と言つて、見料を渡した。

おもしろい!

榎の法印は、年はまだく三十には成るまい。横ぶとりのづんぐりしたのが、髪を長く、元結で結んで切下げにした男で、秋も半ばを過ぎたと言ふのに、まだ浴衣を着て居る。薄汚い襟のかかつた襦袢を襲ねて、此の町の表通りを、下町へ出る處に榎坂と言ふのがあつて坂の上に大榎が一株ある。其の樹の下に、根に絶つて、四本柱に板屋根を葺いた、蟲籠の如く切り燈籠に似た小屋に居る。手品師で、卜者で、でろれんを語る旅藝人である。

田舎まはりの寄席の落こぼれだとも言ふし、もとは俳優だとも言ふ。嘗て劇場で興行して、一時人氣のあつた全世界周遊の奇術師、放流齋テレメンの弟子で一座を脱走して残つたのだとも言ふ。夏場の露店に出て居たのが、とやに就いて巢立ちも成らず、埒に居る。が、夜番の名儀で町内でも大目に見て置く。

竹の欄干に、蜜柑箱の臺を飾り、古新聞を敷いた上へ、一、觀世よりにて火を釣る法、一、茶碗を倒にして水のこぼれぬ法、一、鼻息にて蠟燭を消したり點したりする傳などと繪入で書いた比羅紙を展げた上へ、井に水を湛へて、一枚浮かした竹の葉の上へ、まつすぐ花を活けたの看板の真中、總のついた法螺の貝の傍に据ゑて、一方に箆竹と算木がある。

— 榎の法印。

それに占はせうと言ふのである。

……おもしろい……

乾三が榎杖を持つて、一走りに行つた時は、角店の燈をたよりに榎の月影、かんでらの火も點さず、身體一つ漸と入る蜜柑箱の背後に、汚れた後幕を張つた處へ、仰向けに成つて、徒らに長くした髪をひら手で扱きながら、ふかし芋を嚙つて居た。

「うらなひを卜て下さい。」

「おいでやす。」

と軽い返事も、誰も怪まない馴染の法印。

「ひや。」

と滑稽けた顔をして、

「何を見まんね。」

「此の……身の上だつて。」

と、ふくりと置く。

「ほう。榎杖に目やな。」

と等分に乾三の顔を見た。

「こりや、これ、金時と女郎を一緒に口よせに寄せる傳や。誰のてんがうや知らんが、天眼通をもつて占てこまそか。占よりは人相やて。」

と太棒の蟲目金を取ると、片手で忙がしくお芋の食ひさしを袂に入れて、——榎杖の上へ鹿爪らしく月あかりで照した。

あ、朦朧として、目も顔も蒼白い。

法印は二三度、頭を傾げて眺めて見たが、蜜柑箱に乗掛つて顔を寄せて、ふん／＼ふん／＼と香をかぎつ、其處に人も居らぬ狀に、蟲目金をバタリと落とすと、ひたと凭れて、片膝をぐいと立て、膝頭へ肩を落して、ぐたりと成つて、前のめりにのめり狀に、其の榎杖をべろ／＼と舐めたのである。

「何をしてるの。」

呆氣に取られた乾三の背を、軽く敲いたのを、振向くと音羽ちゃん。

坂は辻に成つて居るから、宮本の角家は透かすと、見えるくらゐな處に近い。

買ものにも出たらしい、襟のかゝつた衣ものに、色模様のある前垂がけて、姿は此の方が嬉しかった。

と、言ひすてに坂を降りて行かうとすると、法印がべとりした顔を上げて、
「あ、うまい、音羽はん。」

「……」
「あんたを食べて居まんね。」

と言つた。
「可厭！」

とたゞきつけるやうに云つて、肩までくねらし、カタ／＼と坂を駆け出す。駒下駄の音の冴えに、颯と落つる霧のやうに薄赤い榎の實を浴びながら、噓も出ないで、乾三は、とぼんとしたが、
——して見ると、神官も音羽さんを食するのも知れない——
「乾ちゃん。」

と些と鋭いばかり、透つた聲の音羽さんが呼ぶから、坂の中途へ飛んで行くと、下を小流が抜ける、石垣の際に、水の音が誘ふかして、袖を震はして待ちつけて、ソと手を取つて、

「お兄様に、何にも言はないで頂戴よ。」

榎の根の法印が、あはれとも、寂しいとも、嫌味とも、譬へやうのないふしで、
「——今日は此の家に居り侍り、

御方様たち、おなぐさみ——」

「くやしい。」

と音を殺して、沁入るばかり、袖の涙の、手の甲にはらく／＼とかゝるのを、引入れられて泣出しさうに、涙に濡れた指を噛むと、何故か榎の匂がした。

が、言ふなと言ふなら、兄には何も言ふまい。しかしながら、唄は聞える、しやくひ上げ、そるやうに、

「——今日は此の家に居り侍り、

御方様たち、おなぐさみ——」

九

「乾ちゃん、私に其の榎梲を見せておくんないましたな。」

後の日の夕——暮れた時、乾三は音羽に手を曳かれて、不思議な處を歩行いた。

夢路を辿るのでもなければ、雲を踏むのでもない。が、町内の深い路地の突當りの、まだ入つた事のない邸の中を、廣庭を抜けて通るのである。

——茶の湯の出張りに借りたと言ふ、黒塀の木戸の家である事はすでに知れよう。——

音羽の言ふには、幾度も榎梓の下へ行つて見たが、顔のある實としては自分では一顧も見當らない。で、乾三の手から見せて欲しいのだと言ふ。……其は可いが、乾三を呼出して、此の要求をするのに不思議なことを訊いた。

「乾ちゃん、もしか、そんな榎梓を神官さんに見せやしないの？……」

乾三はビクリとした。仔細は知らぬが、右にかく、榎の法印の前にかくろがした時は、丁度音羽が其處を通掛つたのであるから、何か、氣に懸る事があらうも計り知られぬ。けれども、神官の、あの様子を、知つて居よう道理がない。何うして、と訊くと、

「否ね、何でもありませんが、あれから此方、毎晩のやうに、私、法印の夢を見るのよ。同じやうにお宮の神ぬしさんも、——そして私をね、酷いめに逢はせるの。」

乾三は、知らない、と言つたが、泣きたく成つた。毛ほども音羽の身にかゝつた事とは思はない。……御褒美だつて、色鉛筆とノオトが一冊。

でも、しをくとして、袖について従つて、荒れた庭を通抜けた。

ト音羽が堀の内へひたとついで、密と節穴から外を覗いた。

「あの、目だ。」

と思ふうち、靜にギーツと木戸を開けた。

町も坂も、裏返しに轉覆して見るやうな氣がして、もの珍しさの小兒心に、しよげた中から、坂の上へ飛び出づる。

「密とよう。」

と音羽が低聲で制したので、悪く靜つた、が扱て、おなじならば、眞分分に、此の娘さんには、落ちて居る實でなしに、いつかのやうに地主神の屋根に一顧、と熟と視た。……が、月が其の時より大きく圓いばかりで、落葉のほかには樹の影ばかり、何も無い。

振返ると、音羽が引添つて居るから、ふし穴の目のかはりにうら透いて薄が覗いた。

「見つかれよ、いゝ榎梓。」

と蹲んで探すと、乾三の手より前に、熊笹が、ざわ／＼と動く。……其の動くのが、がさ／＼と激しく響いた。

垣の内に人の氣勢。

眞先に思ふのは、白髪の總髪。ヒヤリと退ると、音羽も浮腰にひつたりと木戸についた。

「音羽。」

「……………」

「音羽。」

「あれ、父上。」

「俺だ。——静にしねえよ。」

と含まつたさび聲して、木槿垣の根を、低く、暗く搔分けながら、這ふやうにぬつと出たのは、驚いた！……宮本の小父さんである。

蜘蛛の巣か、土か、汗か、拔上つた角額を、平手ですつと横に撫でると、感慨の籠つた深い息を吻と吐いて、

「あ、……久しぶりで、音羽、腕を見せたぞ、……女俳優を殺した奴あ、分つたよ。」

……

「まあ。」

「然も死骸は此の樹の根にある。」

「あ、父上。」

「俺の娘が、こんな事に怯えて何うする。いや、慘らしく遣りやがつてな、此の内側のな、土手下の穴に埋めたぜ。——何に、……探索も苦心もない。……榎の法印め、此の榎椀を拾つて、目鼻がある。……氣にするなよ、音羽。……お前の味がすると吐きさうで、不埒な奴だ。どんな榎椀だか見た上で、ひつ懲らしてくれようと、珍しくもねえ樹の下で、ふと風の吹くやうに考へた。」

榎椀に顔がある。唯それだけの事なんだが、ひよつと浮んだ一氣にまかせて、無駄だと知りつつ、一寸潜つて、よく探すと、直ぐに知れたぜ。此奴は、手柄より因縁事だよ。……輪廻と言ふのだ。」

「そして、父上、殺したのは。」

「勿論、隠居だ。」

「え。」

「白髪の狒々よ。」

「あの、そして何うするお心なんです。……」

「知れた事よ！ 引縛る。」

と胸を反した。腰にひたりと、昔の鐵槌をそばめて居た。

「しかし、俺は職分でねえ。……あ、其の職であつたらな、少將の親だらうが、大將の子だらうが、此の場から踏込むのにな。」

俯向いて額を撫で、

「警察へ知らせ、婦の敵を取つて遣らうよ。」

と、着流しの肩さみしく、腕を組んで喟然とする。

音羽がぢつと寄添つて、

「父上、女俳優の其の方は、あの御隠居の言ふことを背いて殺されたんでせうか。背かないので殺されたんでせうか、ねえ。」

「馬鹿を言へ——知れた事よ……柔順に自由に成つたものを殺す奴があるものかな。」

「父上。」

「うむ。」

「私や、私や濟みませんが、其の方が羨しい！……親子兄弟……五人のためと、あ、あきらめては居りますけれど、弔殺にされるより、どんなにづらいか知れません。……女に生れて一生に、男は一人でございますものを。」

と確と乾三の手を取つた。乾三は唯震へて居た。

「男は一人でござんすものを、——今日は此の家に居り侍り——御方様たち、おなぐさみ。——」と聲が震へて、はつと泣いた。

聞くうちに段々と鐵槌を下げた。其の尖が地につく、と父親はうつむいて、ハタと鐵槌を落した。中腰で両手を上げ、抱くやうにして、音羽の正體もなく身を任すのを押しつゝ、櫓の根に溢れ出た垣に寄せて立たせたが、蒼白む顔に鬢のおくれ毛、沁入る月を暗くつゝ、すつと浮

く其の姿は、幽霊に少しも違はぬ。

墓に跪くやうに、ひたと居て、老朽せる岡引は手を支いた。……

「殺された御婦人、あなたの靈におわびを申す。あ、娘の言ふ通り、俺などに、他の罪を發く力はない。……成程なぶり殺の方が増だ。……音羽、おぬしも堪へてくれ。」

榎の法印は、二年の後に、峨々たる洋館を營んで、靈異なる新薬を嚮く、媚薬だと内々で噂する。葡萄牙傳方と稱へて、壘の商標は人面を描いた果實である。行はれること夥しい。

兄は東京へ遁げた。

——此の大商館の妻室が音羽である。

唄立山心中一曲

ちら／＼ちら／＼雪の降る中へ、松明がぱつと燃えながら二本——誰も言ふことでもございませぬが、他にいたし方もありませんや。眞白な手が二つ、悚然とするほどな婦が二人……最うやがて其處等一面に薄り白く成つた上を、靜に通つて行くのでございませぬ。正體は知れて居ても、何しる其に、所が山奥でございませぬ。何うもね、餘り美しくつて物凄うございませぬ。

と鑄掛屋が私たちに話した。
いきなり鑄掛屋が話したでは、些と唐突に過ぎる。知己に成つて此の話を聞いた場所と、其のいきさつを一寸申陳べる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢で顯れたやうなお話で、少くとも御覽の方はさきをお急ぎ下さるであらうと思ふ、で、簡單に其の次第を申上げる。
所は信州姨捨の薄暗い饅飩屋の二階であつた。——饅飩屋さへ、のつけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思ふべしで。……其の癖、可笑いのは、私たちは月を見ると言つて出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるやうな筋ではないから、本名で言つても差支へはなからう。其の時の連は小村雪岱さんで、双方彼方此方の都合上、日取が思ふ壺にはならないで、十一月の土旬、潤年の順におくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であつた。

——居待月である。

一杯飲んで居る内には、木賊刈ると云ふ歌のまゝ、研かれ出づる秋の夜の月と成るであらうと、其の氣で篠ノ井で汽車を乗替へた。が、日の短い頃であるから、五時そこ／＼と言ふのに最うとつふりと日が暮れて、間は稻荷山唯一丁場だけれども、線路が上りで、進行が緩い處へ、乗客が急に少く、二人三人と數へるばかり。大な木の葉がばらりと落ちたやうであるから、搔合はす外套の袖も、妙にはさ／＼と音がする。外は霜であらう。山の深さも身に沁みる。夜さへそゞろに更け行くやうに思はれた。

「來ましたよ。」

「二人切ですね。」

と私は言つた。

名にし負ふ月の名所である。此處の停車場を、月の劇場の木戸口ぐらなるな心得違ひをして居た私たちは、幟や萬燈には及ばずとも、屋號をかいた弓張提灯で、へい、若荷屋でございませぬ、旅

店の案内者ぐらゐるは出て居ようと思つたのは大きな見當違ひ。繪に描いた木曾の棧橋を想はせる、
斷崖の丸木橋のやうなプラットフォームへ、然も下りたのは唯二人で、改札口へ渡るべき橋もな
い。

一人がバスケットと、一人が一升壺を下げて、月はなけれど敷板の霜に寒い影を映しながら、
彼方へ行き、此方へ戻り、で、小村さんが唇を一寸曲げて、

「汽車が出ないと向うへは渡られませんか。」

「成程。線路を突切つて行く仕掛けなんです。」

やがてむら／＼と立昇る白い煙が、妙に透過つて、颯と屋根へ掛る中を、汽車は音もしないや
うに静に動き出す、と漆の如き眞暗な谷底へ、轟と飮する……

「行つていらつしやいました……お静に——」

と私はつい、目の前をすれ／＼に行く、冷たさうに曇つた汽車の窓の灯に挨拶した。此處へ二
人きり置いて行かれるのが、山へ棄てられるやうな気がして心細かつたからである。

壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡なる線路を渡つた。

「一寸、伺ひますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、眞黒な扮装の、年の少い改札掛僅に一人。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛布を被つたのが、其も唯一人居る。……此が伊勢だと、彼處

を狙つて吹矢を一本——と何も不平を言ふのではない、旅の秋を覺えたので。——小村さんは一

旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖から巖を滴る、ひた／＼と清水の音に、用心のため引返し
て、驛員に訊いたのであつた。

「其の邊に旅籠屋はありませんか。」

「はあ、別に旅籠屋と言つて、何ですな、此から下へ十四五町、……約半道ばかり行きますと、

湯の立つ家があるですよ。外は大概一週間に一度ぐらゐるなものですなあ。」

「あの風呂を沸かしますのが。」

「然やう。」

「難有う——少し何うも驚きました。とに角、其處等まで歩いて見ませう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立つて、

「いきなり、風呂を沸かす宿屋が半道と来たんでは、一口飲ませる處とも聞きにくうございます

よ。しかし何か知らありません……何しろ暗い。」

と構内の柵について……灯の百合が咲く、大な峰、廣い谷に、はら／＼とある灯をたよりに、

もの十間とは進まないで、口を開けて足を噛む狼のやうな巖の徑に行惱んだ。

「何うです、一層此處へ蹲んで、塚詰の口を開けようぢやありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山、田毎の月ともあらうものが、こんな路で澄まして居るつて法はありません。屹と方角を取違へたんでせう。お待ちなさいまし、逆に停車場の裏の方へ戻つて見ませう。いくらか燈が見えるやうです。」

双方黒い外套が、こんがらかつて引返すと、停車場には早や驛員の影も見えぬ。毛布かぶりの瘦せた達磨の目ばかりが晃々と光つて、今度は何うやら羅漢に見える。

と停車場の後は、突然荒寺の裏へ入つた形で、芥と身に沁みる木の葉の匂、鳥の羽で撫でられるやうに、さら／＼と――袖が鳴つた。

落葉を透かして、山懐の小高い處に、まだ戸を鎖さない灯が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を擴げつつ探り當てて、

「屹と飲ませますよ、此の戸の工合が氣に入りました。」

と勢よく、一足先に上つたが、程もあらせず、ざわ／＼ざわと、落葉を鳴らして落來るばかりに

引返して、

「退却……」

「え、安達ヶ原ですか。」

と聞く方が慌てて居る。

「い、え、爺さんですがね、一人土間で草鞋を造つて居ましてね。何だ、誰ぢやいつて喚くんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに濟みません、發起人が此の様子で。」

「飛んでもない。恚う言ふ時は花道を歌で引込むんです、柄にはありませんがね。何でしたつて、……」

わが心なぐさめかねつ更科や

姨捨山に照る月をみて

照る月をみて慰めかねつですもの、暗いから慰められて可いわけです。いよ／＼路が分らなければ、停車場で、次の汽車を待つて、松本まで参りませう。時間がありますから其處は氣丈夫です。」

然る處、暗がり目が馴れたのか、空は星の上に星が重つて、底なく晴れて居る——何處の峰にも銀の覆輪はかゝらぬが、自から月の出の光が山の膚を透すかして、巖の缺めも、路の石も、褐色に薄く蒼味を潮して、はじめ志した方へ幽ながら見えて來た。灯前の木の葉は白く、陰なる朱葉の色も浸む。

慙くして辿りついた薄暗い鮎屋であつた。

何しろ薄暗い。……赤黒くどんより煤けた腰障子の、それも宵ながら朦朧と閉つて居て、よろづ荒もの、うどんあり、と記した大な字が、軒をかいて居さうに見えた。

此店の女房が、東京ものは清潔すぎだからと、氣を利かして、正札のついた眞新しい湯沸を達引いてくれた心意氣に對しても、言はれた義理ではないのだけれど。

「これは少々酷過ぎますね。」

「此處まで來れば、あと一辛抱で、最う些と何うにかしたのがありませう。」

「實は、此の段、囁き合つて、丁ど其處が三岐の、一方は裏山へ上る山岨の落葉の徑。一方は崖を下る石ころ坂の急な奴。で、其の下りる方へ半町ばかり又足探りを試みたのであるが、がけの陰に成つて、暗さは暗し、路は悪し、灯は遠し、思切つて逆戻りに其の鮎屋を音訪れたのであつた。

「御免なさい。」

と小村さんが優しい穩な聲を掛けて、がた／＼がたと入つたが、向うの對手より土間の足許を俯向いて視つ、横にとぼ／＼と歩いた。

灯が一つ、ぼうと赤く、宙に浮いた切で何も分らぬ。釣ランプだが、火屋も笠も、煤と一所に油煙で黒く成つて正體が分らないのであつた。

が凝視める瞳で、漸と少しづつ、四邊の黑白が分つた時、私はフト思ひがけない珍らしいものを視た。

二

框の柱に、天秤棒を立掛けて、鍋釜の鑄掛の荷が置いてある——亭主が擔ぐか、場合に依つては恠うした徒の小宿でもするか、鑄掛屋の居るに不思議はない。が、珍らしいと思つたのは、薄汚れた鬱金木綿の袋に包んで、其の荷に一挺、紛ふべくもない、三味線を結へ添へた事である。話聞いた——谷を深く、麓を狭く、山の奥へ入つた村里を廻る遍路のやうな渠等には、小唄淨瑠璃に心得のあるのが少くない。行く先々の庄屋のもの置、村はづれの辻堂などを假の住居として、晝は村の註文を集めて仕事を、傍ら夜は村里の人々に時々流行唄、浪花節なども

唄つて聞かせる。聞く方では、祝儀のかはりに、なくても我慢の出来る、片手とれた鍋の鑄掛も
誂へると云つた寸法。小兒に飴菓子を買つて一手踊つたり、唄つたり、と同じ格で、ものは違つ
ても家業の愛想——盛場の吉原にさへ、茶屋小屋のおかつばお蓑盆に飴を賣つて、爺やあつち、
婆やこつち、おんぢやらこつちりこ、ばあくと、鳴物入で鮓とおかめの小人形を踊らせた、お
ん爺があつたとか。同じ格だが、中には凄いやうな巧いがあると言ふ。
唄ひながら、草や木の種子を諸國に撒く。……怪しい鳥のやうなものと、其の三味線が、ひ
とりで鳴くやうに熟と視た。

「相談は整ひました。」

「それは難有い。」

「さあ、二階へ何うぞ……何しろ汚いんでございますよ。」

と、雨もりのやうな形が動く、紺の上被を着た婦に成つて、ガチリと釣ランプを捻つて離し
て、框から直ぐの階子段。

小村さんが小さな聲で、

「何しろ此の體なんですから。」
「結構ですとも、行暮れました旅の修行者に成りませうね。」

「では、其のおつもりで——さあ、上りませう。」
と勢よく、下駄を踏違へるトタンに、

「あつ、」と言つた。

きやんくきやんく、クイ、キウと息を引いて、きやんくきやん、クイ、クウン、きうと
鳴く。

見事に小狗を踏つけた。小村さんは狼狽へながら、穴を覗くやうに土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、御免なさいよ。」

で、遁げないばかりに階子を上ると、續いた私も、一所にぐらぐらと揺れるのに、両手を壇の
端に緊り絶つた。二階から女房が、

「お氣をつけなさいませよ……お頭を何うぞ……お危うございますよ、お頭を。」

「何に。」

吻としながら、小村さんは氣競つたやうに、

「踏着けられた狗から見や、頭を打つけるなんぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹み深いのが此だから、餘程周章てたに違ひない。

きやんくきやん、クイツ、キウ、きやんくきやん、と斷々に、聲が細つて泣止まない。

「身に沁みますね、何ですか、狐が鳴いてるやうに聞えます。」

木地の古びたのが黒檀に見える、卓子臺にさしむかつて、小村さんは襟を合せた。

件の油煙で眞黒で、ぼつと灯の赤いランプの下に畏つて、動くたびに、ぶる／＼と疊の震ふ處

は、天變に對し、謹んで、日蝕を拜むが如く、少なからず肝を冷しながら、

「旅は此だから可いんです。何も話の種です。……話の種と言へばね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、此邊には、あはれな、寂しい、物語がありさうな處ですね。あの、月宵鄙物語と言

ふのがあります、御存じでせうけれど。」

「いゝえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣まくり手したる坊さん、と言ふのが、話をする趣向に成つ

て居るんですがね。(更科山の月見むとて、かしこに罷登りけるに、大なる巖にかたかけて、肘折

れ造りたる堂あり。觀音を据ゑ奉れり。鏡臺とか云ふ外山に向ひて)……と云ふんですから、今

の月見堂の事でせう。……屹と此の崖の半腹にありませうよ。……其處の高欄におしか、りなが

ら、月を待つ間のお伽にとて、其の坊さんが話すのですが、蘭原山の木賊刈、伏屋里の筈木、更

科山の老桂、千曲川の細石、姨捨山の姥石なぞツて、標題ばかりでも、妙にあはれに、もの寂し

くなるのです。皆此の邊の、山々谷々の事ななせう。何にしろ、

信濃なる千曲の川のさゞれ石も
君しふみなば玉とひろはん

と言ふ場所なんですもの。——やあ、明るく成つた。

と思はず言つた。

釣ランプが、眞新しい、明いのに取換つたのである。

「お待遠様、……濟みません。」

「何ういたしましたして、飛んだ御無理をお願ひ申して。」

女房は崩れた鬢の黒い中から、思ひのほか白い顔で莞爾して、

「私どもでは難有いんでございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらつしつて下さると可

いんですけれども。」

爾時、一列に蒲鉾形に反つた障子を左右に開けると、ランプの——小村さんが用心に蔓を壓へ

た——灯が一燭、山氣が颯と座に沁みた。

「一昨晚の今頃は、二かさも三かさも大い、眞圓いお月様が、あの正面へお出なさいましてござ

いますよ。あれがね旦那、鏡臺山でございますがね、何うも暗うございまして。」

「音に聞いた。どれ、」

と立つと、ぐら／＼と成る……

「おつと。」

欄干につかまつて、蝸牛と云ふ身で、背を縮めながら首を伸ばし、

「漆で塗つたやうだ、ぼつと霧のかゝつた處は研出したね。」

宵の明星が晃然と蒼い。

「あの山裾が、左の方へ入江のやうに擴がつて、ほんのり奥に灯が見えるでございませう。善光寺平でございましてね。灯のありますのは、善光寺の町なんでございましてよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「は、あ。」

「真下の谷底に、ちら／＼と灯が見えませう、彼處が、八幡の町でございましてね、お月見の方は、那處から、皆さんが支度をなすつて、私どもの裏の山へお上りに成りますんでございましてね。鏡臺山と、丁どさし向ひに成つて居ります——お、冷えますこと……唯今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、何うなすつたんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは眞顔で膝に手を置いて、

「いえ、其の縁側に三人揃つて立つたんでは、棧敷が落ちさうで危険ですから。」

「眞個、これで猿樂があると、……天狗が揺り倒しさうな處です。可恐しいね。」

と二人は顔を見合せた。

が、注文通り、火鉢に湯沸が天上して来た、火も赫と——此の火鉢と湯沸が、前に言つた正札つきなる眞新しいのである。酒も銚子だけ借りて、持參の一升壺の燗をするのに、女房は氣障だと言ふ顔もせず。お客冥利に、義理にうどんを誂へれば、亂れてもすなほな銀杏返の鬢を振つて、

「およしなさいまし、むだな事でございまして。おしたちが悪くつて、めしあがられやしませんから。……何ぞお香のものを差上げませう。」

其の心意氣。

「難有い。」

と熱燗三杯、手酌でたてつけた顔を撫でて、

「おかみさん。」

杯をついとさして、

「一つ申上げませう、お知己に……」

「私はいつかな不調法ものでございまして。」

「まあ一盞。」

「最う、全く。」

「でも、一盞ぐらゐ、お酌をませう。」

と小村さんが銚子を持つたのに、左右に手を振つて、迂るやうに、然も軋んで遁げ下りる。

「何だい。」

「毒だとも思ひましたかね。して見ると、お互の人相が思はれます。おかみさん一人切なんてせうか知ら。」

「泊りませうか。」

「御串戯を。」

クイツ、キウ、クツク——と……うら悲げに、また聞える。

「弱りました。あの狗には。」

と小村さんは又滅入つた。

のし〜みしり、大皿を片手に、其處へ天井を抜きさうに、ぬいと顯れたのは、色の黒い、い

が栗で、しるし半纏の上へ汚れくさつた棒縞の大廣袖を被つた、から脛の毛だらけ、圖體は大いが、身の緊つた、腰のしやんとした、鼻の隆い、目の光る……年配は四十餘で、稼盛りの屈竟な山賊面……腰にぼツ込んだ山刀の無いばかり、あの皿は何んだ、ヘツヘツ、生首二個受取らうか、と言ひさうな、が、そぐはないのは、顔に短い山羊髯であつた。

「御免なせえ……お香のものと、媽々衆が氣前を見せましたが、取つておきの此の奈良漬、此奴あ水ぼくて些と中ががす。菜ツ葉が食へますよ。長蕪てツて、此處等一體の名物で、異に食へまさ、めしあがれ。——處で、媽々衆のことづけですがな。折角御酒を一つと申されたものを、

やけな御辭退で、何だかね、南蠻祕法の痲痺藥……あの、それ、何とか傳三熊の膏藥とか言ふ三題漸を逆に行つたやうな工合で、旦那方の御酒に毒でもありさうな様子合が、申譯がございませんで、居候の私に、代理として一杯、いんえ唯一つだけ。おしるしに頂戴してくれるやうにと

申すんで、や、も、御覽の通、不躰ながら罷出ました。實はね、媽々衆、あゝ見えて、浮氣もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、此方のお若い方のやうな、おツこちが欲しさに、酒どころか、杯を禁つて居りますんでね。はッはッはッ。

階子の下から、伸上つた聲がして、
「馬鹿な事を言はねえもんだ。」

と、むきに成ると、まるでしの田舎なまり。

「真鍮臺め。」と言つた。

「……真鍮臺……」

聞くと……真鍮臺、またの名を銀流しの藤助と言ふ、金箔つきの鑄掛屋で、此が三味線の持ぬしであつた。面構でも知れる……此のした、かものが、やがて涙ぐんで……話したのである。

三

「私はね、旦那。まだ其の時分、宿を取つちやあ居なかつたんでございます、居酒屋、と云つた處で、豆腐も駄菓子も突くるみに賣つて居る、天井に釣した蕃椒の方が、燈よりは真赤に目に立つてつた、皺びた店で、櫛同然の鯨に、山家片鄙はお極りの石斑魚の煮浸、衣川で嚙しばつた武藏坊辨慶の奥歯のやうな奴をせ、りながら、店前で、やた一きめて居た處でございましてね。

一寸私の懐中合と、鑄掛屋風情の此の容體では、宿が取悪かつたんでございますよ。と云ふのが、焼山の下で、バツと一くべ、おへつひ様を燃したも同じで、山を越しちやあ、別に騒動も聞えなかつたんでございますが、五日ばかり前に、其の温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、此方に柄相當のなんぞ焼けて居て、二三軒残つたのは、いづれも玄關附だから些とたじ

ろいだ次第なんでもございますが。

え、……温泉でございませうか、名は體をあらはすとか言ひます、とんだ山中で、……狼温泉

「あ、何處か、三峰山の近所ですか。」

と、嘗て美術學校の學生時代に、其のお山へ拔參りをして、狼よりも旅費の不足で、した、か可恐い思ひをした小村さんは、聞怯をして口を入れた……嚙むが如く杯を銜みながら、

「那處ぢやあ、お狗様と言はないと山番に叱られますよ。」

藤助は真顔で、微酔の頭を掉つた。

「途方もねえ、見當違ひ、山また山を遙に離れた、峰々、谷々……と言へばね、山の中に島々と言ふ處があります、をかしいね。いやもつと、深い、松本から七里も深へ入つた、飛驒の山中——心細い處で……それでも小學校もありや、郵便局もありましたつけが、それなんぞも焼けて居たんでございましてね。

山坂を踏越えて、少々平な盆地に成つた、其の温泉場へ入りますと、火沙汰は又格別、……酷いもので、村はづれには、落葉、枯葉、焼灰に交つて、鴛子鳥、頬白、山雀、鶉、小雀などと言ふ、紅だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交つて、あの綺麗な小鳥どもが、路傍にはら／＼と落ちて

居る。此奴あ、それ、時節が今頃に成りますと、よく、此の信州路、木曾街道の山家には、暗い軒に、糸で編んで、ぶら下げて、美しい手鞠が縫れたやうに賣つてる奴だて。それが、お前さん、火事騒ぎに散らかつたんで——驚いたのは、中に交つて、鴛鴦が二羽……番かね。……

や、頂きます、ト、ト、ござえやさ。

と小村さんの酌を、蓋するやうな大な掌で請けながら、

「何うもね、拾つて抱きたいやうでがしたげ。まさか、池に泳いだり、樹に眠つたのが、火の粉を浴びはしますめえ。賣ものが散らばりましたか、眞紅に染つた木の葉を枕で、目を眠つて居ましたよ。」

天秤棒一本で、天井へ宙乗でもするやうに、ふら／＼ふら／＼、山から山を経歴つて……え、丁ど昨年の今月、日は、もつと末へ寄つて居りましたが——此の緋葉の眞最中、草も雲も虹のやうな彩色の中を、飽くほど視て通つた私もね、此には足が停りました。

如何と……綺麗な、其の翼の上も、一重敷いて、薄りと白く成りました。此の景色に舞臺が換つて、雪の下から鴛鴦の精霊が、鬼火をちら／＼と燃しながら、すつと糺上つたやうにね、お前さん……唯今の、其の二人の婦が、私の目に映りました。凄いやうに美しうがした。」
と鑄掛屋は、肩を軟に、胸を低うして、更めて私たち二人を視たが、

「で、山路へ掛る、狼温泉の出口を通るんでございしますが、場所はソレ件の盆地だ。私が飲んで居ました有合御肴と言ふお極りの一膳めしの前なんざ、小さな原場ぐらゐる小廣うございしますのに——それでも左右へ並ばないで、前後に成つて、すつと連立つて通ります。」

前へ立つたのは、蓑を着て、竹の子笠を冠つて居ました。……端折つた片褌の友染が、藁の裾に優しくこぼれる、稲束の根に嫁菜が咲いたと言つた形。ふつさりとした銀杏返が耳許へばらりと亂れて、道具は少し大きうがすが、背がすらりとして居るから、其の眉毛の濃いのも、よく釣合つて、抜けるほど色が白い、些と大柄ではありますが、如何にも體つきの嫺娜な婦で、

(今晚は。)

と、通掛りに、めし屋へ聲を掛けて行きました。が、嬾と燃えて居る松明の火で、おくれ毛へ、慥う、雪の散るのが、白い、其の頬を殺ぐやうで、鮮麗に見えて、いた／＼しい。

いた／＼しいと言へば、其がね、素足に上草履。あの、旅店で廊下を穿かせる赤い端緒の立つた奴で——しつとりと些と沈んだくらゐ落着いた婦なんだが、實際其の、心も空に成るほど氣の揉めるわけがあつて——思ひ掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋でなし、中ぶらりに右のツかけ穿で、ストーンと落ちるやうに、旅館から、上草履で出たと見えます。……其の癖、一生の晴着と言ふので、母さん譲りの褶模様、紋着なんか着て居ました。

お話をしますうちに、仔細は追々おわかりに成りますが——此が何でさ、双葉屋と言つて、土地での、先づ一等旅館の女中で、お道さんと言ふ別嬪、以前で申せば湯女なんだ。

いや、湯女に見惚れて居て、肝心の御婦人が後れました。最う一人の方は、山茶花と小菊の花の飛模様のコートを着て、白地の手拭を吹流しの……妙な拵だと思へば……道理こそ、降りかゝる雪を厭つたも。お前さん、いま結立てと見える高島田の水の滴りさうなのに、對に照つた鼈甲の花笄、花櫛——此の拵ぢやあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、何故か顔の色が透き通りさうに血が澄んで、品のいゝのが寂しく見えます。華奢な事は、吹つけるほどではなくても、雪を持つた向風にや、傘も洋傘も持切れなすめえ、被りもしないで、湯女と同じ竹の子笠を胸へ取つて、襟を伏せて、俯向いて行きます。……袖の下には、お位牌を抱いて葬禮の施主に立つたやうで、恚う正しく端然とした處は、視る目に、神々しうございます。何となく容子が四邊を沈めて、陰氣だけれど、氣高いんでございますよ。

同じ人間もな……鑄掛屋を一人土間で飲らして、納戸の炬燵に潛込んだ、一ぜん飯の婆々媽媽々などと言ふ徒は、お道さんの（今晚は）に唯、（ふわ）と言つた切だ。顔も出さねえ。其の（ふわ）がね、何の事アねえ、鼠の穴から古綿が千斷れて出たやうだ。「些と耳が疼いたな。」

と鰐鮓屋の女房が口を入れた、——女房は鑄掛屋の話に引かれて、二階の座に加はつて居たのである。

「其のかはり大まかなものだよ。店の客人が、飲さしの二合壘と、最う一本、棚より引攫つて、此奴を、井へ突込んで、少時して、婦人たちのあとを追つてぶらりと出て行くのに、何とも言はねえ。山は深い、旦那方のおつしやる、それ、何とかつて、山中曆日なしぢやあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間がめでてえね。」

「は、あ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は徒に聞いて、さきを急いだ。

「荷は何うしたよ。」

と女房が笑つて言つた。

「ほい忘れた。いや、忘れたんぢやあねえ、一ぜん飯に置放しよ。」

「それ見たか、あんな三味線だつて、壘詰二升ぐらゐるな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、眞個な。」

と藤助は額を壓へて、

「おめでてえのは此方だつけ、はッはッはッ。」

四

「さて、旦那方、洒落や串戯ぢやあねえんでございます。……御覽の通り人間の中の變な輩のやうな、こんな野郎にも、不思議なまはり合せで、其の婦たちのあとを尾けて行かなけりや成らねえ一役ついて居たのでございましてね。……乗掛つた船だ。鬱陶しくもお聞きなせえ。」

すつとこ被りて、

襟を敲いて、

「どんつくで出ましたわ……見えがくれに行く段取だから、急ぐにや當らねえ。別して先方は足弱だ。はてな、此處等に色鳥の小鳥の空蟬、鴛鴦の亡骸と言ふのが有つたつくと、酒の勢、雪なんざ苦に成らねえが、赤い鼻尖を、頬被から突出して、へつぱり腰で嗅ぐ工合は、夜興引の爺が穴一のばら錢を探すやうだ。餘計な事でございしますがね——性が知れちや居ましても、何だか、婦の二人の姿が、鴛鴦の魂がスツと拔出したやうでなりませんや。此の邊だつくと、今度は、雪まじりに鳥の羽より焼屑が堆い處を見着けて、お手向にね、壘の口からお酒を一雫と思ひました、待てよと私あ考へた、正覺坊ぢやアあるめえし、鴛鴦が酒を飲むやら、飲ねえやら。一層の

事だと、手前の口へね、喇叭と遣つた……恚うすりや鳥の精がめしあがると同じ事だと……何しろ腹中は鴛鴦で一杯でございました。」

女房が肥つた膝で、壘に當つて、

「藤助さんよ。」

「あゝ。」

「酒の話ぢやあないぢやあないかね、ねえ、旦那方。」

「何しろ、其處で。」

と、促せば、

「と二人は最う雑木林の崖に添つて、上りを山路に懸つてゐます。白い中を、ふつくと、眞紅な鳥のたつやうに、向うへ行く。……一軒、家だか、穴だか知れねえ、の住んで居さうな、引傾いた小屋に、筵を二枚ぶら下げて、此奴が戸に成る……横の羽目に、半分ちぎれた浪花節の比羅がめらくと動いて居るのがありました、其が宿はづれで、最う山に成ります。峠を越すまで、當分のうち家らしいものはございせんや。」

水の音が聞えます。ちよろ／＼水が、青いやうに冷く走る。山清水の小流のへりについてあとを慕ひながら、い、程合で、透かして見ると、坂も大分急に成つた石碓道で、誰がどつちのを解

いたか。扱帯をな、一條、湯女の手から後に取つて、其を其の少い貴婦人てつた高島田のが、片手に控へて縫つて居ます……最う笠は外して脊へ掛けて……絞の紅いのがね、松明が揺れる度に、雪に薄紫に颯と冴えながら、螺旋の道條に慍う敵ると、其の毎に、崖の緋葉がちらく〜と映りました、夢のやうだ。

視る奴の方が夢のやうだから、御當人たちは現かも知れねえ。

で其の二人は、然うやつて、雪の夜道を山坂かけて、何處へ行くんだと思召す。

此處だて——旦那。

藤助は息繼に呷と煽つて、

「此の二階から、鏡臺山を——（少し薄明りが映しませ、月が出ませう。まあ、御緩りなさいまし）——それ、恠うやつて視るやうに、狼温泉の宿はつれの坂から横正面と言つた、肩で恠う捻向いて高く上を視る處に、耳はねえが、あのトランプのハアト形に頭を押立つた梟ヶ嶽、梟と一口に稱へて、何嶽と言ふほどぢやあねえ、丘が一座、其の頂邊に、天狗の撞木杖と言つた形に見える、柱が一本。……風の吹まはしで、松明の尖がぼつと伸びると、白く成つて顯れる時は、耶蘇の看板の十字架でつた奴にも似て居る……こりや、もし、電信柱で。蔭に隠れて見えねえけれど、其處に一張天幕があります。何だと言ふと、火車で焼けたがため

に、假ごしらへの電信局で、温泉場から、其處へ出張つて居るのでございます。

其處へ行くんだね、婦人二人は。

で、其の郵便局の天幕の裡に、此の湯女の別嬪が、生命がけ二年越に思ひ詰めて居る技手の先生……と最う一人は、上州高崎の大資産家の若旦那で、此の高島田のお嬢さんの婿さんと、其の二人が、いはれあつて、二人を待つて、對の手戟の石突をつかないばかり、洋服を着た、毘沙門天、増長天と言ふ形で、五體を緊めて、殺氣を含んで、呼吸を詰めて、待構へて居るんでがしてな。

お嬢さんの方は、名を縫子さんと言ふんで、申さずとも娘ッ子ぢやありません、こりや御新姐……ぢやあねえね——若奥様。」

五

峰の白雪、麓の水、

今は互に隔てて居れど、

やがて嬉しく、溶けて流れて、

合ふのぢやわいな。……

「私は日暮前に、其の天幕張の郵便局の前を通つて来たんでございますよ。……丁ど狼の温泉へ入込みます途中でな。……晩に雪が来ようなどとは思ひも着かねえ、小春日和と言つた、ぼかぼかした好い天氣。……」

尤も、甲州から木曾街道、信州路を掛けちやあ、麓の岐路を、天秤で、てくくで、路傍の木葉がね、あれ性の、いゝ女の、ぼうと成つて少し唇の乾いたと言ふ容子で、へりを白くして、日向にほか／＼して居て、草も乾燥いで、足のうらが擦つてえ、と言つた陽気で居ながら、槍、穂高、大天井、やけに焼ヶ嶽などと言ふ、大薩摩でもの凄いのが、雲の上に重つて、天に、大波を立てて居る、……裏の峰が、忽ち颯と暗く成つて、雲が被つたと思ふと、箕で煽るやうに前の峰へ畝りを立ててあびせ掛けると、浴びせて置いて晴れると思へば、其の裏の峰が最う晴れた處から、ひだを取つて白く成ります。見る／＼うちに雪が掛るんでございましてね。左右の山は、紅く成つたり、黄色かつたり、酔つたり、醒めたりして、移つて來る其のむら雲を待つて居る。と言つた次第で、雪の神様が、黒雲の中を、大な袖を開いて、虚空を飛行なさる姿が、遠くの其の日向の路に、蠡斯ほどの小さな旅のものに、あり／＼と拜まれます。だから、日向で汗ばむくらんだと言つた處で、雑樹一株隔てた中には、草の枯れたのに、日が映すかと思れば、何、瑠璃色に小さく凝つた龍膽が、日中も冷たい白い霜を噛んで居ます。

が、陽の赤い、其の時梟ヶ嶽は、猫が日向ぼっこをしたやうな形で、例の、草鞋も脚絆も擦つてえ。……満山のもみぢの中に、もくりと一つ、道も白く乾いて、枯草がぼか／＼する。……芳しい落葉の香のする日の影を、まともに吸つて、くしやみが出さうなのを獅嚙面で、

(鑄掛……錠前の直し。)

すくツと立つた電信柱に添つて、片枝折れた松が一株、崖へのしかつて立つて居ます、天幕張だらうが、掘立小屋だらうが、人さへ住んで居れば家業冥利……

(鑄掛……錠前の直し。)

と、天幕と其の松のあります、一寸小高く成つた築山てつた下を……温泉場の屋根を黒く小さく下に見て、通りがかりに、じろり……」

藤助は、ぎよろりとしながら、頬邊を平手で敲いて、

「此の人相だ、お前さん、じろりとよりか言ひやうはねえてね、ト行つた時、はじめて見たのが湯女の其の別嬪だ。お道さんは、半襟の掛つた縞の着ものに、前垂掛、晝夜帯、若い世話女房と言つた形で、其の髪の毛のいゝ、垢抜のした白い顔を、神妙に俯向いて、塵末な椅子に掛けて、卓子に凭掛つて、足袋を繕つて居ましたよ、紺足袋を……」

(鑄掛……錠前の直し。)

一寸顔を上げて見ましたつけ。直に、じつと足袋を刺すだて。
動いただけに尙ほ活きて、光澤を持った、きめの細な襟脚の好きなと言つちやねえ。……通
り切れるもんぢやあねえてね、お前さん、雲だか、風だか、ふら／＼と野道山道宿なしの身のほ
まちだ。

一言ぐらゐる口を利いて、澁茶の一杯も、あのお手からと思ひましたがね、ぎよつとしたのは半
分焦げたなりで天幕の端に眞直に立つた看板だ。電信局としてある……

茶屋小屋、出茶屋の姉さんぢやあねえ。風俗は此の目で確に睨んだが……おや／＼、お役人の
奥様かい。……郵便局員の御夫人かな。

此が旦那方だと仔細ねえ。湯茶の無心も雑作はねえ。西行法師なら歌をよみかける處だが、山
家めぐりの鑄掛屋ぢやあ道を聞くのも跋が變だ。

處で、椅子はまだ二三脚、何だか、此方人等にや分らねえが、ぴか／＼機械を据附けた卓子が
最上一臺。向つてきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

は、あ、来る道で、向の小山の土手腹に傳はつた、電信の綱線の下あたりを、木の葉の中に現
れて、茶色の洋服で棒のやうなものを持つて、毛蟲が動くやうに小さく歩行して居る形を視た。
……鐵砲打の鳥おどしかと思つたが、大きにそんなのが局員の先生で、此の姉さんの旦那かも知

れねえよ。

が何しろ留守だ。

(鑄掛……錠前の直し。……)

と崖ぶちの日向に立つたが、紺足袋の繕ひ。……雪の襟脚、白い手だ。悚然とするほど身に沁
みてなりませんや。

遙に見える、高山の、かげつて桔梗色したのが、すつと雪を被いで居るにつけても。で、其處
へ先づ荷をおろしました。

(や、えいとこさ)と、草鞋の裏が空へ翻るまで、山端へどつしりと、暖かい木の葉に腰を落し
た。

間拍子も機かけも渡らねえから、ソレ向うの嶽の雪を視ながら、
(あ、降つたる雪かな。)

とか何とか、うろ覚えの獨言を言つてね、お前さん、
(それ、雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴鬘を着て立つて徘徊すと言へり……か。)

なんのツて、ひら／＼と来る紅色の葉から、すぐに吸ひつけるやうに煙草を吹かした。が、何
分にも鑄掛屋ぢやあ納りませんな。

處でさて、首に巻いた手拭を取つて、拂いて、馬土にも衣裳だ、芳原かぶりと氣取りましたさ。
古三味線を、チンとかツンとか引搔鳴らして、此處で、内證で唄つた奴でさ。

峰の白雪、麓の水――

旦那、顔を見つこなし……極が悪い……何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せようと言ふ腹だ、をかした腹だ、狸の腹だね。

だが、此奴あ此方人等徒の、即ち狸の腹鼓と言ふ甘術でね。不氣味でも、氣障でも、何でも、聞く耳を立てるうちに、うか〜と釣出されずにや居ねえんだね。何うですえ、……それ、來ました。」

と不意に振向く、階子段の暗い穴。

小村さんも私も慄然した。

女房は尙の事……

「あれ、吃驚した。」

と膝で摺寄る。

藤助は一笑して、

「先づは、此の寸法でございましてね、お道さんを引寄せた工合と云ふのが、あはッはッ。」

六

「見ない振、知らない振、雪の遠山に向いて、……溶けて流れてと、唄つて居ながら、後方へ來るのが自然と分るね、鹿の寄るのとは違ひます。……別嬪の香がほんのりで、縹緞に打たれて身に沁む工合が、温泉の女神様が世話に碎けて顯れたやうでございまして。……(逢ひたさに見たさに)何か唄つて、チャンと句切ると、

(あの、鑄掛屋さん。)

と、初音だね。……

視ると、朱塗の盆に、吸子、茶碗を添へて持つて居る。黒緇子の引掛帯で、淺葱の襟の其の様子は何とも言へねえ。

いえ、最一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々と言ふのが載つて居ました。……其がために讚めるんぢやあねえけれど、拵へねえで、なまめいたもんでしたぜ。人を喰つた此方の芳原かぶりなんざ、もの欲しさうで極りが悪くなつたくらゐで。

(へい、へい、へい、こりや奥様、恐入りました。)

と故とらしくも、茶碗をな、兩手で頂かずにや居られなかつた。

姉さんが、初々しい、しをらしい事を、お聞きなせえ、ほうツと成つて、

(まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。)

さ、其の奉公人風情が、生意氣のやうだけれど、唄をもう一つ唄つて聞かしてもらへまいか、と言ふんぢやありませんかい。お詠が註文にはまつた。こんな處でよろしければ、山下樹の數、幾つだつて構やあしませんと、……今度は(浮世はなれて奥山すまひ、戀もりん氣も忘れて居たが)……で御機嫌を取結ぶと、それよりか、矢張り、先の(やがて嬉しく溶けて流れて合ふのぢやわいな)の方を聞かして欲しいと、山姫様、御意遊ばす。

藤助は杯で一寸句切つて、眉も口も引緊つた。

「旦那方の前でございませがね、恠う中腰に、メ加減の好い帶腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくやうにして熟と聞く。……聞手が、聞手だ。唄方も身につまされて、此でもお前さん、人間交際もすりや、女出入も知らねえぢやあねえ。少い時を思ひ出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、つひぞねえ、一生に一度だ。較べものにやあ成りませんが、むかし琵琶法師の名譽なのが、こんな處で草枕、山の神様に一曲奏でた心持。

と姉さんが、とけて流れて合ふのぢやわいなと、き、入りながら、睫毛を長くうつつむいて、ほろりとした時、此方も思はず、つい、ほろり……いえさ、此の面だからポタリと出ました。」

と口では言ひつつ聲が濕つた。

「(つかん事を聞きますけれど、鑄掛屋さん、錠の合鍵を頼まれて下さいますか)……と姉さんがね。

私あ此を聞いて、ポンと両手を拍つた。

此のくらくらつく事は、私の唄が三味線につくやうなもんぢやあねえ。

(錠が狂つたんでございませうかい。)

(いゝえ、無いんですけれど。)

(雑作はがあせん、煙草三服飲む間だ。)

其處で錠前を見て、と言ふ事に成ると、些と内證事らしい。……しとやかな姉さんが、急に何だか、そはついて、彼方此方眺しましたが、高い處に恠う立つと、風が攫つて、すつと、雲の上へ持つて行きさうで危ツかしいやうに見えます。

勿論人影は、ぼつとりともない。

が、其でも、天幕の正面からぢやあ、氣咎めがしたと見えて、

(濟みませんが、此方から。)

裏へ廻はると、綻びた處があるので。……姉さんは科よく消えたが、此方は自雷也の妖術にア

リヤ〜だね。列子と言ふ身で這込みました。が、それ處ぢやあねえ。此の錠前だと言ふのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟆の干物とも、河馬の木乃伊とも譬へやうのねえ、皺びて突張つて、兀斑の、大古物の大かい革靴で。

此奴を、古新聞で包んで、薄汚れた兵児帯でぐる〜と巻いてあるんだが、結びめは、はづれて緩んで、新聞もばさりと裂けた。其處からそれ、煤を噴きさうな面を出して、蘆の莖から谷覗くと、錠の穴を眞黒に塗まして居るぢやアありませんか。

(何が入つて居りますえ。)
失禮な……人様の革靴を……だが、私あつい、うつかり言つた。

(あの、旦那さんのお大事なもののばかり。)
(へい、貴女の旦那様の?)

(い、え、技師の先生の方ですが、其の方のお大事なものが残らず、お國でおかくれに成りました奥様のお骨も、唯たお一人ツ子の、かけがへのない坊ぢやまのお骨も、此の中に入つていらつしやるんですつて。)

と、恚う言ふんでね。
小村さんと私は、黙つて氣を引いて瞳を合した。

藤助は一息ついて、

「其を聞いて、安心をしたくらゐだ。技師の旦那の奥様と坊ぢやまのお骨と聞いて、安心したも、をかしたものでございませうがね、一軒家の化葛籠だ、天幕の中の大革靴ぢやあ、中に何が入つてるか薄氣味が悪かつたんで。

(へい、其の錠をおなくしなすつた……其奴はお困りで、)
と錠前の寸法を當りながら、恚う見ますとね、新聞のまだ残つた處に、青錆にさびた金具の口でくひしめた革靴の中から、紫の袖が一枚。……

袂の中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々と、女の膚を包んだやうで、被た人がらも思はれる、裏が通つて、揚羽の蝶の袖の紋がちら〜と羽を動かすやうに見えました。
小村さんと私とは、じつと見合つて居たまゝの互の唇がぶる〜と震へたのである。

七

——實は此の時から數へて前々年の秋、おなじ小村さんと、(連が最う一人あつた。)三人連で、輕井澤、碓氷のみぢを見たら汽車の中に、まさしく間違ふまい、此に就いた事實があつて、私は、不束ながら、はじめ、淑女畫報に、「革靴の怪」後に「片袖」と改題して、小集の中に編んだ一

篇を草した事がある。

確に紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覚えて居る。高島田に花笄の、盛装した嫁入姿の窈窕たる淑女が、其の嫁御寮に似もつかぬ、卑しげな慳のある女親まじりに、七八人の附添とともに、深谷驛から同じ室に乗組んで、御寮は丁ど私たちの眞向うの席に就いた。將に嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らひと、心遣と、恐怖と、笑と、涙とは、其のま、膝に手を重ねて、つむりを重たげに、たゞ肩を細く、さしうつむいた黒髪に包んで、顔も上げない。まことにしとやかな佳人であつた。

此の片袖が、隣席にさし置かれた、他の大革靴の口に挟まつたのである。……失禮ながら、其の革靴は、こゝに藤助が饒舌ののと、略大差のないものであつた。

が、持ぬしは、意氣沈んで、髻、髪もぶしやうにのび、面も憔悴はして居たが、素純にして、然も謹嚴なる人物であつた。

汽車の進行中に、此の出来事が發見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思はぬ鹿匆であらう、失策した人物に對して、傍の見る目は寧ろ氣の毒なほどであつた。

一も二もない、した、かに詫びて、其の革靴の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。我も人も、しかあるべく信じた。

然るにもかゝはらず、其の人物は、人々が騒いで掛けた革靴の手の中から、すかりと握拳の手を抜くと齊しく、列車の内へすつくと立つて、日に焼けた面は瓦の黄昏る、如く色を變へながら、決然たる態度で、同室の御婦人、紳士の方々と、室内に向つて、掠聲して言つた。……此なる、窈窕たる淑女——私もこゝに其の人物の言つた言を、其のま、引用したのであるが、窈窕たる淑女のはれ着の袖を侵したのは偶然の鹿匆である。はじめは旅行案内を擲出して、それを投込んで錠を下した時に、うっかり挟んだものと思はれる。が、それを心着いた時は——と云つて垂々と額に流る、汗を拭つて——唯一瞬間に千萬無量、萬劫の煩惱を起した。如何に思ひ、如何に想つても、此の窈窕たる淑女は、正しく他に嫁せらるゝのである……ばかりでない、次か、或は其の次の停車場にて下車なさるゝとともに忽ち令夫人と成らるゝ、其の片袖である。自分は生命を掛けて戀した、生命を掛くるのみか、罪はまさに死である、死すとも此の革靴の片袖は敢て離すまいと思ふ。思ひ切つて錠を棄てました。私は此の窓から、遙に北の天に、雪を銀欄の如く刺繍した、あの遠山の頂を望んで、殆ど無邊際に投げたのです、と言つた。

——汽車は赤城山を其の巽の窓に望んで、廣漠たる原野の末を貫いて居たのであつた。——渠は電信技師である。立野龍三郎と自ら名告つた。渠は固より兩親も何もない、最愛の兒を失ひ、最愛の妻を失つて、世を果敢むの餘り、其の妻と子の白骨と、ともに、失ふべからざるもの

髪に、雪なす小手を翳して此方を見送つた半身の紅は、美しき血を以て描いたる煉獄の女精であつた。

技師は眞俯向けに、革靴の紫の袖に伏した。
乗合は喝采して、萬歳の聲が哄と起つた。

燃える、片身を火に焼いたやうに衝と汽車を出た其の姿は、却つて露の滴る如く、をめき集ふ群集は黒煙に似たのである。

「否！」

既に死灰の如く席に復して瞑目した技師が其の時再び立つた。こゝに手段があります、天が命するにあらず、地が教ふるにあらず、人の知れるにあらず、唯何ものの考慮とも分らない手段である……即ち小刀を以て革靴を切開く事なのです。……私は拒みません。刃ものは持合せました、と云つて、鞘をパチンと抜いて渡したのを、あせつて震へる手に取つて、慳相な女親が革靴の口を切裂かうとして、屹と猜疑の瞳を技師に向くと同時に、大革靴を、革靴のまゝ提げて、其のまゝ下車しようとして時であつた。

の一式、餘さず此の古革靴に納めた、寧ろ我が孤の然然たる影をも納めて、野に山に棄つるが如く、絶所、僻境を望んで飛驒山中の電信局へ唯今赴任する途中である。已に我身ながら葬り去つた身は、こゝに片袖とともに蘇生つた。蘇生ると同時に、罪は死である。否、死は尙ほ容易い、天の咎、地の責、人の制規、如何なる制裁と雖も、甘んじて覺悟して相受ける。各位が、我ために刑を撰んで、其の最も酷なのは、磔でない、獄門でない、牛裂の極刑でもない。此の片袖を挟んだ古革靴を自分にぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬の如く従はせて、其まゝ今日の婿君の脚下に拜し跪かせらるゝ事である。諾、その嚴罰を蒙りませう、斷じて自分は此の革靴を開いて片袖は返さぬのである。唯、天地神明に誓ふのは、貴女の淑徳と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、其の姿を視たのは僅に今より前、約三十分に過ぎない、……包ましくさしうつむかれた淑女は、申すまでもなく、自分に向つて瞳をも動かされなかつた事を保證する、——謹んで斷罪を待ちます……各位。

咄々として、然も沈着に、純眞に、縷々此の意味の數千言を語つたのが、轟々たる汽車の中に、恰も雷鳴を凌ぐ、深刻なる獨白の如く私たちの耳に響いた。

附添の數多の男女は、或は怒り、或は罵り、或は呆れ、或は呪詛つた。が、狼狽したのは一様である。車外には御寮を迎へる人数が満ちて、汽車は高崎に留まらうとしたのであるから……

碓氷の秋は寒かつた。

八

藤助は語り繼いだ。

「姉さんが、然うすると……驚いたやうに、

（あれ、其を見ちや不可ません。）

（やあ、つい鹿匆を。）

と、何事も御意のまゝ、頭をすくめて恐縮をしますとね、低聲に成つて氣の毒さうに、

（でも、あの、然う云ふ私が、密と出して、見たいんでございます。）

（其處で鍵が御入用。）

（え、ですけど、人様のものを、お許しも受けないで、内證で見ても悪うございませうねえ。）

（何、開けたら又閉めて置きやあ、何でもありやしませんや。）

と其の容子だもの、お前さん、何だつて構やしません。——お手輕様に言つて退けると、口に袖をあてながら、うっかり釣込まれたやうな様子でね、また前後を視ましたつけ。

（では、一寸今のうち鑄掛屋さん、あなたお職柄で鍵を拵へるより前に、手で開けるわけには参

りませんの。）

ぶる／＼ぶる……私あ、頭と嘴を一所に振つた。旦那の前だが、……指を曲げて、口を押へて、

瞼へ指の環を當がつて、もう一度頭を掉つた。それ、鍵の手は、内證で遣つても、忽ちお目玉。

……不可えてんだ、お前さん。

（御法度だ。）

と重く持たせて、

（ではござれども、姉さんの事だ、遣らかしやせう、大達引。奥様のお記念だか、何だか知らね

え。成程此奴あ、其のな、へッへッ、誰方かに向つての姉さんの心意氣では……お邪魔に成るで

ございませうよ。奥齒にものが挟まつたつて譬は此だ。すつぱり、打開けてお出しなせえまし。）

（いえ、あの、開けて出すよりか、私の中へ入りたい。）

と仇氣なく莞爾すら、チエーしたもんだ。

（御申戯で、中へ入ると、恐怖え、其の亡くなつた奥さんの骨があるんぢやありませんかい。）

（もう、私は、あの、奥さまの、其の骨に成りたいの。）

あ、其の骨に成りたいか、いや、其の骨で此方は海月だ、ぐにやりと成つた。

（御勝手だ。）

(あれ、そのかはりに奥さまが、活きた私にお成んなさる、容色は、たとへこんなでも)

(御勝手だ。いや、御法度だね。)

(そんな事を言はないで、後生ですから、鑄掛屋さん。)

(開けますよ。だがね……)

と、一つ勿體で、

(此奴あ口傳だ、見ちや不可え、目を瞑つて居ておくんなさい。)

(はい。)

(最つと。)

(不可え、薄目を開けてら。)

(まあ、では後を向きますわ。)

(引しまつて、ふつくりと柔かで、あ、堪らねえ腰附だ。)

(可厭……知りませんよ。)

と向直ると、串戯の中にしんみりと、

(あれ、一寸待つて下さいまし。いま目をふさいで考へますと、お許がないのに錠前を開けるの

は、何うも心が濟みません。神様、佛様に、誓文して、悪い心でなくつても、よくない事だと存じます。)

私も眞面目になつきました。

(でも、合鍵は拵へて下さいまし、大事にそれを持つて居て、……出来るだけ我慢はしますけれども、何うしても開けたくつてならなくなりました時に、生命にかへても、開けて見たうござい

ますから。)

晩の泊は何處だつて聞きますから、向うの峰の目脚を仰向いて、下の温泉だと云ひますとね、

双葉屋の女中だと、こゝで姉さんが名を言つて、お世話しませうと、きつい發奮さ。

御旅館などは勿體ねえ、此方人等式がと木賃がると、今頃はからあきで、人氣がなくなつて寂し

いくらる。でも、お一方——一昨日から、上州高崎の方ださうだけれど、東京にも少からう、品

のい、美しい、お嬢さんだか、夫人だか、少い方がお一方……)

「お一方？」

と、うつかり訊いて私は膝を堅うした。——小村さんも同じ思ひは疑ひない。——あの時、其

の窺窺たる御寮が、汽車を棄てたのは、彼處で、其の高崎であつた。

「然やうで。——お一方御逗留、おさみしさうな其の方にも、いまの立山が聞かせたいと、何と

なく其のお一方が、以ての外氣に成るやうで、妙に眉のあたりを暗くしましたつけ、熟と日のかげる山を視めたが、

(あゝ、鑄掛屋さん。)

と慌しい。……皆まで聞かずと飲込んだ、旦那様歸り引と……こゝらは鵜だてね、天幕の逢目をひよこりと出た。もとの山端へ引退り、然らば一服仕らう……つぎ置の茶の中には、松の落葉と朱葉が一枚……

(あゝ、腹が減つた……)

と色氣のない聲を出して、どかりと椅子に掛けたのは、焦茶色の洋服で、身の緊つた、骨格のいゝ、中古の軍人と云つた技師の先生だ。——言ふまでもなく、立野龍三郎は渠である——

(減つた、減つた、無茶に減つた。)

と、いきなり卓子の上の風呂敷包みを解くと、中が古風にも竹の子辨當。……御存じはございませぬ、三組の食籠で、疊むと入子に重る奴でね。案ずるまでもありませんや、お道姉さんが心入のお手料理か何かを、旅館から運ぶんだね。

(うまい、あゝ旨い、此の竹輪は骨がなくて難有い。)

餘り旨さうなので、此方は里心が着きました。建場々々で飲酒りますから、減多に持出した事のない仕込の片餉、油揚げの煮染に澤庵と言ふのを、もく／＼と頬張りはじめた。

お道さんが手拭を疊んで一寸帯に挟んだ、茶汲女と言ふ姿で、湯呑を片手に、半身で立つて私の方を視ましたがね。

(旦那様……あの、鑄掛屋さんが、お辨當を使ひますので、お茶を御馳走いたしました。……お盆がなくて手で失禮でございませぬ。)

と湯氣の上る處を、卓子の上へ置くんでございませぬがね、加賀の赤繪の金々たるものなれども、ねえ、湯呑は嬉しい心意氣だ。

(何、鑄掛屋。)

と、何だか、氣を打つやうに言つて、先生、扁平い肩で捻ぢて、私の方を覗きましたが、

(やあ、御馳走はありますか。)

とかすれ笑ひをなさるんだ。

(へッ、へッ。と、先はお役人様でがさ、お世辭笑をしたばかりで、此方も肩で捻向く面だ、道陸神の首を着換へたと言ふ形だてね。

(旨い。)

姉さんが嬉しさうな顔をしながら、

(あの、電信の故障は、直りましてございますか。)

(うむ、取拂つたよ。)

と頬張つた合聲で、

(思つたより餘程さきだつた。)

は、あ、電線に故障があつて、障るもの見當が着いた處から、先生、山めぐりで見廻つたんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つて来た時に、段々塗の旗竿を、北極探檢の浦島と云つた形で持つて居て、かたりと立掛けて入んなすつた。

(何うかなつて居ましたの。)

(變なもの……何、くだらないものが、線の途中に引擲つて……)

カラリと箸を投げる音が響いた。

(うむ、来た。……トーン、トーン……可し。)

お道さんの聲で、

(旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。)

一口がぶりと茶を飲んで、

(詰らぬ事を……他所へ来た電報に、一々氣を揉んで居て堪るもんですか。)

(でも、先刻、此の電信が参りました時、何ですか、お顔の色が……)

(……故障のためですよ、青天井の煤拂は下さりませんからな、は、は。)

と笑つた。

坂をするくと這上る、蝙蝠か、穴熊のやうなのが、衝と近く来ると、海軍帽を被つたが、形

は郵便の配達夫——高等二年ぐらゐる可愛い顔の少年が、丁と恭しく禮をした。

(あ、丁どいま繋つた。)

(何うした故障でございますか。)

と切口上で、然も心配をしたらしい。たのもしいぢやありませんか。

(網掛場の先の處だ、烏を蛇が捲いたなりで、電線に引擲つて死んで居たんだよ。烏が引脚へて

飛ばうとしたんだらう……可なり大な重い蛇だから、飛切れないで鋼線に留つた處を、電流で殺

されたんだ。ぶら下つた奴は、下から波を打つて鎌首をもたげたなりに、黒焦に成つて居た——

君、急いでくれ給へ、約四時間延着た。)

(はつ。)

と云つて行くのを、